阪神・淡路大震災記録集

平成７年９月

行吉学園

00096065019

寄贈

震災文庫 8－146

阪神・淡路大震災記録集

平成７年９月

神戸大学附属図書館
平成
8年10.17
No. 9606501

行吉学園

目　次

（頁）

まえがき　行吉学園を中心とした阪神・淡路大震災に関する記録集刊行にあたって　理事長・学長

阪神大震災　得たもの 失ったもの　副理事長　行　吉　誠　之

Ⅰの（1）震災のお見舞に対する緊急のお礼状
学長　行　吉　哉　女

Ⅰの（2）死去した2名の学生に対する追悼文及び新聞記事 …… 1
クラス主任：川崎チヨ子　記
クラス主任：藤平　泉　記

Ⅱ・阪神・淡路大震災の規模と被災状況
（1）地震の規模（震災の諸元） …… 10
（2）被災の概況（ライフラインと通信・交通関係） …… 11
（3）本学園の人的・物的被災の概略 …… 12
（4）物的被害の内容 …… 13

Ⅲ．神戸の地質と今回の地震　文学部教授　後藤博弥教 …… 15

Ⅳ．大震災と神戸市衛生局（初期対応の概要）
家政学部教授　宮本包厚 …… 25

Ⅴ．被災への対応
（1）被災学生並びに教職員への支援策 …… 29
（2）平成7年度一般入試への対応 …… 31
（3）地域被災者等への協力 …… 33

Ⅵの（1）学園本部・短大震災日録 …… 35

Ⅵの（２）回想　１・１７
大学学生部庶務係：永田哲朗　記　……　38

Ⅶ. 被災記録
（１）１月１７日早朝の記録　理事長・学長　……　55
（２）附属幼稚園の対応
①　地震後の幼稚園の対応等
大学付属高倉台幼稚園　園長　和田　嘉子　記　……　57
②　地震後思うこと　同上　主任　小林美佐子　記　……　64
（３）学生寮の対応
①　阪神大震災によせて
天神寮　寮監　中尾久美子　記　……　71
②　阪神淡路大震災・記録
行幸寮　寮監　近藤　誓子　記　……　76
③　大震災をふりかえって
生田寮　寮監　多田　知子　記　……　86
（４）被災者の記録　……　89
教員（大学）：渡邊正雄、林　芳子、外園一人、
村田恵子、東　紀美子
事務職員（学園本部と短大）：山本尚実、斎藤真理子、坂東節子
学　生：池田敦子、国分朋子、北村和子、川端直美、
片山恵美、稲葉　薫、西肥知子、高木裕子、
大竹由利子、石倉真知子
（５）ボランティア活動　……　135
学生：高見　彩、増田　歩、樽井美帆、木檜緑子、溝淵真弓
教員：重福京子、下村尚美
Ⅷ. 教職員および学生の被災者リスト　……　147

付記・追加事項
（１）有志によるカンパの報告
（２）有志による被災学生に対する見舞金の報告
（３）神戸市立博物館へのボランティア派遣のお礼

あとがき　編集委員長

まえがき

行吉学園を中心とした
阪神・淡路大震災に関する記録集
刊行にあたって

今回の震災に関連した本学としての記録を、記憶の新しい間にまとめておきたいとの要望が有志の間から提起されました。そこで、高橋前副学長に委員長をお願いして、編集して頂くことにしました。またお手伝い下さる委員としては、震災直後に大学に出勤して色々とご苦労くださった事務局長と数名の先生方とにお願いしました。

諸般の事情から簡略ではあるが大学を中心とした記録集の作成を先行させ、それを本年５月に刊行しました。これに引き続いて、今回は学園本部や短大の記録を追加することとしました。

前回の内容としては、（１）二名の死亡学生に対する追悼、（２）被災者の経験談、（３）悪夢の１週間（学生寮の学生の大学での合宿、事務局員の学生への対応、付属高倉台幼稚園の炊出しなどの活躍、自衛隊員の学内駐屯等）、（４）被災者リスト（学生及び職員）、（５）学生たちのボランティア活動などでした。

今回は行吉学園の立場から、大震災の規模や状況を地質的、衛生行政的立場から追加概観すると共に、建造物の被害状況やその修復状態の主なものを記録しました。さらに、被災者への対応の一環として、学園内の教職員や学生達に対して現在までに実施した経済的・社会心理的な支援についても言及しておきました。

ところで、被災された方々の精神状態については、マスコミでも取り上げられております。それは「心的外傷後ストレス症候群（ＰＴＳＤ）」と呼ばれ、

震災による心理的ショックが大なり小なり後遺症として残っています。もし被災学生の中でこのような心配のある人があれば、学生部に連絡して頂ければ、学内・外の専門の先生を紹介して、対応できる手筈になっていることを、申し添えておきます。なお、教職員の方々でも悩み事をお持ちの場合には、あまりお役にたたないかもしれませんが、遠慮なく理事長・学長室を訪問してください。

なお、今回の大震災が全く予期しないものであった関係上、いわゆる「危機管理体制」が文章化されていなかったため、色々の面で手際よく対応できなかったことは否めません。しかし、須磨離宮公園よりも北に位置する本学やその周辺地域は地盤がしっかりしていたので、その地区に在住の教職員の方々が早急に大学へ駆けつけて下さり、学生達の身の安全確保や被災状況の把握などに尽力して頂けました。それで、理事長・学長としては非常に助かりました。この機会にあらためて感謝いたします。

今回の震災は発生時刻が学生の通学中や授業中でなかった事は、誠に不幸中の幸でした。今度のような非常事態に対処するためには、学生の生命の安全を中心とした具体的なマニュアルづくりをしておかなければならないと痛感いたしました。

このような天変地異の災害に対応するたくましさを養成し、個人の力の限界を人の和で乗りこえられるように、常日頃から隣人愛・おもいやりの心の教育をしておかなければならないと思いました。

平成7年9月1日（防災の日）

理事長・学長　　行　吉　哉　女

阪神大震災
得たもの　失ったもの

行吉学園副理事長　行　吉　誠　之　記

平成７年１月17日午前５時46分、神戸を中心とする兵庫県南部を未曾有の大地震が突如として襲った。

本学園には、三宮とポートアイランドに女子短期大学、須磨には女子大学がある。地震発生時、私は芦屋の自宅でまだ寝ていたのであるが、激しい縦揺れと、すぐ後の大きな横揺れにより飛び起き、それが地震だと気付くのに暫く時間を要した程であった。その直後からの停電によりラジオ・テレビからの情報が入手できなくなった。その後道路を含みあらゆる交通手段が遮断されていること、電話をはじめとして水道・ガス等のライフラインが絶たれている状況が徐々に明らかになるにつれて、学校はどうだろうか。学生、中でも寮生や下宿生は無事だろうかと、次々に不安が募り広がってきた。

翌日、倒壊した家屋や店舗、落下した高速道路の橋げた等々の悲惨な姿を見ながら、自転車で１時間半かけて短大三宮学舎にたどり着いた。そこには、寮生と近所の被災者が約 200人、誰もが不安な顔つきで緊急避難していた。中には負傷した人や病気の人等さながら野戦病院のようであった（私は戦争を経験していないが）。寮生は食事が摂れなく困っていたので、すぐ出入りの業者を通じ、大阪からにぎり飯を配達して貰うように手配した。道路が寸断されていたので自動車が通れず、やっとバイクで届けて貰うことができた。数人の教職員が瓦礫の中を徒歩や自転車で次々に三宮学舎にかけつけ、直ちに災害対策について話し合い、学園の人的・物的被害状況の把握や、救援、応急修理にとりかかった。

人的被害としては誠に残念なことではあるが、２名の女子大学生が下宿の倒壊によって尊い生命を失った。志半ばにしての犠牲は何とも痛ましく、また、数名の教職員ご家族の方が犠牲になられたことについて、ご遺族のご心痛を察

すると胸痛む思いでいっぱいである。教職員は全員無事ではあったが、家屋の全・半壊等被災された人は、学生も含めて350人に及んだ。

物的被害としては、大学の最も古い学舎の梁が損壊し、クラックがあちこちに入った。三宮学舎は一棟が半壊し立入り禁止の査定を受けたため、取り壊さざるを得なくなった。また、ポートアイランド学舎は人工島にあるため液状化現象で、地盤が30～50センチ陥没し、グランドや学舎内の数カ所に亀裂や段差ができ、テニスコート等施設の一部及びガス・水道は使用不能となった。

講義は学生の住居や通学、学舎の安全確保等を勘案し、とりあえず１月20日までを休校とした。丁度この時期は、入学試験が近づき願書の受付も始まっていた。入学試験の場所・時期等の再検討を行い急遽それらの変更を決定した。一方、被災した入学生や在学生へは、減免等できるだけの支援をすることを決めた。

入学式はじめ新学期対策については、学生の通学の安全を確保するため、急いで応急修理計画を立て、４月までには完了しなければならず、すべての学生が安心して学べる環境を、いかにして確保するかを念頭においてのことであった。

今、こうして思い出してみると、よくあの短期間にあらゆることを立案し、判断してきたものだと思う。震災直後から学校に駆けつけ、その場で状況に応じて対処し、相談に乗ってくれた教職員に改めて感謝したい。これを機会に、教職員が互いにコミュニケーションを深め、連携し、心をひとつにして、学園の復興に力を貸してくれていることや、多くの学生達が進んでボランティアの活動に参加して学んだこと等、失うものが多かった中で、大きく得たものであり、今後の発展に必ず生かされるものと信じている。

最後に、被災された教職員・学生の方々に改めてお見舞いを申し上げ、犠牲になられた方々のご冥福を心からお祈り申し上げると共に「すばらしい街　神戸」の一日も早い復興を切に願うものである。

建帛社だより「土筆」（平成７年９月１日）より再録

Ⅰの（1）震災のお見舞に対する緊急のお礼状

この度の災害については御心配をおかけいたしました
早速に御見舞を頂き感謝いたしております
私宅では　電気は一月十八日につきました
水　は一月三十日から出るようになりました
ガスは二月八日に使えるようになりました
やっと生活が出来るようになりました
大学の学舎はB館を除いて使用可能です
電気は一月三十日からつきました
水　は一月三十日から出ました
ガスは一月三十日から使えるようになりました
しかし　交通事情が悪く通学は困難です
短大の学舎は使用できます
電気はついています
水　はまだ出ませんのでトイレが使われません
尚通学事情が悪いので今は登学はできません
学寮の建物は何れも使用可能ですが水道・ガスは整備中です
個人の宿舎はさまざまですので今調査中です　まだ細かいことはあります
が以上　現状と大略を申し上げてご厚礼を申し上げます

二月十二日

神戸市中央区北野町二―十三―一

杵　行　吉　哉　女

Ⅰの（２）死去した２名の学生に対する追悼及び新聞記事

坂田美香さんの災害死を悼んで

クラス主任　川　崎　チヨ子　記

３月７日の夜、坂田さんのお父さんから「美香の四十九日が済みました。あれからまだ全く仕事が手につかなくて…」「…なにしろ、父親っ子だったもんですから…」「神戸女子大の、美香の友達が３人、四十九日にお参りしてくれまして…」「私も一度、神戸の美香の下宿後へ参ってやりたいと思っているんですが…」など、途切れがちのような電話を受けた。思わぬ震災で、しかも遠隔の地で、愛する娘の命を失った父親の、諦め切れぬ気持ちに心が痛んだ。その『坂田美香』さんの災害死に関する情報と、残された関係者の思いを綴り、美香さんのご冥福を祈りたいと思います。

兵庫県南部地方の大地震で、教育学科３回生Ｂクラス『坂田美香』さんは、須磨区須磨浦通３丁目の、南北に２階建て、上下６部屋続きの文化住宅のような下宿屋の、１階南端の自室で、若い命を失いました。

美香さんは、17日の地震の一激で倒壊した家屋の下敷きになって埋もれたようです。避難場所に来ないので探し回った友達が、自治会やお隣の方々の協力で、翌18日、須磨警察やレスキュウ隊の手を借りて掘り出した時、既に遺体になっていたといいます。

熊本の自宅からは、美香さんへいくら電話を入れても通じないので、たまりかねて翌18日、早朝、お父さんが大阪空港経由で神戸へ向かわれた。途中自宅へ電話を入れて、美香さんの死を聞かされ、その後、何処をどのように通ったか、ともかくも歩き続けて８時間、やっと須磨へ辿り着いたと言われる。

既に区民センターに安置されていた美香さんの遺体の「あまりの酷さに気が

狂いそうでした」「全身、打撲傷で赤紫、骨まで陥没していて…」とお父さんは、後の、通夜の際に嘆き悲しみ、訴えるように語られた。

18日夜にかけて、お父さんは須磨警察署、区民センター、保健所、区役所等を駆け回り、遺体引き取りの手続きを取られた。そして19日朝、熊本から差し向けられた霊柩車で、遺体と共に自宅に帰り着かれたのは、20日の朝9時前であったという。

この間、同郷や下宿の近かった本学の学生が、いろいろと係わって事を運んでくれたようであるが、非常の際とて大学への連絡はついていなかった。20日朝、熊本に帰った学生からの電話で私も初めて知った。大災害を案じながらも、我が学生に死者が出るとは思ってもいなかっただけに、ショックは大きかった。

21日は熊本県荒尾市の中央斎場でお通夜が、22日はご葬儀が取り行われた。美香さんの美しい顔写真を中央に、蘭や百合などの見事な供花が会場を取り巻いていた。同級生や、寮や下宿の友達など、大阪空港から駆けつけた8人の神戸女子大生が別れを惜しみ、共にご冥福を祈った。若い会葬者が多く、いざ出棺となると啜り泣きは号泣となり、美香さんの名前を呼んで取り縋り、柩はしばし動けなかった。戒名は『教志院　釋尼　華香』と贈られた。

「小さい時から勉強が好きで小学校の先生になるのがこの子の夢でした」「帰省すると、私が手伝うからお母さん休んどきと言って、牧場の手伝いをよくしてくれました」「親は何とか子どもの夢を叶えさせてやりたいと、一生懸命に働いて、神戸まで出して、こんな姿で迎えなければならないとは…」など語られる全てが、断ち切りがたい美香さんへの思いで、私は「…申し訳ないことで…」と只々頭を下げ、共に涙した2日間でした。

2月14日は、美香さんの下宿がＪＲの線路に倒れ込んでいたため、その取り除きが行われた。妹さんが若い友達と4人で、遺品の受け取りに来られ、私はその後見を頼まれた。取り壊し作業の進捗に合わせ、遺品の取り出しは16日まで続き、その間、大学の学生課の関係者が取り出した遺品のとり纏めや、発送等、こまやかにお世話下さった。

3月27日、坂田さんからの「美香の居た倒壊家屋を業者が全部取り除くと言うので、分かっているうちに一度参って遣りたいと思います」との連絡があり、昼前、下宿跡で、ご両親と東京から駆けつけた兄さん、京都からの友達も一緒に落ち合い、お参りをした。後、「大学へ行ったことも無く、もう行かなくてよい」と言われたが「せっかくですから一度大学も見て下さい」とお誘いして、ご両親と兄さんを案内した。

坂田さんは行吉学長、稲浦副学長と本館玄関前でご挨拶を交わされた。学長先生の「……すみません…」とおっしゃった深いお心遣いは傍にいた私にもじーんと響いた。また、後でお父さんは「美香が、あの白い髪の先生（稲浦副学長）と一緒に写真を写していましたわ」と嬉しそうに思い出された。後、学生課長・係長が今後の必要な手続きについて丁寧にお世話下った。丁度、教育学科の3回生達が大勢通りかかり、ご両親の顔見知りの者がいたりして写真なども写し、暫く話が続いた。図書館もご案内した。お父さんがしみじみと「こんなにいい環境の大学に居て、どうしてあんな悪い下宿に入ったんでしょうかね」と独り言のように洩らされた。

3月27日、夜11時過ぎ「今、帰りました（熊本へ）。今日は有り難うございました。もう吹っ切れました」「お世話になりました。どうぞ先生お元気で…」など、ご両親からの明るい電話を受け、私なりにほっとした。

お父さん似の美人で、てきぱきとして如才無く、気さくに話し掛け、友達間の求心力のような存在であった美香さんは、この大学の卒業証書も教員免許状も手にすることなく、阪神大震災の犠牲者となって逝ってしまった。しかし今後は、多くの関係者の心の中に様々な思い出となって、その若く美しい姿のまま生き続けることでありましょう。合掌。

「親の負担軽く」引っ越し犠牲に

荒尾市出身の神戸女子大生

先生の夢半ばに無言の帰郷

「小学校の先生になる夢を果たせず、残念だったでしょう」―。十七日の兵庫県南部地震で亡くなった熊本県荒尾市宮内出目、自営業坂田正利さん(五三)の長女美香さん(二二)=神戸女子大教育学部三年=の葬儀が二十二日、同市内の白雲社・荒尾中央斎場で営まれ、志半ばで散った美香さんを偲しむすすり泣きが、いつまでも続いた。被災地の交通が混雑、遺体の搬送が遅れ、二十三日はもう初七日だ。

亡くなった坂田美香さん

神戸女子大は、激震地の神戸市須磨区にある。確認された同大生の死者は美香さん一人だけ。美香さんは地元の荒尾第一中、大牟田高から同女子大に進学、同区内の民間アパートで就寝中、地震に遭った。

家族によると、美香さんは、今年の正月を自宅で過ごし、七日、母美子さん(四六)にJR大牟田駅で見送られ神戸に戻った。十五日、知人のアパートに泊まり、十六日も泊まるように勧められたが、「十七日は早朝登校だから」と、自分のアパートに帰った。アパートは古い木造の二階建て。美香さんは一階の自室で倒壊したアパートの下敷きになった。

「美香は、昨年の夏休みの終わりに、家賃の安い現在のアパートに引っ越していた。親の負担を軽くしようとしたのが災いした」と家族。葬儀には中学、高校時代の友人ら約二百人が参列。優しくて、笑顔を絶やさなかった美香さんをしのび、合掌していた。

西日本新聞　1995.1.23(月)

追悼文

「渡邉さんのご両親への手紙」

クラス主任　藤　平　　泉　記

渡邉友美子さんんを追悼する文を書けとのことで引き受けはしたものの、何をどう書けば良いのか、日頃いささかでも文学を論じ、それを教えることを生業にしている者でありながら途方に暮れてしまいました。

渡邉さんとは、クラス主任とは言え前期に基礎講読で受け持ったことと、個人面談で、伊豆の下田出身ということで印象がある程度で、今ここで思い出を語るほど深く知っているわけではありません。クラス主任として怠慢ではありましたが、１回生の彼女が個性を出してくるのは、これからだったのです。そこで先日渡邉さんのご両親宛に私が出した手紙の一部を引用させていただくことで、渡邉さんへの追悼文にさせていただきたいと思います。

『拝啓　ようやく神戸も春らしくなってまいりました。長い長い冬でした。神戸の地には今も深い傷跡が生々しく残っております。ご両親様のお悲しみもまだ癒えるに程遠いものと拝察いたします。本当に思いもかけぬことでございました。まさか神戸の地でこのようなことが起こるなどとは誰も夢想だにしておりませんでした。地震国日本に住んでいる以上どこでも起こりうることであり、油断であったのかもしれません。今さら思ってもしかたのないことですが痛恨の思いは深まるばかりです。

ご葬儀の際には、お見苦しい所をお見せし大変失礼をいたしました。震災直後で、私の家も全壊いたしましたので着のみ着のままで神戸を飛び出しましたので、ご不快のことと思いますがお許し下さい。今回お便りいたしましたのは、友美子さんのクラスメイトからご両親宛の手紙をお届けし、私の手元にありました友美子さんのレポートも合わせてお送りする為です。かえってお悲しみをつのらせる結果になるかと思いましたが、ご両親にお届けするべきと判断いた

しました。

友美子さんは、前期においてこの学年の最優秀の学生でした。１回生を最後まで終えることができなかったことはかえすがえす残念です。短かい間でしたが、友美子さんの学生生活が楽しく有意義なものであったことを心から願っています。

震災以来既に四ヶ月になろうとしておりますが、今だに今回の事を受け入れることができず苦しんでいます。最も納得できないことは、この天災が何の理由も意志もなく、多くの罪のない人たちの上にふりかかったことです。生と死を分けたものはまったくの偶然性に支配されていました。私自身も自分の住居を失ないましたが、幸いケガを負うことはありませんでした。しかしそれは、たまたまそうであっただけで、一つ間違えば私もどうなっていたかはわかりません。亡くなった５千数百人の方々で、一人としてこのような運命に遇う必然性があった人がいたとは思われません。災害とは本来そのようなものであるのでしょうが、本当に口惜しいことです。この震災に遭ったすべての人たちにとってもそうでしょう。何の意味もなく多くの人が亡くなり、家を失い、苦しまなければならないとは、これほど理不尽なことはありません。残酷なことです。人はこのような時に転生といったことを考えるのでしょうか。

震災後初めてクラスが集合した時、私は何も言うべき言葉が見つかりませんでした。「ただ素直に自分たちの無事であったことを喜ぼう。そして生き残った者には生き残った者のするべきことがある。それを果たそう」と話し、同封しました鈴木漠氏の詩を配りました。決して出来の良い詩ではありませんが、咲き始めた神戸の桜を見ると、そこに亡くなった多くの人たちの生命が宿っていると信じたい気持ちになります。

私は東京の出身ですので、神戸に来た時、異邦人を暖かく迎えてくれる港町の良さを感じました。友美子さんのご実家の下田も港町ですので、友美子さんも居心地の良さを感じられたことと思います。そのような意味でこの詩は友美子さんを追悼するのにふさわしいのではないかと思ったのです。

色々と愚痴めいた繰り言を申しました。お許し下さい。連日不快な事件が続き、震災は早くも忘れ去られようとしています。しかし被災地にいる者にとっては、まだすべてが始まったばかりです。私自身、心の動揺が収まらない毎日ですが、今は気持ちを立て直し、自分の義務を果たす決意です。天上の友美子さんにどうかクラスメイトたちを見守って下さいと祈っております。

ご両親様にはかえってお悲しみを増すような失礼をいたしたかと思いますが、お許し下さい。どうかお身体ご自愛下さい。　　敬　具』

＜蘇れ、母なる港＞

鈴　木　　漠

すべての船と
船乗りたちにとって
港こそは
母なる存在であろう
その日　その朝まだき
大いなる地異おこり
ひとたびは死に瀕した港だが
すこしずつ
すこしずつながら
いま　蘇りつつあるだろう
瓦礫から揚がる土埃に
太陽は隠され
破れた旗が靡き
非情の雪さえ舞うときも
海より望む母なる港の

何という慕わしさ
背後の山なみの
何という懐かしさだ
幾千の死者たちの魂も
山ふところの梅林の
清楚な梅のつぼみや
川べりの桜並木の花芽に
いちはやく宿って
やがては蘇るべき海港都市の
愛するたたずまいの中へ
違わず帰ってくるはずだ
母なる港　それは
すべての者にとって
優しく抱かれ
癒されるための場所なのだ。

（朝日新聞より）

下田の女子大生犠牲に

「あんなに元気だったのに」

死亡した
渡辺友美子さん

神戸市須磨区在住で神戸女子大に通う、下田市東本郷二丁目、同市議会副議長渡辺洋之さん(五三)の長女友美子さん(一九)が兵庫県南部地震の犠牲となり、収容先の病院で息を引き取った。

渡辺さんと妻延江さん(五二)、長男の心さんは十七日午後、羽田から飛行機で現地に向かい、危篤状態だった友美子さんの看病を必死で続けたが、意識不明のまま死亡した。

友美子さんのおばの松枝美智子さんは「冬休みで帰省した時はとても元気そうだったのでこんなことになるなんて信じられない。アルバムの写真を眺めると今にも帰ってくるような気がして―」。おじの渡辺博さんは「手の掛からないまっすぐな性格のおとなしい子だったのに」と言葉を詰まらせた。友美子さんは下田北高から昨年同大に進学、将来は教師を志望していたという。

静岡新聞（夕刊）1995.1.19(木)

Ⅱ．阪神・淡路大震災の規模と被災状況

（１）地震規模

阪神・淡路大震災の規模を、気象庁発表資料より抜粋し次表に示す。

〔阪神・淡路大震災の諸元〕

(1) 名　　称：平成７年（１９９５年）兵庫県南部地震

(2) 発生時刻：１９９５年1月１７日（火）、午前５時４６分

(3) 震　源　地：北緯３４.６度、東経１３５.０度、深度２０ｋｍ

(4) 地震規模：マグニチュード　7.2

(5) 各地の震度：

〔震度７〕神戸市三宮町・京町の一部、淡路島北淡町、一宮町の一部

〔震度６〕神戸、洲本

〔震度５〕京都、彦根、豊岡

〔震度４〕岐阜、四日市、上野、福井、敦賀、津、和歌山、姫路、舞鶴、大阪、高松、岡山、徳島、津山、多度津、鳥取、福山、高知、堺、呉、奈良

(6) 余　　震：　1月18日10時までに余震717回（うち有感75回）。本震の震源をほぼ中心として、北東・南西方向約50kmにのびる線状に余震が分布している。

（２）被災状況（ライフラインと通信・交通関係）

地元の新聞等の報道機関の情報をもとに、阪神・淡路地区における被災状況を次表に示す。

〔 被 災 状 況 〕

(1) 停　電：　約130万戸が停電。ほぼ全域で仮復旧したのは１月23日(月)である。大地震発生後、復旧には約１週間を要した。

(2) 水　道：　神戸市、西宮市、北淡町など９市５町で約50万戸が断水。

(3) 電　話：　地震直後、停電でＮＴＴの交換機が停止し 280,000回線が不通に、翌18日に交換機の復旧で20万回線が復旧。残りも直ぐに復旧。

一般電話の回線状況は、電話回線復旧後も電話はほとんど通じなかった。公衆電話は多少通じ易かったとはいえ、連絡はほとんどできなかった。

(4) オンライン関連回線：

公衆回線をオンラインの予備回線としていたが、機能を果たさなかった。

専用線は使えた。回線接続の順位は、衛星回線、無線回線、専用回線および公衆回線の順である。

(5) その他（鉄道、道路の不通等）

①ＪＲ西日本：　山陽新幹線の新大阪－姫路間では、高架橋が８か所で落下し、708本もの橋脚や支柱が損傷。４月８日復旧。在来線も大きな被害を受けたが４月１日に復旧。

②阪神電鉄：「御影－西灘」間で高架橋が延べ３km崩れ、車庫内で将棋倒しになった保有車両314中、126両が被害を受け70両が修理不能。７月上旬に復旧の見込み。

③阪急電鉄：　1.6kmにわたって高架部分が崩れ落ち、支柱約500本が倒れたり亀裂が入って寸断された。６月下旬に復旧の見込み。

④阪神高速道路：　橋げたが635mにわたって倒壊し、神戸、西宮市内で計５カ所で落橋するという大きな被害を受けた。

全面復旧までには、２～３年かかる見込み。

（1995年４月28日現在）

（3）本学園の人的・物的被災の概略

人 的 被 害（平成7年度入学生は除く）

		神戸女子大学	神戸女子短期大学	高倉台幼稚園
学生	死亡者	2 人	0 人	0 人
	負傷者	1	0	1
	家族を失った者	5	0	0
	住居の全壊	53	61	1
	住居の半壊	143	58	0
教職員	死亡者	0	0	0
	負傷者	0	1	0
	家族を失った者	1	3	0
	住居の全壊	5	9	2
	住居の半壊	10	10	1

物 的 被 害（消費税を含む、工事金額ベース）

（百万円）

		建物	土地	工作物	設備	計
神戸女子大学	学舎	52	35	4	3	94
	行幸寮	5	−	1	} 1	} 19
	天神寮	2	8	2		
	職員宿舎	1	−	4	−	5
神戸女子短期大学	P・I学舎	95	70	6	6	177
	三宮学舎	230	6	1	−	237
	中山手寮	2	−	−	−	2
	生田寮	−	−	−	−	−
高倉台幼稚園		3	−	−	−	3
合計		390	119	18	10	537

注）P・I＝ポートアイランド

（4）物的被害の内容

（その1）神戸女子大学

（単位：㎡・千円）

	場所	程度	面積と金額		被害対象	被害状況（具体的に）
被害状況	建物	全壊	面積			
			金額			
		半壊	面積			
			金額			
		大破以下	面積	35,903	学舎各館 学生寮 職員宿舎	外壁・内壁・トイレタイル等ひび割れ及びガラスの破損
			金額	37,410		
		計	面積	35,903		
			金額	37,410		
	土地	被害区分	地盤沈下 地割れ		学舎周辺 グランド	B館（家政学館）及びR館（食堂棟） ……補強により修復…… 周辺の地盤沈下、グランド地割れ
		面積	9,999			
		金額	15,550			
	工作物	被害件数	10		学舎周辺 学生寮	学舎周辺のよう壁、側溝等の損壊 学生寮（行幸寮・天神寮）の外塀倒壊
		金額	19,800			
	設備	被害件数	多数		学舎等諸施設 実験器具・備品	電気施設・給排水・空調・消火配管等の損傷及び、B館（家政学館）内の実験器具・備品の損壊
		金額	100,010			
	合計金額		172,770			

（その２）神戸女子短期大学

（単位：㎡・千円）

	場所	程度	面積と金額		被害対象	被害状況（具体的に）
被害状況	建物	全壊	面積			
			金額			
		半壊	面積	5,981	学舎壁面	三宮学舎一部建物が壁面落下鉄骨がむき出しとなり補強等では復旧できない状態
			金額	179,400		
		大破以下	面積	35,173	学舎廊下ロビー等	浸水・土砂流入、土間・天井・壁のひび割れ、タイル・ガラス等の破損がみられる状態
			金額	53,150		
		計	面積	41,154		
			金額	232,550		
	土地	被害区分	液状化現象		学舎外・中庭周辺等	液状化現象により土砂流出・陥没・亀裂が多く通行できない状態
			よう壁崩壊			
		面積	25,906			
		金額	126,500			
	工作物	被害件数	多数		学舎周辺	門柱・守衛棟・サイン棟・よう壁・側溝等の損壊
		金額	13,500			
	設備	被害件数	多数		学舎内諸施設	電気施設・給排水・空調・消火配管等の損傷
		金額	25,450			
	合計金額		398,000			

Ⅲ．神戸の地質と今回の地震

文学部　教授　後　藤　博　彌　記

（１）地震の規模

①　今回の地震の概況

1995年１月17日午前５時46分、明石海峡の地下、約15キロ付近で強い地震が発生した。地震の規模はマグニトュード7.2 、淡路島や神戸では最高の震度７でたたきつけられる様な揺れに見舞われた。明石海峡の地下で始まった地殻の破壊が、その元凶である。この破壊は毎秒３キロという速さで南西から北東へ、長さにして約50キロ、深さ約15キロの範囲に一気に広がった。時間にしてわずか10数秒、まさに一瞬にして破壊されたのである。しかも震源がわずか15キロと浅かったため、急激で強烈な破壊力が街を壊滅状態にしたのだ。本学の学生２名を含む死者5,500余名、負傷した人約３万6,000、家屋損壊約16万戸、地われ、山崩れ、液状化など、あげれば数知れない。淡路島北部の津名郡北淡町では、長さ約９キロにわたって地表に断層が姿を現した。この地震断層は最も大きくずれている所で、右横ずれ2.1m、落差（東南側隆起）1.5mで写真はその現場の１例である。神戸側では、このような断層は出現していない。しかし、大きな被害が狭い地域に帯状に集中している。帯状の被害の大きい地域の下には、いままで知られていなかった伏在の活断層が走っているのではないだろうか、という見方もあり、目下研究されている。答えは数年後にでることであろう。いずれにせよ大被害の元凶は大地をゆり動かした大きな地震動である。地震動の本質を明らかにすることこそ、今後の震災対策と亡くなられた、あるいは被害を受けられた方々への最も大切な務めであろう。

② なぜ兵庫県南部地震がおこったのだろうか

あの朝、身体が放り上げられる衝撃を受けて、とっさに、あ地震だ、と思えなかったという学生の感想文が多い。どっかの国のミサイルが飛んできて爆発した、と思ったという。無理もない。まさか神戸に大地震が、とはだれもが思ってはいなかった。なるほど我々地球科学を専攻しているものからすると活断層でずたずたに切られている六甲山地を知っているので、神戸もその内大地震に見舞われるよ、とは講義中でもいってはきたが、その内が1月17日とは思ってもみなかった。

地震とは断層である。つまり断層のある所に地震がおきるといい換えてもよい。それが活断層ともなれば近い過去も、現代も、そして近い未来にも地震が、そこで発生する。神戸を含む近畿地方全体にある活断層と、そこでおこった歴史時代の大地震を示したのが第一図である。活断層の走り方が北東 ― 南西方向と北西 ― 南東方向に限られていることにご注目いただきたい。これは近畿の大地に直交する2つの系統のわれ目ができており、そのわれ目は東西からの大きな力を受けているためである。この力のおおもとは太平洋の海底を作っている厚さ約100 キロの岩盤（プレート）、太平洋プレートやフィリピン海プレートで、これが海溝やトラフから日本列島の下にもぐり込むためである。この力が右ずれ、左ずれに断層を動かし、大地震をおこすことになる。断層を動かす、つまり断層面の両側の岩盤を破壊するに必要なエネルギーがたくわえられるのに陸上では1000年以上かかることがわかっている。巨大地震ほど、この時間は長く、時には数万年にもなる。第一表をみていただきたい。この表は兵庫県が記録ののこっている約1500年間に襲われた大地震をリストアップしたものである。この中には神戸付近を震源とした大地震（M7以上）はない。つまり、約1500年間、活断層の地下には大きなエネルギーがたくわえられていたことになる。だから何時地震がおきてもおかしくない危険な状態にあったのである。うすうす感じていながら国

も県も市も、そして我々自身も油断をしていた。しかし、その代償は余りにも大きい。

③　地質からみた神戸という街

第２図の(1)は今から110年前の神戸市東部の地形図で、(2)は今年の大震災後のほぼ同じ地域のものである。黒い部分はいちじるしく震災を受けた場所を示している。この二枚を比較してみると、なぜ今回の地震で大きな被害を被ることになったのかわかる様な気がする。海と山にはさまれた細長い神戸、実は大地震の繰返しが、このような自然条件を作ったといえる。御存知のように六甲山地は主として花崗岩類の岩石でできている。この岩石は地下数10kmの深い所で作られた深成岩である。この岩石が約1000m近い高い山を作っている。理由はどんどん上昇したからにほかならない。実は、このどんどん上昇させた原動力が大地震で、地面を持ち上げたのは、その際に出来た断層である。今回、淡路島に出現した野島の地震断層はこの一例といえる。六甲山地は逆断層 ― 古い岩石が新しい地層の上にのし上る運動 ― の繰返しで高くなった。上昇する山からは多量の砂礫が、けずり取られ、山麓から海岸にかけて運び出された。花崗岩類は風化しやすい岩石である。砂礫の供給にはことかかない。山から谷川によって運び出されたぼう大な砂礫は、それぞれの谷の出口を扇のかなめに扇状地を数10万年前から作りつづけてきた。その上を川が流れ、そのほとんどが川岸の両側に土砂を運びのこした自然堤防を作り、天井川となって高い所を流れている。海岸沿いでは砂浜が発達し、三角州や砂州と呼ばれる地形がみられ、またそれらの背後には軟弱な堆積物からなる後背湿地が分布しており水田として利用されていた。神戸という街は、こんな所に発展してきた。発展は海上にまで人工の埋立地を作り、活動拠点を広げてきた。そこえ、今回の地震である。地震のゆれに対する地盤の強弱が場所ごとにかなり違うことが以上の大まかな説明からもおわかりいただけよう。ここでもう一度、神戸の地質をま

とめておこう。神戸は花崗岩類からなる六甲山地を中心に、垂水区、北区、西区や須磨区の北部には、神戸層群、大阪層群、高位段丘堆積物など、より古い地層群が分布し、六甲山地から離れる程新しくなっていく。一方、須磨区から東灘区の南東側には最も新しい沖積層が分厚く堆積し、山麓の１部に大阪層群がみられるほか、より古い地層群はすべて地下深くに分布している。つまり六甲山地の上昇にともなって北西側は引きずり上られ、東南側は大阪湾と共にどんどん沈降していったといえよう。神戸の地質は六甲山地をはさんで非対称なのである。

④　もう神戸には大地震はこない

あの１月17日から6 ヶ月余が過ぎた。ぼつぼつあの日の恐怖が遠のきつつある。しかし、意識と身体はしっかり憶えていて、若し地震が来たらと夜ねる前に枕元に懐中電灯や非常持出し袋を置いたりする。もう、あんな恐ろしい地震はこないのだろうか。今回の様な内陸直下型の地震は数百年間はこない、といえる。前に「地震とは断層である」とのべた。活断層があると、そこでは必ず地震が起こることがわかっている。どの位の間隔を置いて地震が起こるかを知ることが実は我々にとって切実な問題である。それには活断層の過去の履歴を調べるのが手取早い。具体的には断層のずれの量とその年代を知ることである。その結果わかったことは大地震の際に地表にあらわれる地震断層は、同じ向きの土地のずれを、過去に数十回あるいは数百回も、ほぼ同じ間隔で繰り返していると考えられることである。過去とは数十万年かせいぜい百万年程度（第四紀という時代、それも後期）で地質年代ではごく新しい時代に相当する。次に、ほぼ同じ間隔で起るその間隔は活断層の長さや変位の度合（平均変位速度）によってことなる。例を今回の地震で動いた野島断層にとってみよう。過去の履歴からこの断層は1000年で垂直方向に50cm位、右ずれ方向に約１m位の平均変位速度が明らかにされている。今回の地震ではどれだけ変位したであろうか。野島断層は、ほぼ1000年分動いて

しまったといえそうである。 それはもう少しきびしくみても数100年分のエネルギーを発散させてしまったといえないだろうか。神戸に直下型の大地震がこないと書いたのは、こんなことであった。

⑤ しかし、地震はやって来る。

直下型の大地震はこなくても神戸に被害うおよぼす地震はしばしばやって来る。まず第一表をごらんいただきたい。この表は前にもあげた我が国で地震の記録が残された約1500年間に兵庫県が被った被害地震（震度階Ⅴ以上）の一覧である。この中から神戸を襲った被害地震に○印をつけてみた。何と 599年以来約1400年間に14回も襲われている。つまり、100 年あまりの間に一回は必ず被害地震に出合うことになる。これをもう少し分析してみよう。過去14回の地震は発生した場所によって内陸で起こったもの（内陸型）と海溝（トラフ）で起こったものに大別される。前者を黒丸で示すと、このタイプは近畿地方や中部地方に走っている活断層を震源としているため発生間隔がばらばらである。しかし、前にものべたように一つの活断層で再び動いて大地震をおこすには数 100年から1000年以上の時間が必要である。そういう意味から例えば表中５の貞観10年の播磨大地震などは、発生してから1100年余りの時間がたっている。もうそろそろと思われる。一方、白丸で示したトラフ型の地震は直接、プレートの沈みこみにともなう歪みの解放が地震を起こすため、割合規則的に発生する。その発生間隔は 100～ 200年とみてよい。そうすると神戸にとって一番新しいトラフ型の地震は1946（昭和21年）の南海地震である。その前は1854年の安政南海地震であった。92年後に南海地震が起こったわけである。あれから約50年がすぎた。あと40年、しばらくは大丈夫だろう。が東海沖でもし大地震が発生すると連鎖反応で早まるかもしれない。過去にそういう例があったから。

⑥ 防災は減災

以上、みてきたように被害をおよぼす地震は、そう遠くない時期にや

ってくるということがおわかりいただけよう。それまでに神戸はあらゆる面で防災化されるはずである。しかし、問題は私達個人である。地震は１月17日のように早朝くるとは限らない。いつ地震に襲われてもそれに対処出来るようにしたい。それには地震を出来るだけ正しく理解し、第一に生命を守ること、第二に震災を減災にする生活習慣を身につけたいものである。繰り返すようではあるが、一瞬にして建物がつぶれる様な大地震は当分の間、神戸にはこない。

文中で引用した表や図の文献

○後藤博彌・寺島　敦（1897）西播磨新都市に係る基礎的耐震考察、兵庫県企業庁

○大日本帝國陸地測量部　２万分一之尺神戸、明治20年製版

○国土地理院　25000万の１地形図、神戸首部　平成７年５月16日発行

	発生年月日		震央		M	備考
F 1	599- 5-28	推古 7-4-27			7.0	大和（奈良を震央と仮定）
F 2	701- 5-12	大宝 1-3-26	135.4	35.6	7.0	丹後
F 3	745- 6- 5	天平17-4-27	136.6	35.5	7.9	美濃
F 4	827- 8-11	天長4-7-27	135.6	34.9	6.7	京都
FO● 5	868- 8- 3	貞観10-7-8	134.8	34.8	7.1	播磨・山城
FO 6	887- 8-26	仁和3-7-30	135.3	33.0	8.6	五畿七道
F 7	938- 5-22	承平（天慶1)-4-15	135.8	34.8	6.9	京都・紀伊
F ○ 8	1096-12-17	嘉保3(永長1)-11-24	137.3	34.2	8.4	畿内・東海道
F ○ 9	1361- 8- 3	正平16-6-24	135.0	33.0	8.4	畿内・土佐・阿波
F 10	1449- 5-13	文安6(宝徳1)-4-12	135.6	35.0	6.4	山城・大和
F ○11	1498- 9-20	明応7-8-25	138.2	34.1	8.6	東海道全般
F 12	1510- 2-25	永正7-8-8	135.7	34.6	6.7	摂津・河内
F 13	1579- 9- 5	天正7-1-20	135.5	34.7	6.2	摂津
F ●14	1596- 6-16	文禄5(慶長1)- 閏7-13	135.7	34.8	7.0	京都・畿内
F ●15	1662- 6- 5	寛文2-5-1	136.0	35.3	7.6	山城・大和・河内・和泉・摂津・丹後・若狭・近江・美濃・伊勢・駿河・三河・信濃
M ○16	1707-10-28	宝永4-10-4	135.9	33.2	8.4	五畿七道、宝永地震
F 17	1751- 3-26	寛延4(宝暦1)-2-29	135.4	35.0	6.4	京都
M ○18	1854-12-23	嘉永7(安政1)-11-4	137.8	34.1	8.4	東海・東山・南海諸道 安政東海地震
M ○19	1854-12-24	嘉永7(安政1)-11-5	135.6	33.2	8.4	畿内・東海・東山・北陸・南海・山陰・山陽道 安政南海地震
FO 20	1864- 3- 6	文久4(元治1)-1-28	134.8	35.0	6.4	播磨・丹波
M ●21	1891-10-28	明治24	136.6	35.6	8.4	愛知県・岐阜県、濃尾地震
FO●22	1916-11-26	大正5	135.0	34.6	6.3	神戸
MO 23	1925- 5-23	大正14	134.8	35.7	7.0	但馬北部、北但馬地震
MO●24	1927- 3- 7	昭和2	135.1	35.6	7.5	京都府北西部、北丹後地震
MO 25	1943- 9-10	昭和18	134.2	35.5	7.4	鳥取付近、鳥取地震
M ○26	1946-12-21	昭和21	135.6	33.0	8.1	南海道沖、南海地震
FO 27	1949- 1-20	昭和24	134.6	35.6	6.5	兵庫県北部
M 28	1952- 7-18	昭和27	135.8	34.5	7.0	奈良県中部、吉野地震
F 29	1961- 5- 7	昭和36	134.4	35.1	5.9	H＝40km 兵庫県西部
M 30	1963- 3-27	昭和38	135.8	35.8	6.9	福井県沖、越前岬沖地震
F 31	1984- 5-30	昭和59	134.6	35.0	5.6	兵庫県南西部
●32	1995- 1-17	平成7	135.0	34.6	7.2	兵庫県南部地震

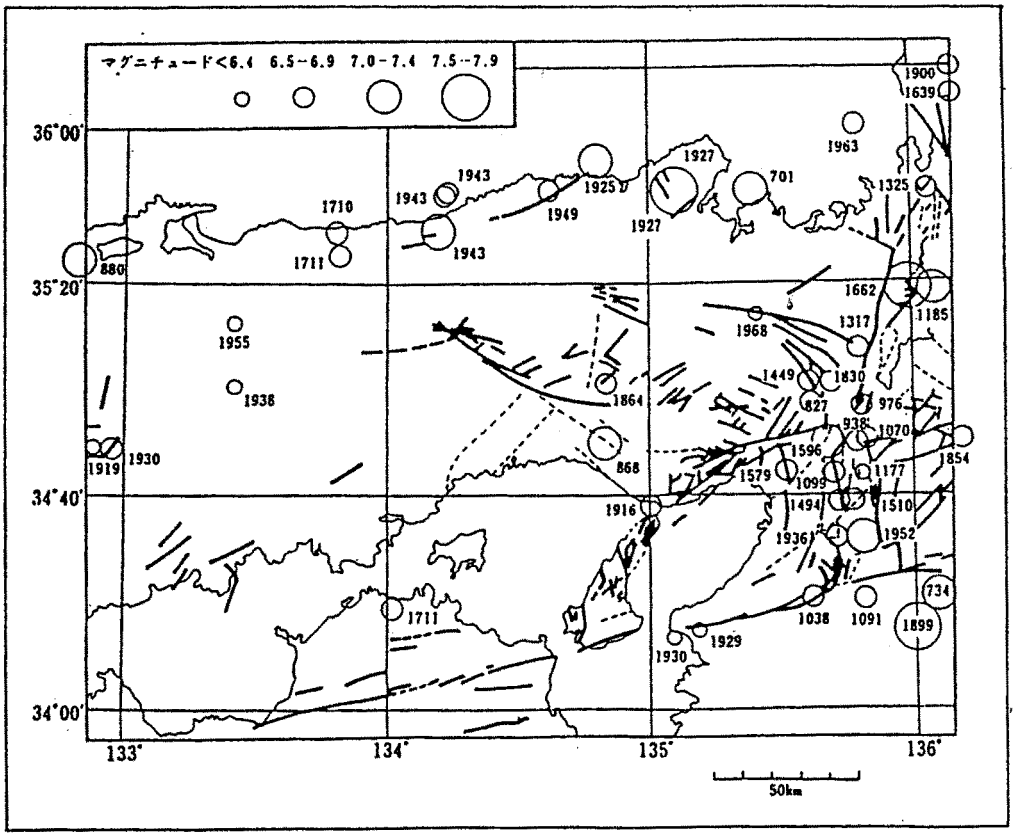
（註）地震番号欄記号

F：式(1)、(2)によって県下に震度Ⅴ以上を与えたと推定された地震。

M：震度分布図または推定震度分布図から県下に震度Ⅴ以上を与えた地震

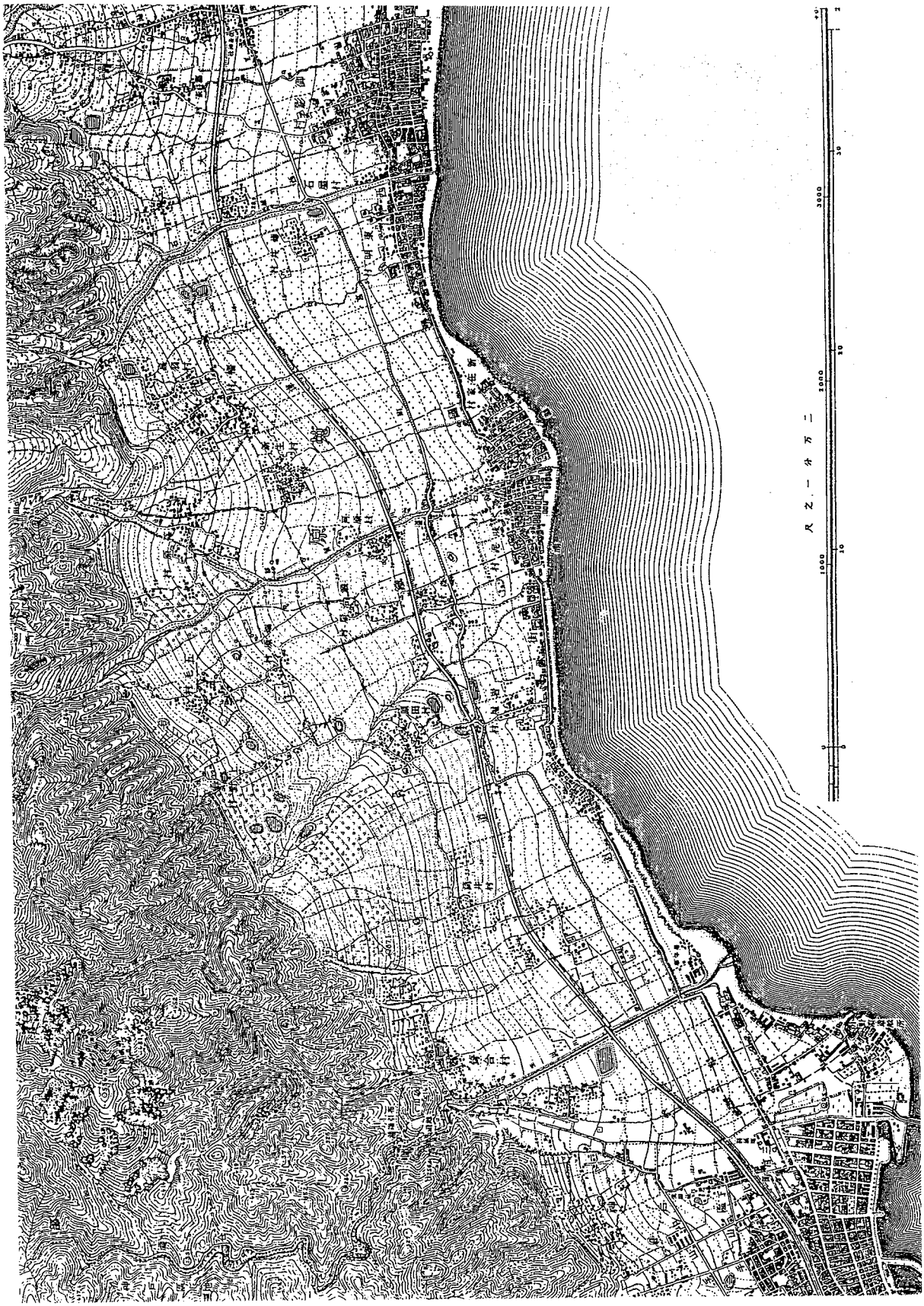
O：県下に震度Ⅵを与えた、または与えたと推定された地震。

（後藤・寺島1987）



第１図：近畿地方の断層分布と歴史地震の震央分布・数字は地震の発生年

（後藤・寺島1987）



神戸1／2万　第2図（1）

神戸首部1／2．5万　第2図（2）

公衆衛生　Vol.59　No.7より再録

Ⅳ．大震災と神戸市衛生局

初期対応の概要

神戸女子大学　家政学部教授　宮　本　包　厚
（前神戸市衛生局長）

1月17日早朝，神戸市西部の自宅で激しい縦揺れで目覚めた。屋内は滅茶苦茶だったが，周辺の家屋に外観的な被害はなく，また，道路に陥没，亀裂などもなかった。

午前7時半ごろ，三宮駅北側で市役所まで徒歩40分の所で車を降りた。歩く途中，傾いている木造家屋を見かけた。加納町3丁目の交差点を南に曲がり，歩道と車道の広範囲な沈下（約30cm）に気付いた。前方を見ると9階建てのビルがピサの斜塔のように道路側に傾いていた（このビルは翌日倒れた）。自宅周辺の状況からは想像もできなかった災害の規模を自分の目で確認するため，三宮周辺を小走りで見て回り，ビル・木造家屋の倒壊など，被害の深刻さに驚くとともに，1）築後25年の西市民病院や市内医療機関の安否，2）家屋などの倒壊による負傷者に対する救急医療，3）避難者に対する医療の確保などが頭に浮かんだ。

9時過ぎに市役所1号館6階の衛生局に着いた。本庁職員100人余のうち，5人ほどが出勤しており（午後にかけて20人余に増加），この態勢で衛生局災害対策本部の第1日目が始まった。

以下に，地震発生後10日間の衛生局の対応のごく一部を項目別に簡単に記す。

■西市民病院の崩壊

各施設の被害状況を調べるように指示したが，電話不通のため医療機関の状況把握が困難であった。9時半過ぎ，西市民病院5階西病棟の天井が崩落し患者44名，看護婦3名が閉じ込められていることと別館の救急外来に多数の負傷者が被災地から運ばれていることを知った。病院近くの長田保健所に男性職員を患者救出の応援に出すように指示した（午前中に看護婦3名救出）。午後1時半に消防局レスキュー隊，2時半に自衛隊が入り，救出活動本格化。午後12までに患者43名救出。翌日死亡者1名収容。一方，被害の少ない地域の病院に電話をし，入院患者の転院と救急外来患者の入院に必要な病床確保に務めた（当日在院患者250名中133名を16病院に転送，ほかは退院。外来患者67名を8病院に搬送）。移送に必要な車は主として公用車，福祉タクシー，市バスなどを用いた。この間，自転車，バイクなどによる出勤職員の話から東灘区の1病院の崩壊，兵庫区で1病院の全焼を知った。

■医療機関に対する緊急支援

市内医療機関の救急外来については断片的な情報は保健所などから入るが，負傷者の症状などの詳細が不明であり，医療機関からの何らかの要請を待つ状態であった。

例えば，午前11時ごろより断水などのため院内調理が不可能な病院から入院患者に対する給食要請が続き，岡山市の業者に9,500食を発注した。翌18日未明，自衛隊ヘリコプターで王子競技場に運ばれた弁当を5台の車で25病院に配送した（19日以降は業者が陸路各病院に配達）。

同時刻より，人工透析などに必要な水の供給要請が続き，水道局に医療用水の確保を依頼した（給水車を配車）。一方，市民からの人工透析の問い合わせが増え，透析可能な医療関係のリストを作成し，報道機関に提供した。

その間，倒壊した民間病院から入院患者の収容先確保の要請があり，消防局救急隊と連携し兵庫県，大阪府下の6病院へ70名余の患者転送

を支援した。

また，21日ごろより医療機関などから医師・看護婦の派遣要請があり，登録医療ボランティアを送った。

■避難所の医療確保

17日，被災6区の保健所に医療確保のため救護班の設置を指示し，また，そのために医師など保健所職員の応援体制をしいた。午後6時過ぎに日赤救護班3班が到着した後，深夜にかけ県立病院，近隣自治体・日赤病院などの医師・看護婦計17班を迎えた。この時点では避難所の詳細は不明であった（翌18日現在，避難所582ヵ所，避難者222,127人)。各救護班には被害の大きい6区を分担し，それぞれの保健所の指示で区内の避難所を巡回するようお願いした。各保健所には救護班を避難所に案内するように指示した。保健所への案内のため本庁職員が救護班の車に同乗した。

その後も多くの自治体，大学などから救護班派遣の電話をいただき，18日に21班，19日に33班を各区に送った。救護班の増加と1,000人以上規模の避難所が多数あることから，19日に，各区5～6ヵ所の避難所に常駐救護所を設置し，他は巡回救護班とするように指示した（1月31日現在，避難所565ヵ所のうち常設救護所135ヵ所，うち38ヵ所は24時間対応。巡回救護班19班)。また，自衛隊による救護所が早期より順次設置された。

なお，市内宿泊施設のほとんどすべてが被害を受けており，有馬の3施設で食事なしの素泊りという条件で救護班宿泊の予約がとれた。しかし，人数に限度があり宿泊所確保には困った。19日になって，運輸省などの配慮で，「おりえんとびいなす号」（宿泊可能人員：約1,000人）が20日から1月末まで神戸港岸壁に着き，救護班などの宿泊施設として利用できることになり本当にありがたかった。

救急医薬品などは自治体送付分と本市発注分を分類・整理し，17日夜から各保健所に配送した。19日には厚生省分が届いた。

この間，アメリカ医療団の来神意向を知り，外国人医師の日本国内での医療行為につき兵庫県，厚生省に問い合わせ，厚生省より1月23日付で「……緊急避難的行為として認め得るものと考える。」という事務連絡を得た。その後，数ヵ国の医療団が救護活動に従事した。

歯科医療については，県・市・他府県歯科医師会の協力を得て，1月22日から歯科診療施設，避難所，巡回診療車で実施され，2月2日からは大学歯学部も加わった。

一方，保健所の保健婦など保健課職員は巡回救護班の案内のほかに，震災前に把握していた在宅要介護高齢者の安否と所在の確認，さらに，救護班と連携して避難所における保健活動および要介護高齢者の実態把握などに務めた。避難所の高齢者については民生局などと協議し，2月6日より「保養センターひよどり」，須磨荘などに緊急一時受け入れ施設を順次開設した。

■避難所におけるインフルエンザ対策

本市では震災直前に患者検体からA香港型インフルエンザウイルスが分離されており，避難所での流行が懸念され，マスクと「うがい薬」を大量に発注した。1月22日午後，ある避難所でインフルエンザ流行との情報を得た。直ちに当該避難所に行き，20～30人に症状を聞いた。風邪で発熱している人は多かったが，典型的なインフルエンザの症状を示す人はみられなかった。この日，厚生省から26,000枚のマスクが届き，24日に「うがい薬」とともに全避難所に配布した。

24日午後，国立予防衛生研究所の山崎所長よりインフルエンザ流行の実態調査について電話があった。調査をお願いしたところ翌25日に来神され，25，26の両日2,000人以上規模の避難所3ヵ所の調査から，「現時点ではインフルエンザの患者発生は散発的なものに止まっていると考えられる」との中間報告を得た。ワクチンの接種については，厚生省・国立予防衛生研究所で検討していただくようにお願いした（1月29日～2月16日，65歳以上の希望者1,649人に接種)。

■避難所の衛生確保

避難所の衛生確保は食中毒，伝染性疾患の発

生予防のために重要である。17日に出勤した保健所の衛生課職員は西市民病院への応援，その後３日間は衛生活動のほかに保健課職員と協力して，到着する救護班の避難所への案内や医薬品の避難所への配送に忙殺された。

20日ごろから避難所のトイレに関する苦情が保健所に入りだした。保健所によって異なるが，このころから本格的に衛生確保に取り組み，すべての避難所にトイレ用消毒液，手指用の消毒液を配布し，使用方法を図示した。さらにリーフレットなどにより，避難所施設の管理者，自治会などに対し納入食品の製造日時の確認と適正な保管・管理について，また，ボランティアによる炊き出しの際の食品の取り扱いなどについて詳しく説明した。

一方，弁当などの納入業者のほとんどが市外・他府県であるため，管轄自治体に業者の指導を要請するとともに，配送時間の短い市内業者への転換を促進するため，弁当業者の復旧情報を避難所担当部局に随時提供した。

24日からは他都市の防疫班の応援を得て避難所の便所・仮設トイレなどの消毒をいっそう徹底し，避難所全般の衛生確保に務めるとともに，上水道の復旧に伴い下水管破損部からの汚水の漏出も懸念されるため，市内の環境衛生全般の把握に務めた。

■緊急火葬業務

死亡者の火葬は１月28日までに終了しなければならなかったが，神戸市民の犠牲者は数千人規模になると予想された。市営斎場も被害を受けたが，火葬業務に支障はなかった。しかし，市営３斎場の火葬炉は合計51炉で，火葬能力は最大限１日150件であり，本市斎場のみでは不可能である。厚生省，兵庫県の協力を得て兵庫県，大阪府，京都府，岡山県下市町の斎場の使用が可能となった。遺体の搬送には自衛隊（ヘリコプター５機，トラック48台），民間ボランティアの車などの協力を得たほか，兵庫県警にはパトカーの先導をお願いした。

１月19日から市営３斎場はフル稼働に入り，21日より他市町での火葬が始まった。火葬業務には衛生局関連施設の職員も加わった。東方面への搬送は交通渋滞のため困難を極めた。例えば，遺体に同行して午前11時に灘区から京都市斎場に向かった職員が帰庁したのは翌日午前４時であった。各地斎場職員には大変お世話になった。ある斎場では市長が，ある斎場では市幹部が食事を用意して遺体・遺族を丁重に迎えてくださった。また，ボランティアの方の機転で，救援物資とともに送られた多くの花が市営斎場に運ばれ，被災時のままの服装の遺体の側に添えられた。

この度の災害では，支援をいただいた多くの方々の思いやりのあるご厚情に触れる機会が多く，たびたび涙腺の筋肉が緩む思いをした。

１月31日，一部の遺体（斎場は予約済み）と身元不明者など34人を残し，おおむね緊急火葬業務は山場を越えた（１月18～31日の火葬合計：市営斎場2,181体，他市町斎場380体）。そのほか，遺族による他都市斎場での火葬は広域にわたり全国規模で行われた。なお，家屋を失い遺骨を保持して避難所生活をされている遺族に対し，舞子墓園内納骨堂で遺骨を一時預かりする制度をつくった。

■浴場の確保

公衆浴場も大きな被害を受けていると思ったが，当初は調査をする余裕がなかった。１月20日に兵庫区内の公衆浴場が井戸水を使って営業を再開し，利用者は長蛇の列をつくった。22日に自衛隊よりの申し出があり，25日から２月３日にかけ野営風呂が16ヵ所の避難所などに設置された。

一方，25日から保健所が公衆浴場の実態調査をし，市内194施設中116施設（60％）が全壊・全焼，または半壊であることが判明した。断水（１月25日現在の既通水戸数は282,600戸で全市の43.5％）とガス供給の停止により多くの市民の自家風呂も使用不能のため，水・燃料が供給されれば営業可能な浴場に対し，27日よりタンクローリーによる給水と燃料の斡旋を実施し，１月末に19施設，２月３日には30施設が営業を始めた。さらに，27日より厚生省，兵庫県の支援により，通水した避難所に仮設温水シャワーを順次設置するとともに，ゴルフ場を含めた民

間施設に浴場の一般開放を要請し，２月３日には20施設が市民に利用された。

■おわりに

衛生局の初期対応の一部を列挙するにとどめた。現在，衛生局では震災後の詳細な記録の作成作業を進めており，今回の経験を踏まえた広域大規模災害時の救命救急対策，救護班の設置・運営，埋火葬体制，その他多くの課題について検討されることと思う。

１月22日に政府の現地対策本部が兵庫県公館に，23日に厚生省現地対策本部が国立神戸病院に設置された。さらに，25日には火葬業務の円滑な推進のため厚生省と神戸市が共同で相談窓口を衛生局に設置した。それぞれ，予算要望，保健・医療，および緊急火葬業務で大変お世話になった。特に，厚生省現地対策本部の方々が本市との連携を密にされ，衛生局の対応についてご理解を賜わり厚く感謝している。また，多くの分野でご支援をいただいた自衛隊，兵庫県をはじめ多くの自治体，日本赤十字，大学，民間ボランティアの方々に心からのお礼を申し上げるとともに，常に市民の立場で考え，誠実に行動した衛生局全職員に感謝している。

復興の槌音は確実に聞こえてきているが，５月11日現在，なお32,800人余の方々が367ヵ所の避難所で生活されている。今後，梅雨，夏を迎え，仮設住宅に住む高齢者などを含めた被災者の心身の健康維持・増進，衛生確保が大きな課題であり，衛生局職員のいっそうの努力を願っている。

V．被災への対応

（1）被災学生並びに教職員への支援策

① 学納金の減免措置について

阪神・淡路大震災で自宅が全壊（全焼）又は半壊（半焼）した本学園の学生及び園児（平成6年度卒業生を除く、平成7年度入学生を含む）に対し、入学金及び平成7年度前期授業料を免除する。

② 弔慰金及び見舞金について

阪神・淡路大震災で被災した本学園の学生・園児及び教職員に対し、下記の通り弔慰金及び見舞金を支給する。

記

<table>
<tr><th>事　　項</th><th>学生（園児を含む）</th><th>教　職　員</th></tr>
<tr><td>1．本人の死亡</td><td>3万円</td><td>10万円</td></tr>
<tr><td>2．家族の死亡（1人）</td><td>1万円</td><td>3万円</td></tr>
<tr><td>3．自宅の全・半壊
（取りこわし等も含め住居喪失）</td><td rowspan="2">災害見舞金として
一律3万円</td><td>基本給の1ケ月
（単位　万円）</td></tr>
<tr><td>4．下宿等の全・半壊で居住不能</td><td>基本給の0.5ケ月
（単位　万円）</td></tr>
</table>

③　被災学生への支援の実態（５月10日現在）

①　平成７年度入学者に係る入学金・授業料の減免

神戸女子大学（入学金400千円、前期授業料300千円）……27人

神戸女子短期大学（入学金350千円、前期授業料300千円）……63人

高倉台幼稚園（入園料 40千円、保　育　料117千円）…… 3人

②　平成７年度在学生に係る授業料の減免

神戸女子大学（前期授業料300千円）…… 112人

神戸女子短期大学（前期授業料300千円）……　70人

高倉台幼稚園（保　育　料117千円）……　2人

（２）平成７年度一般入試への対応

受験日と受験場を次の様に変更して、受験生の便宜をはかった。

(1) 神戸女子大学

選考日 …… 2月3・4日 ⇨ 3月4・5日

選考場所　神戸女子大学⇨神戸会場　神戸女子大学

大阪会場　コンピュータ日本学院

(2) 神戸女子短期大学

選考日 …… 一般選考（A）

2月5・6日 ⇨ 2月11・12日

被災者のために一般選考（B）　3月12日

選考場所　神戸女子短期大学⇨神戸会場　神戸女子大学

大阪会場　コンピュータ日本学院

（注）：大阪会場を準備したのは、前記の様に交通機関が利用できない受験生の便宜を考慮しての措置であった。
また、神戸女子短期大学への交通機関であるポートライナーは不通となっていたので、神戸女子大学（須磨）を臨時に受験場とした。

平成７年度　入試要項（一般選考）

	神戸女子大学	神戸女子短期大学	
	一般選考	一般選考（A）	一般選考（B）
願書提出期間	平成７年１月10日（火）から 平成７年２月24日（金）まで （消印有効）	平成７年１月17日（火）から 平成７年１月27日（金）まで （消印有効）	平成７年２月20日（月）から 平成７年３月７日（火）まで （消印有効）
選　考　日	平成７年３月４日（土） 国文・英文・史学 平成７年３月５日（日） 教育・家政学部	平成７年２月11日（土） 家政（栄養・一般） 平成７年２月12日（日） 服装・初等教育	平成７年３月12日（日）全学科
選考場所	神戸会場 …神戸女子大学 大阪会場 …コンピュータ日本学院 （新大阪駅　駅前）	神戸会場 …神戸女子大学 大阪会場 …コンピュータ日本学院 （新大阪駅　駅前） ＊受験生は希望会場を自由に選択する。	神戸会場 …神戸女子大学 大阪会場 …コンピュータ日本学院 （新大阪駅　駅前） ＊受験生は希望会場を自由に選択する。
合格発表日	平成７年３月14日（火）	平成７年２月21日（火）	平成７年３月20日（月）
入学手続締切	平成７年３月31日（金） ＊学納金は 締切日までに一括納付	入学金 …平成７年２月28日（火） その他学納金 …平成７年３月17日（金）	平成７年３月31日（金） ＊学納金は 締切日までに一括納付
照　会　先	庶務課　入試課 ０７８－７３１－４４１６	庶務課　入試課 ０７８－３０３－４７００	庶務課　入試課 ０７８－３０３－４７００

（3）地域被災者等への協力

1月17日の夕刻頃、避難者数人が本学を利用したいと申し出て来ましたが、既に寮や下宿の学生が多数避難してきている事情もよく説明した上で、行政で用意している避難所である「西須磨小学校」や「高倉台中学校」に避難して頂くように、丁寧にアドバイスする一幕もありました。

① 自衛隊員に短期駐屯の場を提供

ところで18日の午前0時頃に、須磨区役所より次の様な電話がありました。それは須磨地区で震災によって行方不明になっている人達を捜すためと救援活動のために、陸上自衛隊員が派遣されてくるので、数日の滞在（グランドにテントを張る）と多数の車両の駐車の為に協力してほしいとの依頼であった。宿直中の教職員で協議の上、申し入れを受諾することとした。ただし、1月26日には学生が登学してくる予定であるから、25日中には退去してもらうことを条件とした。

この自衛隊員は青野原駐屯の第八高射特科群に所属しており、青野原を出発してから8時間もかかってやっと到着した。それ程交通渋滞がはげしかった訳である。

当初は避難して来た学生を体育文化ホールに受け入れる予定であったが、地震の時に天井から若干の落下物があったので、学生の避難場所にはD館とM館を当てた。

事務局長の判断で、自衛隊員 290名の宿泊はグランドにテントを張るのではなく、体育文化ホールを利用してもらうことになった。

20日には岡山勝田郡の戦車大隊 120名も加わった。先の 290名の部隊は22日に退去し、後続の部隊もその2日後に帰っていった。自衛隊員達は実に整然と行動し、後味の良い印象を与えてくれた。

大学サイドでも事務局長の配慮で、学生食堂のパンやおにぎりの差し入れを行ない感謝された。町の被災者にとっては、自衛隊の活躍が何よりも

頼りであったので、大学としても間接ながら被災者のお役に立てたのである。

なお後日、自衛隊から上司の方がわざわざ記念品や写真を携行して、お礼の挨拶に来られたことを記録しておきたい。

② 三宮学舎への避難者受け入れ

今回の震災被害の中心部であった三宮では、約 200名の行き場のない罹災者からの依頼で、やむなく理事長は緊急の避難場所として三宮学舎の利用を了解された。

ところで、短大の講義再開を計画する中で、ポーアイ学舎への唯一の交通機関であるポートライナーの復旧の見通しがつかない事が判明した（やっと復旧したのは７月31日）。なお、ポートライナー行きの代替バスは１月24日から税関前～市民病院前間に運行が開始され、さらに２月20日からは三宮そごう北から、また27日からは市役所前より市民病院前までの運行となった。しかし、その利用には寒空の下で長蛇の列をつくる羽目となった。

そこで理事長としては、三宮学舎を臨時に短大の講義に使用する様に計画された。ところが、避難者の移動が思うようには進まず、理事長は非常に苦慮された。ちなみに避難者の移動が完了したのは５月24日であった。

『今回の様な非常事態に際して、外部にご迷惑をおかけするのではなくて、少しでも地域住民の方々のお役に立てたことは感謝すべきでしょうね』との理事長のお言葉にずしりとした重いものを感じました。

Ⅵの（１）学園本部・短大震災日録

（平成７年１月17日～３月末日）

１月17日（火）・〈大学〉天神寮・行幸寮の寮生及び大学周辺の下宿生が、大学・新本館へ避難。教職員10名余出勤、被災に対処。

・〈短大〉生田寮の寮生及び地域住民（ 100名）が、短大・三宮学舎に避難。

・水道・電気・ガス使用不可能・電話も通話は難しくなる。

１月18日（水）・理事長、副理事長他、幹部教職員が、短大・三宮学舎に集合、教職員の安否など情報交換すると共に、次の事を決定。

①大学・短大とも、１月25日まで休講。

②一般入試など、今後の対策会議を１月22日に短大・ポートアイランド学舎で開催。

・短大・三宮学舎に避難中の学生を、短大・中山手寮へ、移動。寮生に帰郷を促す。

・学舎、学生寮等の被害状況の情報収集と、短大・ポーアイ学舎の踏査。

・大学・多目的ホールを自衛隊の支援基地に提供。

・電気復旧（Ｐ・Ｉ学舎）

１月19日（木）・大学・新本館に避難中の学生に対し、帰郷を指示。

・短大・ポーアイ学舎設置の本部電算機の被害調査（ＮＥＣ社）⇨異常なしを確認。学内巡視及び実験室等の応急整理。

・学生に対してラジオを通じて休校の連絡

１月20日（金）・１月22日の対策会議の下準備、特に一般入試の試験会場に関する情報収集。

・ポーアイ学舎への交通事情は劣悪。（殆ど徒歩）

1月21日（土）・ポーアイ学舎臨時休業

・三宮学舎閉鎖。立入禁止となる。避難民 160名となる。

1月22日（日）・対策会議（理事長・副理事長・大学副学長・短大部科長・短大事務局長・総務部長）

①学生への対応

大学：期末試験、単位認定など、2/2 教授会で決定

短大：　　〃　　1/31教授会で決定

②一般入試について

入試日程、受講生の足を考えた試験会場、被災した受験生への対応などを検討し、別紙の通り決定。

1月24日（火）・ポートライナー代替バス　税関前～市民病院前間に運行開始したが、教職員は殆ど徒歩で登下校。

1月26日（木）・教職員・学生の安否確認終了。

1月30日（月）・文部省へ「災害状況報告」を提出する為、災害復旧支援を受けていたコーナン建設㈱へ、学舎等の物的被害状況調査を依頼。

・職員は通常勤務体制へ。

1月31日（火）・中山手寮で災害対策について部課長会議　教授会

①卒業証書授与（3月18日・ポートピアホテル）

1年次3月22日集合

②入試日程変更　他

2月3日（金）・コーナン建設㈱の調査結果に基づき、物的被害状況をまとめる。以後、各期間からの被害調査や、災害復旧に関する内部の検討会議には、この資料を使用。

2月4日（土）・神戸女子大学入試を実施（一部：於　大阪コンピュータ日本学院）

〃

2月5日（日）

2月8日（水）・神戸中央区役所へ、り災照明発行手続きに行く。
（短大三宮学舎　半壊　／　ポーアイ学舎　一部損壊）

2月10日（金）・ガス復旧（P・I学舎）

2月11日（土）・神戸女子短期大学一般選考（A）家政科を神戸女子大学及び
～　コンピュータ日本学院において実施。

2月12日（日）

2月17日（金）・震災発生から1か月　正午に1分間の黙禱
・武庫川女子大学で兵庫県震災大学協議会開催

2月20日（月）・ポートライナー代替バス　三宮そごう北～市民病院前まで運行となる。

3月1日（水）・行吉学園評議員会、理事会を開催
①阪神・淡路大震災被害状況と復旧計画について
②阪神・淡路大震災被害学生並びに、教職員への支援策について
・三宮学舎の東棟解体決まる。

3月4日（土）・大学入試を大学とコンピュータ日本学院（大阪市）で実施
～

3月5日（日）

3月6日（月）・ポートピアホテルで卒業式挙行

3月13日（月）・平成7年度新任事前研修会を大学M館で実施

3月15日（水）・大学学位授与式

3月18日（土）・神戸女子短期大学　卒業式　ポートピアホテルにて

3月22日（水）・神戸女子大学・神戸女子短期大学　学生　登学日

3月23日（木）・神戸女子短期大学　講義再開
・退職者　辞令交付式　神戸女子大学M館

3月27日（月）・ポートライナー代替バス　市役所前～市民病院前まで運行となる。

Ⅵの（２）回想　１・１７

学生課　永　田　哲　朗

1/17（火）

AM 5:30 頃　早朝めずらしく目を覚ました時、昨日の夜、自宅のある北区は小雪が降っていたため、立ち上がってベランダ越しの外の様子を見た。部屋が少し冷えていたので石油ファンヒーダーをつけて、もう一度フトンに戻ろうとした時、かって経験のなかった衝撃と共に私にとって長い一日が始まった。

AM 5:46　マンションの５階にある私の部屋は、ドスンというような物音と共に、少し下に下がったような感じから、ぐらぐらっときたので咄嗟に石油ストーブを消さないと火事になると思ったが、１ｍほど先のスイッチの処までも歩くことができず、あまりの揺れに床に座り込んだまま茫然としていた。幸い自動消火が働いて消えるのが判ったが揺れがおさまるまで全く動けなかった。長い時間が経過したような気がしたが数分の出来事で、食器の大半が床に落ちガラスが飛び散り、ステレオのスピーカーが娘の布団の傍まで飛んで落ち、リビングボードの上からテレビがずれ落ち、和室の仏壇が真正面に倒れていた。幸い壁に取りつけていた懐中電灯が役にたち、暗闇の中で家族の無事とこんな部屋の様子が薄暗い中ではあったが確認できた。こんな地震の被害は初めてと思ったが、我家が被害のうちに入らないとわかったのは、夜になってのことだった。

AM 7:00 前　15分程マンションの近所の方の安否を訪ねたり、予備の懐中電灯を貸してあげたりして家に戻る頃少し外も明るくなっていた。大学も心配だったが、それ以上に寮の事が気になり、天神寮・行幸

寮と電話をするがなかなか通じない。そんな中天神寮の中尾先生から電話。寮生は全員無事、天神の寮生は、西須磨小学校のグランドに一時避難させているとのこと。私もすぐにそちらに行くと言って切った。

AM 7:00 頃　自宅から近い、施設課の平田課長宅を訪問。私の車でそのまま大学へ。何時もの通勤時間は30分程度の道のり。車道に標識が倒れており、地震の大きさを感じていたが、北区から白川を抜けて啓明学院前を通って大学へのコースはほとんど被害がないようなところであった。車中でのラジオの情報「震源は淡路島のもよう」にも大きな揺れがあっただけの実感のまま、大学に到着。

AM 7:25 頃　守衛室前に不安げに小原先生が立たれていた。平田課長を降ろして、私はM館前の駐車場に車を。降り立った時、空から黒い灰のようなものが落ちてくる。北西の方角の空では、今日は晴天のようだが、大学の上部から南東の空では曇天のようにも見えるし、日が昇っていない早朝のようでもあり、不気味な空模様。

図書館玄関の上部、大きなガラスが割れて、玄関前に散乱。

事務局に入ると薄暗い部屋の中で、受付の電話が鳴り続けていた。停電状態で、新しい事務局は陽差しが入りにくいため、電話の呼出しを知らせるあかりだけが暗がりの中で光っている。「電車が止まっているので、大学に行けない。本日は休講になりますか」大阪方面の学生からの問い合わせ。判断材料がない。でも午前中は無理、午後も交通手段が閉ざされていれば、休講になると思う。自宅で状況見守るようにと返答。２台の代表電話がなり続けるが、ほとんど在宅生からの休講の問い合わせ。合間に職員の安否や指示を仰ごうと思い、電話をかけたいが暗がりで電話のプッシュボタンが見えないのが、はがゆい。電話機をできるだけカウンターのガラス付近に引っ張って電話応対。30分ほど過ぎた頃、平田課

長が懐中電灯を届けてくれる。

AM 8:00 頃　寮に電話するが、何度かけてもつながらない。学生課職員にも安否の電話をかけてみる。最初に安井さんとつながる。「暗闇の中にいたが無事です」との事。並河さん宅ともつながる。無事との事。取りあえず休講であること、余震もあり自宅待機していただくよう伝える。妻木課長、寺岡さんとは、電話通じず。

電話は、相変わらず、休講の問い合わせが続く。「明日は、どうなりますか」の問い合わせには、閉口した。正直、明日の午後ぐらいからは、授業できるようにも思えた。とにかく、明日のことも現在わからないとしか伝えられず。

AM 9:00 前　雑賀局長が来られる。何時もなら20分足らずの通勤距離、タクシー待つこと40分乗ってまた40分程の大渋滞とのこと。なにか大変なことになってきているようで緊張感が走る。

AM 9:00 頃　本部の芳木部長、入試広報課　山中課長も大学に来られる。助手、職員も少数だが、駈けつけてこられ、数人で電話の応対していただく。

大学学舎周辺を雑賀局長、平田課長、山中課長と歩いて見る。外は、やはり黒い灰が飛んで来ている。長田周辺で火災が発生していることをこの頃始めて知る。

M館の３階研究室もかなり書籍が散乱し、書棚も倒れているところが多い。

Ｂ館に亀裂の後が見られる、地盤が動いた後がわかる。グランドにも長い亀裂が。真ん中当りが盛り上がっている様子。大地震の凄さが少しづつわかってくる。

新しいM館への階段の下も地面との間に亀裂が。

正門近くで平田先生と出会う。この後寮に行ってくることと今後のことを帰ってから決めましょうとお話しして別れる。

事務局にもどって寮に電話。行幸寮の近藤先生とやっとつながり、天神の寮生も西須磨小学校のグランドでの避難のままでは、冷えるので行幸寮へまとまるようお願いし、後で行くこと伝える。

AM11:00 頃　平田先生と施設の平田課長とで、食堂の本日販売予定であったパンと売店のおにぎりや菓子類も寮生のために確保していただいた。守衛室前にも、大学へ避難してきた下宿生が５～６人朝から何も食べていないとのことで、パンを少しわけて食べてもらう。

12:00 頃　施設課の坂根（課長補佐）さんと、食料を車に積込み寮へ、少し渋滞緩和。

PM12:15 頃　寮に着くまでの景色の変わりように唖然とする。自宅で感じた地震と須磨区の様子ではあまりの違いに怖さを覚える。木造家屋が崩壊している。人の移動が多いが話声はほとんど聞こえない。映画を見ているようで現実感がない。

PM 1:30 頃　寮について、驚いた。玄関のドアの中で、寮生がぎっしり座り込んでいるのが見える。１階の大広間には入らず、その手前からロビーいっぱいにひろがり、靴を脱ぐところにも、座り込んでいる。往来の人同様、ほとんど無言。皆うつむいている。寮の先生にどうして大広間に入れないのか尋ねてみる。電気のシェードが落ち散乱しているし、舞台の上にある教壇も座敷に飛んでいるので、余震があれば怖いとのこと。特に大広間の天井上は、砂利石を敷いた設計になっているので重量も気になるとのこと。電気、水道、ガスすべて止まっている。このままさらに避難が続き暗がりになるとパニックになると思った。点呼のスペースもない。とにかく学食から運んだ菓子パンを２人で１個、寮の先生より配給していただく。「大学へ全員避難させよう」と思い、寮から大学へ電話するが全くつながらず。

時間もどんどん過ぎるし、寮にも近くの下宿生が避難に駆け込ん

でくる。ドアが開かないので窓ガラスをぶち破って逃げ出してきた学生もいた。ハダシで血が流れていたが、無我夢中でわからなかったらしい。簡単な救急処置を寮の先生にしてもらい、靴下も貸してもらう。寮生に「今から大学の体育文化ホールに避難のため移動します！」と言ったら、初めて騒然として声が上がった。寮の先生から部屋に順番に戻り、暖かい服装と毛布の用意をするよう指示していただく。再度点呼をとり大学へ。坂根さんを先頭に出ていただき大学に避難することを事務局に伝えていただく事にする。大学の土田先生、短大の神田先生も車があるのでと寮に来られた。風邪気味で熱のある寮生を乗せていただく。寮生が全員出発してから寮の先生と厨房内の食料で、当面の非常食になりそうなものを運び出し車に積み込む。この時でさえ、明日の午後くらいに授業が出来る状態になったら、今していることがおおげさで笑い話になるのでは、と作業をしながらも半信半疑だった。最後に戸締りを確認し、寮の先生の荷物を車に積んだころ3時近くになっていたように思う。

PM 3:00 頃　大学に着くと、寮生はM館とD館に避難させると平田課長より話あり。耐震上から体育文化ホールより教室棟の方が安全とのこと。実際、体育文化ホールの天井一部分の金属ネットが落下しフロアーに突き刺さっていた。

行幸寮生をD館旧就職課の部屋に。天神寮生をM館の1階会議室へ。近くの避難下宿生をM館の1階の講師控え室に。ごろ寝ができるよう、M館ロビーのカーペット2枚を各々の寮生の部屋に施設課の平田課長、坂根さんと運ぶ。

近くに下宿されていた中西先生も避難して来られ、平田先生と中西先生。行幸寮の近藤先生、濱脇先生。天神寮の中尾先生、児玉先生。施設課の平田課長、坂根さんと私との9人で、とにかく寮

生全員無事であることを歓び、避難の宿泊となった。幼稚園の小林先生より、暖かいおにぎりが届く。学生の部屋の割り振りも終え、夕食の配分の食物を検討していた寮の先生におにぎりのことを伝え食事を勧めた時、初めて近藤先生が泣かれた。早朝からの緊張と責任感とで張り詰めていた気持ちが一瞬ほぐれたのが、わかるような気がする。私自身朝から飛び出して何も食べていないのにも気付かなかったくらいだから。

PM 4:00 頃　この後も近くの下宿生がどんどん避難してくる。避難の学生の掌握ができるよう学科別の避難者リストを、平田先生と中西先生で整理していただきながら、下宿生を迎える。

PM 5:00 頃　幼稚園の小林先生の話では、幸い幼稚園はガスと水道が出るとのこと。今晩の食事のおにぎりの炊き出しと白湯ぐらいならできるとのこと。あり難かった。平田課長と小林先生と幼稚園近くの店舗に買い出しにいく。米屋に米の確保のお願いを。

大学の方は停電のため、懐中電灯だけでは心細い。これも、幼稚園のクリスマスのキャンドルサービスのローソクと燭台があるからと、小林先生と倉庫から持ち出す。

PM 6:00 頃　一時は不安げだった学生もこの暖かいおにぎりと白湯に落着きを取り戻しているのがわかった。少しざわめいた声も聞こえるように思える。

この新しいM館の大理石の床にローソクをあちこちに立てるのには気がひけたがなににもまして余震による火災が怖く、何時もいざの時は吹き消すように学生に徹底し、余震の度に坂根さんと見回りにも気づかった。

PM 7:00 頃　平田課長と朝飛び出したきり家には電話もつながらず、家の方も気になっていたので時間をいただき私の車で平田課長を乗せて北区へ。車中のラジオニュースでは長田区等あちこちで火災が発生、

なす術がないとのこと。平田課長のお兄さんが長田区に住まれているので心配されていた矢先、ラジオから死亡確認者の名前に平田課長、絶句。私もおかけする言葉がなかった。時間の経過とともに惨事は広がるばかり。

PM 8:30 頃　大学にもどり、受付あたりで、父兄からの安否の確認の電話応対。電話に長い列をつくり、実家との連絡に必死。止むなく事務局の電話も学生に1台開放。電話がなかなかつながらない様子。やっとつながった時は、ほとんどの学生が泣いているのが、カウンター越しにわかる。

M館前が暗く危ないので、坂根さんと私との車のエンジンをかけっぱなしにしてヘッドライトを朝方まで点灯することにした。

深夜　深夜になっても電話の列は切れない。たしかに、実家の方はニュースを見て神戸の町崩壊に居ても立ってもおれない心境だと思う。それを思うと学生同様、私たちも、安否の連絡方法が気が気でなかった。平田先生が、ラジオ局の安否番組の電話番号のメモを下さり、各々の電話で何度もかけてみるが、つながらず。「神戸女子大学の寮生は全員無事で大学に避難している」のメッセージを知らせることが出来た時、うれしかった。私が最初にラジオからこのメッセージを聞いたのは早朝だったと思う。

1/18（木）

AM 0:00 頃　須磨区役所から電話。陸上自衛隊青野原駐屯地の第八高射特科群本部より町の救援活動に今から現地出発するが、全車両で町には下りれないので駐車協力と数日滞在の依頼あり。宿泊についてはグランドにテントを張ることになるとのこと。住民の避難者も数人本学を尋ねてきたが、行政で指示のある避難場所「西須磨小学校」「高倉中学校」に避難いただくように、鄭重にお断りしていることもあり、こんな非常時だから救援活動の自衛隊への協力は

させていただこうと、平田先生にもご相談し許可をした。

下宿生の避難学生の中に、夕食後より頭が痛いと言っている学生が一人いた。地震のとき、頭に物が落ちてきて当たったとのこと。かなり気になっているらしく病院に行きたいとずっと思っていた様子。深夜のことでもあり、中西先生に県立こども病院の救急外来を電話で尋ねていただいたが、駄目だった。非常時のため他の救急病院もなかなか見つからず。長田区の「丸山病院」と須磨区の「国立神戸病院」の紹介あり。私の車で、近藤先生と学生を乗せ、神戸病院へ。自家発電で受付業務は出来なかったが、レントゲン撮影も出来、大丈夫とのこと。

AM 1:00 頃　玄関の自動ドアが停電のため、手動の開け閉めとなっているため、学生の出入りが不便。深夜に関わらず寝つかれない学生も多い。冷気が中に入らないよう2重になっているドアーを互い違いに少し開けてくれていたのがわからず、ガラスドアに激突してしまった。鼻血が止まらず、寒気が一気にきて震いが止まらない。平田先生に横になるように言われ、事務局の床に少し寝かせていただいた。中西先生も顔面をぶつけられ、目の調子がお悪い様子。疲れておられる。

AM 4:00 頃　そろそろ自衛隊が着きそうとの連絡がはいり、平田先生と守衛室前まで出ていったが、なかなか着かない。吉本先生がご家族の車で大学に着かれた。広島を0時に出発してこの時間になったとのこと。

平田課長も長田区に行かれて、奥さんと夜中に戻って来られていた。お兄さんのご遺体がある長田区の遺体安置場となっている「私立村野工業高校」に行って来たとのこと。長田区は大惨事で、火災の煙と熱で歩けないほどとのこと。携帯電話で学長先生とも自衛隊等のこといろいろとご報告しているとのこと。

AM 7:00 頃　自衛隊は須磨区役所に着いてやっとこちらに向かっていることがわかったが、なかなか来ない。自衛隊駐在のこと気になり、平田先生からも倉敷先生にご報告。倉敷先生から稲浦副学長にも連絡していただく。

AM 8:00 頃　自衛隊到着、車をグランドに入れすぐに救済現場へ。本日よりの宿泊 290名とのこと。幼稚園で飲み水、食事の準備をしていただく。

学生のトイレは、M館１階のトイレ２か所に限定したが、水洗が効かないため、下水確保の問題が起こった。においも充満してくるため、急がないといけない。

AM 9:00 頃　井上先生が来られた。室内は酷いものだが、家族無事だったとのこと。岡本先生は昨日マイカーで来て渋滞に巻き込まれたので、今日は自転車で来たとのこと。

本日も休講の問い合わせが続いている。当初「本日も取り合えず休講」と答えていたが、学生に不親切とのご指摘もあり、井上先生、岡本先生はじめ、数人の登校された先生と雑賀局長等の検討の結果今週中22日（日）迄を休講とした。

その後、本部の芳木部長も見え、岡本先生の自転車で３時間かけて本部へ。結局、25日（水）迄休講になる。そしてその翌日の26日（木）の臨時教授会も決まった。

雑賀局長の指示決定をいただき、機動隊の宿泊はグランドはやめ、体育文化ホールに変更。女子学生の避難宿泊も多いことを自衛隊には理解いただき、体育文化ホールに限定し、教室棟への入室は厳禁にさせていただく。

本日も学生食堂の売店パンの仕入れがあり、中西給食に連絡。昨日のパンは配慮いただきすべて無料となる。

本日のパンは非常食に。

学生課、並河さん・安井さんも来てくれ、職員も昨日よりは揃ったが、交通網が全く途絶えており、受験生・在宅生からの電話対応も悪戦苦闘。

学生に一人死亡者が出た。川崎先生の3回生教育Bクラス「坂田美香」さん。須磨駅近くの木造の下宿2階建ての1階に住んでいた。昨日京都の友人の家から帰ってきての被災。全壊で即死状態とのこと。川崎先生から伺って後、安否の確認の中で何人の犠牲者が出るのか、不安になる。

天神寮の中尾先生といっしょに私の車で、名谷のダイエーに買い出しに行く。いつもなら開店前に並ぶことはないはずだが、200m以上の人の列。名谷駅のそばまで行列は続く。ダイエーは入場制限をしていた。20〜30分並んだが誰も物が無くならないか心配そうだ。店に入れた時、スナック類からノリやすぐに食べられるような物をとりあえず買物かごに思い切り入れた。中尾先生は、生理用品やおかずになりそうなものも買っておられ、2人で持てないほど買いこんだ。レジであいにくカードが使えず、2人の現金でぎりぎり間に合い恥をかかずにすんだ。

名谷を出て、いつもなら10分程度で大学に着くはずだが、駐車場を出てすぐにラッシュに巻き込まれ、動けなくなる。啓明女学院を過ぎたあたりで11時半になってしまい、みんなが心配しても何だからと、中尾先生は降りていただき先に大学まで歩いてもらった。

PM 2:30 頃　私が大学に着いたのは何と2時半近くになっていた。

日中でもあかりがないので、事務所内暗い。

小原先生、信太先生、岡本先生、中島先生、藤平先生、北山先生、赤井先生と登学された先生方は教員の安否確認をしていただきリストを作成。

平田先生と私は、クラス担任の先生方中心に電話を入れながら、ご無事だった先生には、クラス学生の安否確認をお願いしながら全学生の安否確認のリストの作成に全力を注いだ。また、平田先生と中西先生が中心となりクラス別のリストを整理していただいた。とにかく、ローソクの灯の中で、通じにくい電話を頼りの根気のいる作業だった。

こんな中で、渡邊先生の自宅崩壊、外園先生の自宅御崩壊、田中（久）先生は避難されている等、次々被災の状況が報告され、緊迫感が続く。

事務局にラジカセを持ち込み、昨夜からつけっぱなしで情報を聞いている学生の中に、「明石まで行けば、西へは電車が走っている。」という情報が流れて、寮生も、「大学を出さして下さい。明石まで歩いてでも実家に帰りたい。」と寮の先生に申し出る者も出て来た。しかし、せっかく無事故で避難出来たのに大学を出て二次災害にでも遇えばと思うと、認めてやるわけにはいかない。緊急時、車で飛び出すためにもガソリンを補給したい。昨晩エンジンをつけっぱなしにして点燈していたこともあり、坂根さんの車も同様ガソリンが少ない。しかし、どこのガソリンスタンドも車の列で、ガソリンが完売になる所も増えている。誰もが、一時に満タンにするためにパニック状態になっている。

坂根さんが、大学の近くで補給出来そうなスタンドを見つけて来られ飛んでいった。50メーターほど並んで、やっと補給出来た。

PM 6:00 頃　今晩も学生と避難の宿泊となる。大学本部の安藤さんも宿泊の応援をしていただく。幼稚園で夕食のおにぎり炊き出し。ガス、水道は出るが、やはり電気がなく懐中電灯とロウソクでの炊事。薄暗い厨房で、御飯の炊けた匂いが安堵感と食欲を誘う。食料が少なからず確保できていることと、2日目ということもあってか学

生にも落着きは出てきたが、疲れている様子。食事が済むと早い時間から毛布にくるまって休んでいる。あれから、近くの下宿から避難してきた者で当初の部屋もあふれ、ここの事務局も開放して寝かしている。受付にひっきりなしにかかってくる安否確認の電話の合間に、教務課や学生課の電話が鳴り、懐中電灯を手にして床の学生を気にしながら走る。

朝方に岡山、広島、四国を車で出た家族が、この時間になって大学に着きはじめた。高速道路が不通のため、2号線から全・半壊家屋の多い須磨駅周辺を見ながら大学に着いたためか安全であった大学と無事の娘に、より一層感激がこみ上げているようだ。出発の時車に積んできた食料や飲料水を、残っている学生にとたくさんいただいた。

1/19（木）

AM 0:00 頃　この夜、 290名の自衛隊が駐在した。雑賀局長の判断でグランドでテントを張っての宿泊ではなく体育文化ホールを開放。深夜に雑賀局長から電話があり「体育文化ホールの落下物があったあたりは、避けるように」と注意の指示あり。

坂根さんと体育文化ホール見回りに行く。整然として、床についている自衛隊に感心する。学生食堂のパンやおにぎりの差入も局長の配慮で行い、感謝される。

家族の迎えがあるたびに、避難者リストをチェックし、指定の会議室に学生を呼びに行く。ほとんど名前を呼ぶと深夜でもすぐに返事がある。なかなか寝つかれていないようだ。

宿泊しているはずの寮生がいない。何度も会議室を廻るが、返事がない。迎えにきた父親の顔がくもる。自宅で待つお母さんに確認していただくが、間違いなく迎えを待っているからと電話もあったとのこと。友人の学生がいたので、懐中電灯を持って寝てい

る学生の顔を照らしながら探してもらう。見つかった、友達と違う部屋で寝込んでいた。私は、ほっとしたが、寮生であったため寮の先生は決めた部屋で寝ていなかったことを手厳しく叱っていた。寮の先生の日頃からの責任感を痛感した。

AM 5:00 頃　朝方の5時頃になっても、到着する家族がある。出発の時必ず友人も数人見送っていたが、残っている学生にあせりのようなものも感じられる。電話にはあいかわらず列が出来ている。

AM 7:00 頃　幼稚園にお湯を用意するために走る。

かなりの家族のお迎えがあって学生が帰って行った。何時に誰が帰ったかを寮の先生に記入していただく。下宿生も同様にする。今日は、一部バスも動いていることがわかり、地下鉄とバスの利用で明石まで行く学生は複数で行動させて、帰宅させることを先生方と決めた。出発前に、氏名をチェックし帰路経路を確認しグループ毎に少々の食べ物と飲料水を持たせて見送った。そして、明石に着けば一度電話を入れるようにさせた。一時 300人近くいた学生も半数以下になった。でも東方面の学生は交通網が分断されているため、帰るのはやはり困難である。途中の二次災害も心配した。大学には、数名の学生のみになっていた。北海道の学生と帰る手段のない学生だったが、夜迄には知人の家に移ろうと思うとのこと。

学生が残して行った毛布の山が、二日間の避難生活の余韻を残している。

AM 9:00 頃　平田課長、コウナン建設係員とで寮へ。被害箇所チェック。厨房の重い冷蔵庫類が無造作に動いている。食堂の公衆電話はすべて床にたたきつけられ、地震の大きさに何度も驚かされる。

AM10:00 頃　学生が使ったトイレも2日目、女子職員のリレーで水を確保して急場を凌いだが、今朝は、詰まってどうしようもないとお掃除の

井口さんから連絡。

北山先生や藤平先生、教務の山下主任と共に、図書館の横の貯水を汲み上げ、軽トラックで運び、トイレに流してもらう。

安否確認も進んではいるが、各クラスで数人ずつ未確認者がおり、これが気にかかる。クラス主任と全く連絡が取れないクラスについては、こちらで学生に直接連絡をとっていた。

PM 2:00 頃　学生がいるかぎり職員が宿泊しないわけにもいかず今夜も覚悟はしていたが、夕方まで寝て来てはと局長や平田先生にご配慮いただき、坂根さんと共に帰宅させていただいた。

帰りも渋滞がひどくPM 7:00 頃三木街道から山越えの道を選んだが、結果は同じで夕刻に帰宅。服のまま仮眠していた時、平田先生からお電話をいただき「学生ほとんど帰ったので、寮の先生もいるので家で休んでください」と言われ、坂根さんに連絡し、夕食もほどほどに眠りについた。

1/20（金）

AM 9:00 頃　大学に着くと学生は居なかったが、図書館前やグランドに自衛隊の車が数台止まっている。自衛隊員とすれ違う時違和感を覚える。学生が帰った今、数々の食料もできるかぎり、自衛隊に差し入れを行う。町の被災者も、この自衛隊が何より頼りとなっている今、私達が間接的な協力が出来たことはうれしく思う。

当初 290名の自衛隊に、さらに岡山県勝田郡の戦車大隊 120名も本日より加わり、先の 290名の部隊は22日（日）に大学を出、後続部隊もその２日後に帰っていった。後片付けも素晴らしく日頃の訓練の後が伺えた。

平田先生と今後の進め方を相談する。

① 今週は、安否の確認をとって、クラス別の未確認者のリストを整備。

② 他大学の対応資料も集める。

③ 休講が終わって、すぐ授業というわけにはいかない。その時はホームルームから始める。その内容を検討しておく。

④ いずれ在宅生の被害状況を掌握する必要あり。ホームルーム時学生に聞くようでは遅い。何らかのアンケート調査を事前に行う必要あり、この準備をしておくことにする。

こうして、来週、倉敷先生が来られた時、学生部会で最終検討とし、その準備をすることにした。

今日、学生課妻木先生が5時間半かかって姫路から来られた。

1/21（土）

AM 9:00 頃　電気が今日ついた。水道は未だ出ず、更に2日後になって復旧。

いつものように数人の先生と共に安否の確認作業進める。

妻木課長には、未確認者の学生の安否をさらに調べていただく。

藤平先生が担任のクラスの学生の安否の確認中、死亡者が判明。

クラスの友人から1回生国文Bクラス「渡邉　友美子」さんが被災により死亡していたこと知らされる。坂田さんに続いて2人目の死亡者が出てしまった。

やはり須磨区の下宿生。幸い下宿は崩壊しなかったが、地震により、頭に物が当り、同じ下宿生の部屋で横になっていたが、頭痛がひどくなり、翌日亡くなったとのこと。22日（日）下田市の自宅で葬儀ということで、この日すぐ藤平先生は神戸を発たれた。

1/22（日）

AM 9:00 頃　曜日感覚もわからないような震災後の毎日。この日やっと、受験者に対する入学試験の変更対応決まり、本部よりＦＡＸあり。受験会場の変更問い合わせに対して急きょ、これで応えていく。

この内容は、

朝日、読売、毎日、産経、神戸、山陽、中国の各新聞。

ＭＢＳラジオ、ラジオ関西、Ｋｉｓｓ－ＦＭ、ＦＭ大阪、ＮＨＫの各ラジオ放送

朝日（ＡＢＣ）テレビ、毎日（ＭＢＳ）テレビ、関西テレビ、読売テレビ、テレビ大阪、ＮＨＫ（以上全国ネット）、サンテレビの各テレビ局で流れるとのこと。

1/23（月）　学生への「被災状況アンケート」自宅生用と下宿生用の２種類作
AM 9:00 頃　成し、雑賀局長に文面訂正いただき、電算室に打ち出し依頼。在学生3550名分の対応となるため、学生課全員でこの作業に入る。
１月26日（木）臨時教授会となっているので、それまでに「ホームルームレジメ案」の作成も決め、この準備もすすめる。

★あとがき

１月26日の臨時教授会で、さらにいろいろな意見が出た。後期試験のこと、授業再開のことやその時期、被災者への見舞金、受験者の入学金免除、在学生の授業料減免等々、問題も多い。電気がついて、水道が出るようになって、精神状態も少し落ちついた時、いろいろやるべきことも気がついた。しかし、少し言訳がましいことを言えば、暗がりの中で時々余震の続く電話もうまく繋がらない事務所での対応。本学の寮生に被災がなかったこと、避難後に２次災害に遇わなかったこと。下宿生に２人の死亡者が出たことは悔しいが、100 人以上の下宿崩壊者に死亡事故、重軽傷が出なかったこと。日常業務以外で接することの少ない教職員で力を合わせて安否確認や避難学生の救援が出来たこと。差し入れをしてくれた近くの下宿生。学生のご両親やご兄弟からの差し入れ等々……。日頃見えないものが見えてきて、人の優しさにも巡りあえ、失ったものも大きいが得たものもたくさんあったように思うとき、出来なかったことも反省しながら、厳しい中、完全燃焼でぶつかった充実し

た毎日だったと思います。

２月に入って、14日（水）坂田美香さんの遺品探しの応援に行く。坂田さんの京都の親友や妹さんと高校の友人たちが必死の遺品探し。須磨駅近くのＪＲ線沿い。崩壊したこの下宿の家がＪＲの鉄柱をも無惨に折り曲げていた。この日は教務の山下主任と行き、一部の遺品を大学に持ち帰る。16日（木）に学生課の安井さんと再び出かけました。崩れた瓦礫の下から、坂田さんの化粧品や服や靴が出てきました。３度目の遺品を採りに行った時、手帳が出てきて、なにげなく中を開いてスケジュールに目を通したとき、１月16日（月）「京都より帰る」と手帳に記されている坂田さんのボールペンの文字に、胸が熱くなりました。

日頃、学生の名前を覚えるのが苦手な私も「坂田　美香さん」「渡邉　友美子さん」の名前は生涯忘れることがないと思いますし、このお２人の学生を通じて「阪神大震災」の出来事を思い起こすことになるようにも思うこのごろです。

Ⅶ. 被 災 記 録

（１） １月17日早朝の記録

（２）附属幼稚園の対応

（３）学生寮の対応

（４）被災者の記録

Ⅶ. 被 災 記 録

（1） 1月17日早朝の記録

理事長・学長　行　吉　哉　女　記

1月17日午前5時46分、阪神地区にマグニチュード7．2の大地震が勃発しました。この地域は昔から地震がないと言い伝えられていたので、全く予期しないことでありました。東京の小学生は毎朝学校に出かけるのにリュックサックに避難の支度をし、玄関に置いて出かけると聞かされていましたが、そんなこともあるのかなぁと聞き流していました。いずれにしても、この度の大地震は全く意表をついたものでありました。それも上下動、その上に左右に揺れ、家具家財はばらばらになり、調度品が倒れて足の踏み場もなく、身動きの出来ない状態でありました。

まだ夜が明けていなくて暗く、電灯は消えたままでまるで全く見当がつかない。水道も出ないので、全く孤立無援の状態でありました。このような経験は初めてであり、思いもそめないことでありました。私の家では用事をしてくれる娘が居て、私の部屋へ飛んで来てくれました。二人で手を握り合って、落ち着くのを待ちました。

このような非常事態の中では、気がついてもどうしてよいか見当がつかず、また行動がとれなかったのです。すぐ、頭に浮かんだことは大学はどうなったか、殊に寮の学生達はどうしているか、下宿をして両親の膝元を離れている沢山の学生はどうしているかが走馬灯のように走りました。幸いにもコーナン建設の人が来て下さいました。そこへ又「たくみ」さんが心配して来て下さいました。急いで車に乗せてもらって、中山手寮、生田寮にとんで行きますと、双方とも空屋になっていました。学生達はみんな中山手の三宮学舎に避難していました。それから、須磨にある天神寮、行幸寮へ行くつもりでしたが、多くの倒壊した家屋で道が塞っていてどうにも動きがとれません。やっと連絡がとれ

て、寮生は大学の学舎に避難していることが判りました。そして寮生には人身事故がないとのことであり全く不幸中の幸でした。寮監の先生の臨機応変の処置に感謝した次第です。

（２）附属幼稚園の対応

①　地震後の幼稚園の対応

（１／17～２／５まで休園　２／６保育再開）

神戸女子大学附属高倉台幼稚園長

和　田　嘉　子記

ま え お き

「先生、やっと帰れます！」３月１日、嬉しい電話が愛媛から届きました。震災のため各地に母子疎開していた36家族の最後の子どもの母親からでした。これで、３月17日全員揃っての卒園式ができると職員ともども喜び合いました。

須磨離宮公園を境界にして地震の被害の明暗は大きく分れました。本園は離宮公園より北の高台にあり、幸にして建物被害は一部損壊に止まりました。在園児の被害も全焼１名、負傷１名、職員の家屋全壊全焼各１名で被害は少ない方でした。しかし、もしこの地震が保育中に起っていたら、果して幼い生命を確かに守りぬけたであろうか、バス通園の多い園児の保護者に連絡がとれたであろうか。血の気がすっと引き、いまだに足がガクガクする思いです。

１月17日、伊丹市に居住していた私は、早朝ですが、すでに出勤準備を整え、ストーヴにあたりながら時間待ちをしている時でした。ただごとではない揺れ、倒れる家具、夢中でストーヴを消し、後は動くこともできず、二階でタンスが倒れる大きな音、ガラガラ落ちる屋根瓦や崩れるタイルの音、恐怖に堪えるより仕方がありませんでした。家具に囲まれていたのに、良く助かったものでした。電話はすでに不通、公衆電話に走っても全く通じませんでした。群発地震が続いていた猪名川町が震源地だろうと思い込み、近所の人と安否を確かめ合いました。やがて、震源地が淡路・神戸と分かりましたが、幼稚園への連絡も取れず、交通機関もなく、苛立つ気持ちをどう押えればよいか、ただ苦悩するばかりでした。

その間、幼稚園では小林主任の率先した行動、大学の平田課長、雑賀局長の指示も頂き、園児・職員の安否確認、大学職員への炊き出し、そして寮生への炊き出し、更には自衛隊員に対する炊き出しも始まり、停電下の中、着々と被災に対する初動活動が進められていきました。やがて、全壊・全焼の被害を受けた藤原、栗山教諭や周囲が全く倒壊してしまい一時避難をしていた、沼、山本、中村教諭やその友人達が続々と幼稚園に避難して来るようになりました。一人一人親元へ一時帰郷させる等の段取りを手際良く捌く等、その見事な活動に園長として心から感謝する次第でした。

以下、幼稚園で行った地震の初期対応を、記録としてまとめました。

なお、以下の記録は初動期に活躍してくれました小林主任のメモを中心にしてまとめたものであることを記し、この場を借りてあらためてお礼申します。

地震後の幼稚園の対応等

1／17（火）

5：56　地震勃発。

6：30　幼稚園の近くに居住する小林主任教諭来園。建物の外観被害なし。高倉台近辺は無事。

・園児の安否を確認するため、父母の会会長・副会長に電話を入れ、協力を要請する。

・職員連絡、園長連絡つかず、バス通園児ついてバス停ごとの連絡網で安否確認する。

7：00　川上運転手来園。

・小林主任と2名で園内被害状況を確認する。

遊戯室、保育室、2階廊下等に亀裂損傷は見られるが、大損傷はない。

9：00　平田施設課長、コーナン建設の担当者来園。

・園内の被害状況把握、ガスの元栓を閉鎖する。

10：00〜　園児のマンション群を巡回、連絡網を流す「しばらくの間お休みします」。電話不通となる。ファックス 734-1776 のみ通話可能。

13：00　小林主任、大学へ昼食（おにぎり）を持参し、炊き出しの必要性を相談する。その間、寮生200人が大学へ避難してくるため、幼稚園給食室を使用しての炊き出しについて検討し、準備に入る。

・小林主任、当面自宅用の米30kgを供出して炊き出しを始める。1回につき米28kg、並んで米購入。停電のためローソクを使用。寮監1名と学生3名が応援手伝いを始める。

・電池、ラジオ、やかん、ローソク等生活必需品を大学へ届ける。

・急拠、自衛隊300人大学へ宿泊。隊員の食事も賄う。

（商店街北側はガス・水・電気共通じていたが、団地での隊員の炊き出しをことわる。）

（高倉台自治会館では幼稚園前の高層マンション住民の避難者用炊き出しをはじめる。）

1月18日（水）・永松幹陽子　長田区（自宅）で全焼、祖父母宅へ無事避難。小林主任出勤

・停電、水が出るため近隣住民が水を汲みに来る。

・大学へ炊き出し、朝・昼・夕3回、延1500名分

・米を藤井商店に、副食をピーコック市場に学生と共に並んで購入する。

15：00　山本、沼、中村教諭、友人とともに10名程避難して来る。

・藤原宅は全壊、栗山宅焼失の報、小学校へ避難していると連絡が入る。

山本・沼・中村は近隣家屋が倒壊し、ショックも大きく一時

帰省をする。

1月19日（木）・脾野仁志、ケガ、首に12cmの裂傷縫合したと連絡を受ける。しかし親子共に精神的な不安もあり、面会できず。来園するから、しばらくそっとしておいて欲しいとの要望があった。ショックの大きさが窺える。

小林主任出勤

・停電、断水（汲み置きした水でようやく炊き出しに利用できる。）

大学へ炊き出し　1日3回　延1000名分

10：00　園長より連絡がつく。園児・職員の安否の確認。当分の間の休園を指示する。

・園長、副理事長と自宅連絡がとれる。

・連絡網「しばらくの間休園。再開は改めて連絡する」旨流す。

・栗山教諭、被災のため一時幼稚園へ避難し、帰郷する。

1月20日（金）小林主任出勤。停電・断水。

・大学へ炊き出し。大学職員分。

1月21日（土）小林主任出勤。

・停電・断水

・大学職員分の炊き出し。

・職員住居確保に奔走。以下毎日のように。

1月22日（日）小林主任出勤。

・停電しているが、水が出るようになる。

・大学職員分の炊き出し。

1月23日（月）小林主任・平野・宮崎・長岡出勤

・電気点灯。

・大学職員分の炊き出し。

・電話が通じやすくなり、園児宅へ個別に遠距離宅よりかけ始

め、その後の情報を蒐集する。

・自宅より疎開している園児35名、連絡不通３名。

１月24日（火）小林主任・濱田・宮崎・平野出勤

・ヤマハ北村氏、ピアノ調律10台、２台損傷、修理を好意的に無償でしていただく。

１月25日（水）小林主任・宮崎・平野・長岡教諭・喜多川運転手出勤

・園内被害状況の再確認。保育室内倉庫壁等の亀裂発見。

・園児個別連絡により、その後の情報を蒐集する。

・園児の親が洗濯に次々と来園。

１月27日（金）小林・宮崎・平野・長岡・喜多川・和田出勤

・須磨区園長会が白川台幼稚園で開催され、互いに被害状況と対応について情報交換し、協議する。

・被害の少ない幼稚園は早く再会したい希望を出しているが、近隣が足並を揃えることが大事と共通理解した。

１月29日（日）副理事長と相談の上、２月６日より再開することを決める。

１月30日（月）担任より各家庭に電話連絡をし、保育再開を知らせる。

藤原教諭の全壊家居から荷物出しを行う。

２月１日（水）神戸市園長会が学園幼稚園で開催され、保育再開の対策、被災者の保育料納入について協議する。

２月２日（木）バス路線が車渋滞のため、保育開始時刻の繰り下げを各家庭に連絡する。（９時30分より始業）

２月３日（金）バス路線の時刻表作りのため、職員がバスに試乗して作成する。

被災の西須磨幼稚園、須磨幼稚園を見舞う。

災難除けの豆まきを職員全員で行い、保育再開の無事を祈念する。

２月４日（土）、５日（日）保育再開に向けて、準備を行う。

遠距離疎開児も、日に日に帰宅の連絡が入る。

2月6日（月）21日ぶりに保育を再開する。保育時間9時30分より11時30分まで。265名中欠席13名、内帰省6名。園児は久しぶりの登園に喜びにあふれている。

2月8日（水）近隣被害園より転入2名、一時2名あずかる。

2月9日（木）すみれ組の床が、ボイラーもれと、地震の影響のため損傷し、一時遊戯室で保育を行い、全面改築をはじめる。

3月2日（木）保育時間を平常にもどし、給食は市販サンドウィッチで賄う。

3月3日（金）ひなまつり、劇遊びお楽しみ会を各組保育室で一斉に行う。（従来の発表会をとりやめる）

3月17日（金）第22回保育修了証書授与式を行い、131名が修了する。

あとがき

最後に、保育再開後の園児の精神的対応について記して置きたいと思います。

平静に見える園児の一人ひとりが受けた心の傷はかなり大きいものがありました。

家が全焼したKちゃん（5才・女児）は、明るさを失い、無口になり母親の陰げに隠れるようになりました。始めて描いた絵は猛火の中を逃げ惑う家族の絵でした。黒煙と紅蓮の炎を下を鉛筆で薄く親子3人（父は警察官で出動中）と犬が寄り添って逃げている絵で、炎の中で、いかに人間が無力であるか鉛筆の薄さの中に恐怖心と共に訴えているようでした。20日余りもたって、焼跡の浴槽に潜んでいて奇跡的に助った愛猫の「やよいちゃん」を抱きしめ、やっと笑顔が出たと語られた母親の涙は忘れることができません。

Hちゃん（4才・男児）は、熱帯魚の水槽が倒れ、その破片で脛動脈を僅かに逸れていたために一命は取り止めましたが、15針縫合という大怪我を負いました。治っても暫くは登園できず、母親から決して離れようとはしませんでした。担任とのかかわりで、漸く登園しても表情は暗く、話をしなくなりました。

今、年長になり少しずつ友達関係ができ、遊ぶようになりましたが、暗い表情はまだ時々見かけます。

被災して転入して来たＴちゃん（４才・女児）、他園から一時預かった２名の女児も、同様に表情は固く馴染みにくかったですが、始めて遊び出した遊びが地震の避難ごっこであったり、懐中電灯づくりであったりしたことが、いかに怖しい体験をしたかを物語っています。

今年度になって入園して来たＳちゃん（４才・男児）も同様、親から離れにくく、６月末になってやっと一人立ちすることができましたが、家では今もミニカー遊びの中で「この車は被害が大きいです」「こちらは大丈夫でした」と口走りながら一人遊びをしているとのことでした。

このように、発信してくれる子どもの心の動きや、行動をしっかり受け止めて、まだまだ親も子もそれぞれに心のケアを続けていかねばならないことを子どもの姿から教えられる毎日です。

②　地震後に思うこと

附属高倉台幼稚園　主任　小　林　美佐子　記

「ドン」一瞬の衝撃に思わず“地震”と直感し、とっさに目の前のガスストーブを消した。続いて「グラグラ」３つもガスコンロを使っていたので、早く消さなくてはと思ったら耐震装置の動きでひとりでに消えた…。

＜１月１７日（火）午前５時４６分＞

この時刻から多くの人の人生が一転し、大きな悲しみに包まれ今なお苦しんでおられる方がおられます。高倉台に住んでいる私には、幸いにして何の被害もなく、夢のように思えることは本当にありがたいことです。

時間の経過と共に“あの時ああしたらよかった”という思いは私の胸の中にいっぱい残っておりますが、地震のあとどんなことをしたのかをふり返ってみたいと思います。

すぐ園長宅へ電話を入れたが、不通になっていました。次々職員に電話をかけた。西区の濱田、宮崎、平野先生にはつながった。月見山近くで、ひとりで住んでいる沼、中村先生の恐怖にみちた声が電話の向こうから伝わってくる。でも、その時私には離宮から下の一転した景色など想像することもできなかった。父母の会会長宅へ電話を入れ「今日は休園です」という連絡網の協力をお願いする。須磨駅近くが燃えていることを聞き、すぐ藤原先生に電話を入れた。リリーン「ありました。電話がこんなところにありました。グチャグチャなんです。家が倒れそうなんです。大屋さんの家が燃えてるんです…」電話口の向こうから悲愴な彼女の声、横で私もよく知っている隣のおじさん夫婦の声が聞こえる。「先生、だいじょうぶ　生きている。おじさん達だいじょうぶ」と思わず私、「おじさんの家はペチャンコにつぶれて二階から伝ってうちへこられたんです。おじさん血がでてる」「おばさん、藤原先生のこと頼むわ」その時何が何だかわからなかったが、おじさん夫婦と一緒だったらとにかく何とかなると胸をなでおろした。

板宿近くでひとりで住んでいる山本、栗山先生は電話がつながらず、安否が気になるがどうしようもなく、すぐ幼稚園に行った。東灘区よりバス技術員の川上さんも来て下さって2人で余震を気にしながら園内の被害状況を確認する。遊戯室、保育室、2階廊下等に亀裂損傷はみられるが大きな損傷はない。職員室は机の引きだしがあいているぐらいで倒れたものは何もない。保育室のピアノが1台、壁に傾いていた。ガス、水道はきていたが、停電、電話はかからないのだが、ファックス番号の電話が通話可能なことがわかった。

大学の平田施設課長、コーナン建設の方が被害状況を調べに来てくださり、本当に心大丈夫でいつも幼稚園のことを気にかけてくださっていることに心から感謝する。

当分の間、ガスの元栓を閉める。

9時頃より通園区域の中で各バス停、各団地、マンションごとに幹事さんを中心にファックスを利用して被害状況を確認し、ファックス番号を伝え、そちらにかけてくれるよう依頼する。

停電、断水のところが多く、それぞれに恐怖がひしひしと伝わってくる。白川台二丁目の県住では、一時小学校に避難されているという情報があり、そこの方に何度も連絡を入れたがつながらない。

自宅に電話を入れ、幼稚園の電話はつながらないので、連絡があった場合はファックス番号にかけるよう伝え、通園区域を巡回する。白川台二丁目にも立ち寄ったが留守。建物を外からみた限りではだいじょうぶな感じはした。

公衆電話とスーパーの前には人の列があった。何かの時に電池がいるかと思ったが、すべて売り切れ、大学前の道路はすごい渋滞。東の空に煙が立ちこめ大きな黒い灰のようなものが車の上に舞い、すごい異常と不安を感じるが、高倉台に来ると、いつもと変わらないので不思議な気がする。

昼過ぎ、家に立ち寄ると、父兄や旧職員の方からたくさんの電話が入っていた。大学職員の方、食べる物がないのではと気がかりで、隣2軒の方にお願いしてガスで御飯を炊いてもらい、すぐおにぎりをつくった。ガスと水道はきて

いたので、ありあわせのおかずを作り、疲れをとるには熱いおいしいお茶がいいかなと車に積み込んで大学に行った。うす暗い事務所の中にはちょうど永田課長、平田課長さん達がいらっしゃって、みなさんに召しあがっていただくことができ、本当によかった。

大学は、ガス、水道、電気全部ダメなようで、道路をはさんですごく違うのだなあと感じた。幼稚園で避難された学生の方 200人分のおにぎりを作ることが決まり、自宅にあったお米をもってすぐ幼稚園にもどった。給食室のガス釜や洗米機など使ったこともなく、ひとつの釜でどれだけ炊けるかわからないが、体重計をもってきてとりあえず8kgずつはかり、ざるで洗う。家では8合位しかたかないのに水加減もわからず手ではかり、とにかくスイッチを入れた。

永田課長、平田課長さんと近くのお米屋さんにお米をわけてもらうようにお願いし、市場でのりや塩こんぶ、かつおなどできるだけわけてもらった。あたりもだんだん暗やみに包まれ、倉庫からキャンドルサービス用の大きなローソクと燭台を取り出し、大学にお渡しした。御飯も同時に2つの釜で炊き、すぐに洗ってまた炊き、ローソクの灯りの中で、寮監の方、学生の手伝いの方とおにぎりをつくる。7時頃家に帰ると、栗山先生からマンションが燃えたという連絡が入っており、今頃、ひとりでどこでどうしておられるのかと思うといてもたってもいられない気もちになる。沼、中村先生からも時々電話が入っており、私の家に来てもらえばよかったと後悔する。外へ出ると、停電なのでまっくらで、東の空だけがあかあかと炎が燃えあがり、若い先生たちの無事を祈るばかりだった。

園長とも連絡がつかず、父母の会会長宅へ電話を入れ「しばらく休園すること。再開の時は改めて連絡すること。連絡は幼稚園のファックス番号か私の自宅の電話番号に」という旨の連絡網の協力をお願いする。夜遅くまで電話の鳴りっぱなしでお辞めになった先生方も大変心配してくださって、あたたかい言葉をかけてくださり本当にうれしく思った。

＜1月18日＞（水）

山本先生とどうしても連絡がつかないままで大変気になり、朝早く5時頃福岡の実家へ電話を入れた。今から神戸にむかうとの事で、昨夜は同じマンションの方の知り合いの家に泊めてもらったそうでとにかくほっとし、ファックス番号へ電話を入れてもらうようお願いした。7時過ぎ、幼稚園へ出勤し、昨夜より少し慣れた手つきでお米を洗い、御飯を炊く。平田課長、坂根さんが来て下さって昨夜定休日だったお米屋さんで自衛隊 300人分のお米を手配する。

大丸ピーコックの前はすごい列ができ、1時間近く並んでおり、その中にいた女子大の学生さんに買い物をお願いする。幼稚園の近くでも水がでなくなり、水をとりにこられるようになる。8時頃ようやく山本先生から連絡が入りほっと一安心した。後から聞くとみんなとっさに飛びだしているので何ももっていなくて電話番号がわからなたったそうだ。こちらからもっと早く実家に連絡すればよかったと反省した。沼、中村先生から、明石から西は電車が走っているようなので明石まで歩き、それぞれ岡山、九州の実家に帰りたいという連絡があったが、とにかく幼稚園にあがってこられるように伝える。大学前の道はすごい渋滞なので迎えに行くこともどうすることもできない。ようやく3時頃、沼、中村先生、同じマンションの方5名、若い女性ばかり本当に疲れきった表情でハァハァと息使い荒くあがってこられ、ひとりはベットで横になり、みんなイスにすわったまま無言であった。あったかいおにぎりをだし、食べるようにすすめた。「高倉台は別世界ですね。犬の散歩なんかしているんですよ」「家がつぶれ、道端に死んだ人が横たわってそこを通ってきたんです」。

昨夜は区役所で一夜を明かし、みんな恐怖と苛酷な経験につかれきっておられる様子だった。

「今からどうしたい」とたずねると「とにかく自分の家に帰りたい」との事、私の車に5人乗せ、すぐ学園都市まで送ることにした。帰りはすごい渋滞だったが裏道を通って幼稚園に帰ると、山本先生と両親が来られた。ちょうどその時父兄がカップラーメンをもってきてくださって、「よかった、先生だいじょうぶ」というやさしい声。山本先生、沼先生を見送りようやくほっとした。

夜の炊きだしも終わり、栗山先生のことが気がかりで、家には電話が入っているのだが、直接話すことができなくてもどかしい。外はもうまっ暗で、平田課長に「栗山先生を探してくるわ」と言うと「いつもの僕なら行ってあげるけど…女の人ひとりでは行ったらあかん」と言われた。お兄様にご不幸がありながら、一生懸命してくださっている平田課長に頭が下がる思いがしました。

８時頃、家へ帰るとたくさんの方から電話が入っていた。

上沢に自宅がある園児から全焼し歩いて高倉台のおじいちゃんところに無事たどりついたとの事、本当にけががなくてよかったと思う。

栗山先生とようやく連絡がとれ、パジャマの上に何かをはおったまま逃げ、すぐ火の手が近くであがり、マンションが燃えたようでようやく知り合いの所に避難しているとの事、とにかく先生方全員無事だったので本当にほっとした。

＜１月１９日（木）＞

・炊きだし

・断水のため、くみおきする。

・ルネ須磨に住んでいる園児がたおれてきた水そうで首に12針縫合したという連絡がある。

縫合後は順調で元気であるとのこと。

・園長とようやく連絡がつき報告。

＜１月２０日（金）＞

・大学の職員の方へ炊きだし

相変わらず停電、断水が続いている。

時々父兄が「だいじょうぶですか」と来て下さり、うさぎのえさをもってきてくださったりする。お父さまが「何か役に立つことがあったら……」とか言ってのぞいてくださり感謝する。

・先生方２名が住居が全壊し、その確保に知り合いや不動産屋にまわる。地震の翌日から、空屋はあっという間につまっているそう

で本当にびっくりした。

＜1月21日（土）＞

・大学職員の方へ炊きだし

・職員住居確保のため奔走する。

・通園区域巡回

・出勤可能な職員に月曜日より出勤するよう依頼

・妙法寺幼稚園園長来園

＜1月22日（日）＞

・大学職員の方へ炊きだし

・電話が回復

・水道がでるようになる。

＜1月23日（月）～28日（土）＞

・電気点灯

・大学職員の方へ炊きだし

・電話も通じ遠距離の園児宅より個別にかけ始め、その後状況を把握していく。

・まだ水のでていない地域があるので、幼稚園で洗濯、入浴などしてもらう。

・住居の確保もでき、先生方は保育再開の準備をする。

＜1月30日（月）＞

・藤原先生の全壊家屋から荷物をだす。

斜めに傾いた家、脚立で乗り越え、ようやく家の中に入りびっくり。上を見上げると空が見え、下を見ると壁の端から地面がみえ、足の踏み場もない。となりのおじさんの家はペチャンコ。一階が車庫で車が入っていたから助かったのだろうとひとり思う。

・担任より保育再開の連絡をする。

若い先生方がひとりでこわい思いをしながらも再び幼稚園のため

に、かわいい子どもたちのためにみんな笑顔で戻ってこられ、本当にほっとしました。

＜2月6日（月）＞

・21日ぶりに保育再開する。

子ども達にとって待ちに待った登園日。「先生おはよう！」、「こわかったな地震」、「タンスが倒れてきて、お父さんおこしてくれたんで」、「水がまだでーへんねん」、「また地震あるかな」たくましい元気な子ども達の声。

「元気やった、よかったね」と笑顔で抱きしめる先生達。明るいにぎやかな声が園舎いっぱいに響きました。

……あの1月17日以来の静けさはうそのよう……

幼稚園はやっぱりこうでなくっちゃ、幼稚園はやっぱり、子どもがいるから楽しい。ひとりでに涙がで、うれしい一日でした。

日が経つにつれ「あーすればよかったなあ」といろいろな思いが残っていますが、その時は突然のことで無我夢中だったような気がします。

何より、ご父兄、全園児、全職員が無事であったことがうれしく思います。ご父兄や旧職員の方から「何かできることない」「いる物ありませんか」とあたたかい電話を頂き、人の優しさにふれ感激しました。

若い先生方の「命が助かっただけでもよかったや」という心の底からの言葉を耳にして、これからの長い人生にこの思いがプラスになることを信じ願わずにはおられません。

ひとりで静かな幼稚園にいるのは、落着かず淋しいものです。幼稚園は明るい先生、かわいい子ども達が動きまわり、元気いっぱいの声、活気に溢れているのが一番だと、つくづく感じさせられました。

何も役に立たず、十分なことは出来ませんでしたが、大学の雑賀事務局長様、施設の平田課長様には、いつも幼稚園のことを気にかけてくださって感謝しております。本当にありがとうございました。

（３）学生寮の対応

①　阪神大震災によせて

天神寮　寮監　中　尾　久美子　記

神戸の大地を地の底から突き上げるが如く山をも揺り動かした大震災。瞬時に五千五百有余名の尊い命を奪った大震災。近代的な高層ビル・道路・橋・異国情緒溢れた神戸の街並み・愛する家も学び舎も……悉く瓦礫の山と一変させた阪神大震災。

平成７年１月17日（火曜日）午前５時40分目覚音にて起床。『寒いなぁー。もう少し眠っていたいなー……』45分　『今日は朝から茹玉子　ぐずぐずも出来ないか　エイッ！起きるとするか……』ベッド頭上の電灯を点けるや否や、「グラッ、グラグラグラ！　ドッドッドー！　バサバサバサー……」今までに体感したことの無い凄しい音が幾重にも耳を襲い、体を激しく揺り動かす。『何だ!!これは？』四這ばいになってしばらく揺れが収まるのを待つ。と同時に、学生達のことが頭を過る。枕元の懐中電灯とマスターキーを取り事務室へ駆込む。

事務室では高圧接地の不気味なブザー音。防火警報装置の赤い点灯。机、椅子、ロッカー等々全て横転。足の踏み場も無い！　ブザー音のスイッチを切り学生達の部屋へ走る。一階の学生達は一箇所に震えながら寄り添い「先生、怖い……」と口々に訴える。今にも泣きそうな顔々々……。「大丈夫！その場で待っててネ。」声を掛けながら上階へ急ぐ。スリッパ収納ロッカーは倒れ、大きな壁面ミラーは粉々に砕け、防火扉は異常さを物語るかの様に閉ざされ、平時見慣れた寮内とは全く違う。二・三階の学生達も一階の学生同様、恐れおののきながら廊下にへたり込んでいる。

「皆、大丈夫？　揺れが収まったら慌てないで、ゆっくり階下へ降りて来て下さい！」一階ロビーにて、在寮生全員の無事を確認する点呼が出来ることを只

ひたすら祈るばかりである。一人が半泣き状態になりかける。然も有りなん。しかし、「泣いちゃ駄目！怖いのは皆一緒です。一人が泣くと皆が泣けてしまいます。集団心理が作用してパニック状態が生じます。しっかりして下さい!!」大声で怒鳴る。その言葉は、学生達へというより寧ろ自分自身への叱咤であり気合入れでもあった。

人員確認後、この助かった命をより安全な場所へ避難させること。詳細な情報を入取すること。宮田寮監長を初め、学生課、施設課、学生達の実家へ無事を知らせること。……あれやこれや次から次へとしなければいけないことが浮かんでくる。

外は厳冬の暗闇。折りしも猛威をふるっていたインフルエンザにかかり高熱を出している学生数名。玄関の扉を開けると鼻をつくガス臭。近隣の家屋やブロック塀の多くが全壊、半壊状態……（天神寮の石垣及び樹木混合塀も東西20m余に亘り全倒壊）悪条件ばかりが重なり更に不安は募る。それでも否応も無く即刻、判断！　決断！　判断！　決断！……であった。

その後、天神寮・行幸寮共に5日間の大学避難生活が始まった。その間、3日目にして寮生全員を無事実家に帰宅させ得たことは、何よりも喜ばしいことであった。

本当に今更乍ら、当時の寮監としての行動職責を問う時、自分自身では、冷静沈着な児玉寮監やエネルギッシュな行動力のある行幸寮寮監共々、自分達の持てる力を精一杯出し切り頑張ったことには恥ない。しかし、それが全てベストの判断且つ行動ばかりであったとは言い難い。それらの不備や不足を補充補足してくれたのは、

○学生自身の素晴らしい連帯感と頑張り

○事務局を中心とした学生課・施設課・たくみ商会の諸先生方や職員の方々の力強い指導力と行動力

○高倉台幼稚園の先生方の炊出し救援

○電話でしか面識が無かった国文学、S教授や教職員の方々の心の籠ったお

にぎりやお惣菜の差し入れ

○高倉台付近在住の諸先輩や元寮生達の手作弁当届けや宿泊受け入れ支援

○遠く安否を気遣い、我が娘の無事をこの目で一刻も早く確かめんと、交通事情の困難な中、駆けつけて来られた保護者の方々のたくさんの救援物資の届け（食物は言うに及ばず、トイレットペーパー、生理用品、ゴミ袋、毛布等心配りの行き届いた品々……ガソリン、自転車迄含まれていた。）や感謝や労いの言葉

○宮田寮監長や友人達の温い励ましの言葉

○安否情報を数局に放送すべく労をとってくれた知人達

たくさんのたくさんの方々のお力をいただいて誰一人として負傷すること無く無事だったのである。心から“お蔭様で”と云う言葉しか浮かんで来ない。

一方、心痛む辛いニュースも勿論有った。それは元寮生の訃報である。現寮生を全員帰省させ終えた矢先、目に飛び込んできた朱で記された名前「教育学部・三回生・坂田美香」目を疑った。あの天衣無縫に明るく元気印の寮生・坂田美香さん!!　「よかよか……」といつも熊本弁で楽しく語り、皆に“熊本県人ここに有り”と存在感のあった彼女。奇しくも、昨春、久しぶりに寮に立ち寄り、近況報告をしてくれ、又、秋には天神下で出会い、「美しくなったわねー。熊本弁は相変わらずかなー……。」と親しく言葉を交わした彼女。この若い命が無惨にも奪われたとはとても信じられなかった。お通夜、お葬式に今すぐにも馳参じたかったが残務処理が有り思う様にならない。せめて、淋しいお別れにならない様にと同郷や近隣県の元寮生達が参列してくれたらと願いつつ、阿蘇出身のＫさん宅へ電話を入れる。父上が出られ「帰宅するや荷物だけ置いてすぐ出かけました。友人数人と待ち合わせてお通夜に出る様なこと言ってました……。」哀しみの中にも熱いものがぐっと込み上げてくる。

その後、坂田美香さん逝去のことは、同期の元寮生と出逢う度に、自ら

の無事を感謝しつつも、辛い辛い震災の出来事として甦る。

それと同時に、誰言うとも無く、元天神寮生として弔電を打ってくれたことも耳にした。

そして今、八月の初盆に向けて、美香さんを偲び、“寄せ書き色紙”を作成してくれている。隣町出身の私が遅らばせ乍らのお参りと、その色紙届けの任を受けている。

共に一年、同じ釜の飯を食べ、裸（入浴）の付き合いをした寮生ならではの学部を越えた熱い友情の数々。天国の美香さんへ届くことを願わずにはおれない。

そして、哀しい訃報が今一つ。それは、学生が毎年お世話になっていた生け花指導のO先生のこと。自宅全壊にて先生ご自身が痛ましい犠牲者のお一人になられた。春の入寮日、クリスマス、お正月と季節の花々をそっと玄関に飾って下さったとても優しい先生であった。心より御冥福をお祈りするばかりである。

最後に、全く個人的なことではあるが、同僚の井口寮監と共に、私も住宅全壊罹災者の一人になってしまった。お互い再建に向けて情報交換や励まし合っている昨今でもある。

あれから早や半年余り。街のいたる所で力強い復興が始まっている。

悲惨な爪痕と共に、物質的にも精神的にも多くの哀しみ、試練、反省、想いを与えた阪神大震災。

M新聞のある日のコラムに記載されていた「悲観主義（感情的）と楽観主義（論理的）の相違」“何とかなるさ”“成る様なるさ”この楽観主義さが取りもなおさず復興への足がかりになっている様だ……。生来、楽天的性分の私にとって、この記事には大変勇気づけられた。

又、最近、感じ入った文章の一節が有る。

“人生に於いて無駄というものは一つも無い”現況の神戸の街を前にして、非常識なセンテンスとも受け取れるが、「人間万事塞翁馬」の如く、人間

のたゆまざる努力とエネルギーを信じ、自然への畏敬の念を忘れず　驕ること無く　残された私達が力を合わせて一つ一つ築いていけばいいのではないかと思う。

幸い、若いエネルギーに囲まれた職場であることを感謝し、次世代を担う彼女達と共に素晴らしい神戸の未来を心から信じたい。

1995年７月末日記

② 阪神淡路大震災・記録

行幸寮　寮監　近　藤　誓　子

今回の震災について、寮監の立場から、また私個人の感情も含めてつたない文章ではありますが記録として書き表しました。

〈H．7．1．17　5：46〉

その日の朝食はパンであったため目覚まし時計は6時にセットしていた。まだ就寝中のその瞬間グラッと揺れ、「地震？」次の瞬間にはまるで機関銃の銃声の中に放り込まれたような音が全身を揺らし思わず「違う！地震じゃない！」と、勘違いをしたほどであった。体を起こすこともできず揺れがおさまるのを待っている時間が長く感じられた。体を起こせるようになってからとなりの部屋にいる濱脇先生に声を掛け、無事を確認後部屋を出ると台所は食器棚やテレビが倒れ、ガラスや陶器が割れて床に散らばっていた。2人で「学生！上、どうなってるんやろう。マイク！マイク！」事務所の床からマイクを慌てて捜し出したがそのときはすでに電気が切れ、何の役にも立たない。各警報機はなり続け、激しい余震は続き、災害の大きさを感じた。

学生のリーダーである秋月さんと升田さんが同室の学生といちはやくロビーへ降りてきた。「先生、大丈夫？どうしよう。凄い地震や。でも落ち着かんとあかん！」私が最初に励まされたのは彼女のこの言葉だった。その会話が聞こえてか上から他の学生が「先生！」と叫んでいる。今なら階段を皆が降りても大丈夫と判断してから私は「みんな大丈夫？降りてきなさい！」と声を張り上げて叫んだ。泣きながら友人に体をあずけて降りてくる学生、怖いと叫びながらかけ降りてくる学生、どの顔も不安と恐怖がいろ濃く現れている。けが人のないこと、全員が揃っていることを確認し少しほっとした。口々に思いをはなしだし、かなり騒がしくなる。その度に秋月さんと升田さんが「落ち着いて静

かに！」と頑張ってくれる。寮監２人は次に何をしたらいいか彼女たちのお陰で考えることができた。学生が乾電池で動くラジオを持っており、全員がその放送に食い入るように耳を傾けた。直後の放送では震度６と伝えられ情報が入る度に学生たちは大きなどよめきの声を上げる。

濱脇先生が厨房へ行きガス・水道の元栓を確認してくれた。地震が後20分遅かったら、ゆで卵を作るために私は火を使っていたんだと考えると非常に怖く、めちゃくちゃに散らかった厨房を呆然と見つめていた。

〈H．７．１．17　６：00〜12：00〉

「天神寮はどうしてるんやろう？」「菊池先生は？宮田先生は？となりの宿舎大丈夫かなぁ？井上先生もこのへんやし、うちの家（神戸市北区）どうなってるんやろう？」今度は寮の外のことが気になってきた。まず天神寮に電話をかけてみたがなぜかつながらないので行ってみることにした。その時寮の外へ初めて出て愕然とした。辺りはガス臭く北どなりのお屋敷は全壊、南側のお屋敷は瓦が落ちて斜めに傾き、塀はすべて歩道に倒れて家の中が見通せるありさまである。なにより驚いたのは西側の離宮道ビルが大きく傾き、１階ガレージ部分が押し潰されて２階部分のコンクリートが下にあった軽トラックを襲いクラクションが絶えることなくなり続けていたことである。静まり返った暗い町中で、あのクラクションの音は文明が作りだした唯一の音のようで皮肉に聞こえた。パジャマ姿の人が大勢外に出てきたが懐中電灯がないと歩けないほど暗かった。飼い主につれられた犬がしっぽを垂らし、震えながら歩いていた姿が印象的だった。かなり怖かったが離宮道ビルの前を通り天神寮へいくと中尾先生・児玉先生・学生皆無事であったので安心し、中尾先生と「学生部の指示を仰ぐことにしよう」と話をし、寮へ戻った。寮へ戻る途中で神戸女子大学の学生らしき女の子達に何人か声を掛け、「風邪を引くといけないし、何もしてあげられないかもしれないけど大学からの連絡を待ちやすいから行幸寮へ来なさい」といって誘導した。

菊池先生と宮田先生に電話をかけ、寮生全員が無事であることを報告し、そ

の後学生部の永田先生の自宅に連絡をしてその後の指示を仰いだ。あいにく永田先生はちょうどご近所へ出掛けておられて留守だったがすぐに電話をくださり、自分もすぐに大学へ向かうのでもう少しそのまま待機しておいてほしい、とおっしゃり全員の無事を喜んで下さった。

大学からの指示を待つ間町の様子を学生に伝えることにした。人生に2度と起こることのないと思われるこの災害をただ『怖かった』という言葉だけで終らせることなく、事実を自分達の目や耳で記憶にとどめておくことも大切なことだと思ったからである。しかし、学生を外に出すことはできないし人数確認ができない状態にすることも許されないと思い「時間がたって外に出られるようになったら、自分の目でしっかりと確かめなさい」そして「今日は晴れてるはずやけどどこかで火事が起きてるんかもね。空は暗いし灰が降ってきたよ」「怪我されてる方もあるんやね、家も壊れてる所もあるし救急車の音も増えてきたよ」一つ一つの言葉にどよめきの声が起こる。

神田先生から電話が入る。音在先生の安否を気遣われておられるのだが、宿舎前の通路が全壊した家で塞がれ、外に出ることができないので確認にいってほしいとのこと。直ぐに確認に向かい、おけがもないとのことで安心した。宿舎におられる先生が学生のことを心配して寮にきて下さった。その時何の情報もないだろうと親切にラジオからのニュースを伝えて下さった先生に対し「もう知ってるよ」といいたげな学生達の態度に腹が立ち、先生が帰られた後「今のあなた達の態度はなに？ご自分のこともおありになるのに皆のことを心配してわざわざ来て下さったのにどうして笑うの？ねえ、不謹慎よ。もっときちんと人と気持ちを考えなさい。」と厳しく叱った。皆うつむいて何もいわない。他人の優しさを素直に受け止められる女性になってほしいと願う。

テレビ・ラジオの緊迫した報道に、学生のご家族や親戚の方はさぞご心配であろうと思い、全員に自分の声で無事だから心配はいらないと電話を入れさせることにした。人数が多いから無事であることだけを伝えてすぐに切るようにと言ってもなかなかそうもいかず、電話の横に立って「皆待ってるんやから早

めに切りなさい。」可愛そうな気がしたが催促をして中断させる。それでも80名にもなると何時間もかかり、そのうち混線が始まり、特に中国地方はかかりにくくなっている。全員が自宅に電話を入れたことで御家族の方はひとまず安心されたようである。後日の電話で「娘の声であの朝電話があったのでほっとして、後は大丈夫だろうと思うことができました。」と感謝の言葉をいただいた。

私も濱脇先生の電話を借りて自宅に電話を入れたが、混線が激しく、同時に5、6人の方の声が聞こえる。どの声も『叫び』に近い。すべての声に答えて交通整理のような状態である。しかし、すべての機能を失った中で電話だけは機能し、外との連絡を取り合い、情報を得ることができる電話に対し、不思議な気持ちさえ起こる。「ＮＴＴってすごいなぁ」と感心してしまう。私だけでなくきっと日本中のすべての方々が電話という神器の価値を今回改めて認識したのではないだろうか。毎日のなにげない生活に感謝しなければならない。

9：00ごろになると皆少し落ち着いてきたのか、おなかが空いてきたようだ。朝食予定のパンが厨房の調理台の上に無事に残っていたので足元の悪い厨房内を用心深く歩いて取り出し、学生に配る。水分がないのがかわいそうだが我慢してもらうことにした。問題はトイレ、こればかりは我慢してもらうわけにはいかないので仕方無いが、時間が経つにつれて悪臭が鼻をつき気分が悪くなる。それと数日前から寮内でもインフルエンザがはやり始めていて4、5人が39.0℃前後の熱を出していたので緊張のほぐれてきた彼女達が気分の悪いことを申し出てくれたが、どうしてあげることもできず布団を貸して励ますだけだった。しかし、若さとはたいしたもので19日に帰省するときには、全員熱も下がり元気に帰っていった。時間がたつにつれこれからどうしたら良いのか具体的な疑問が頭に浮かぶ。昼食のことや今夜の寝る場所のことなど良い案が浮かばない自分に腹が立つ。まさか日没後に暗いこのロビーでこのまま座ったまま夜を明かすこともできないし、この時点では天神寮の学生や近所の下宿生も含め約180名の学生がロビーに入っていたので非常に混雑していた。（大広間は柱も少な

く、ガラスが天井から落ちてくる危険性が大きかったのでロビーのみを使用した）

永田先生から電話が入る。買えるだけのおにぎりとパンを用意したのでこれから運びますとのことで「これでとりあえず１食分！」と心の中で喜んだ。永田先生と施設課の坂根さんがワゴン車で昼食分を運んできて下さったがその量は１８０人分の食料にはほど遠く一人分は菓子パン１／２という少なさでおにぎりのほうは学生の同意も得て夕食にまわすことにした。

〈H．７．１．17　15：00～１．18　６：00〉

永田先生からのご指示で全員大学の構内に避難することが決まる。寒くならないように着替えをすること。最低１枚は毛布を持っていくこと・部屋の中にある食料はすべて鞄にいれることを指示し、再度点呼をとった後徒歩で出発する。ワゴン車のほうには食品倉庫の中から缶詰・お茶・それとティッシュペーパーやビニールふくろなど思いつくものをできるだけ多く積んでいただいた。私の車には自分と濱脇先生の布団や、救急箱・筆記用具などを積み込み２人は車で大学へ向かった。熱を出している学生のために英文の土田教授と、短大の神田教授が車を用意して下さり、移動中のトラブルも起こらなかった。

大学に到着。行幸寮の学生は人間文化研究館、天神寮と下宿の学生は本館が避難場所となる。机を端によせ、本館ロビーのカーペットを敷き布団代わりにしてかなり狭いもののようやく足を伸ばして座ることができ、学生の顔にもすこしづつ笑顔が戻り始める。きっとここなら大丈夫だと思えていたのだと思う。大学のほうも電気・水道・ガスは使えず、ロウソクの火を頼りに夜を明かさなければならない。

それにしても食料がない！これだけの食料で一体どれくらいもつだろう。そのときは学生の食料の確保のことだけで頭が一杯だった。学生たちの話し声の中から「ねぇ、昨日の晩ご飯何やった？あれが寮で最後の食事になってしもたなぁ。」と残念そうな声。皆食べることだけが気になっている様子。食べる物がないと言う事を何と言って伝えれば良いのか非常に胸が痛んだ。そんな中で

寮生の一人が「先生なんにも食べてないん違う？パンあげる。食べて。」まさか貰うことなどできないので何度もお礼を言って断ったが、少ない量の中で他人に対して大きな優しさを言葉にしてくれた彼女に感謝し、『食べていくこと』の難しさを考え直した。考えながら座り込み、パンや缶詰の数を数えていると永田先生から呼ばれ、事務所に入ると何とそこには湯気の立ったおにぎりと熱いお茶！「とりあえず食べてね。職員が体力がないと学生を助けてあげられへんよ。」女性の先生がおっしゃる。お名前を伺うと高倉台幼稚園の小林先生。この気づかい、優しさに頭が下がりこらえ切れずに涙を流した。幼稚園の方はガスと水道が大丈夫なので学生の食事もおにぎりくらいなら大丈夫とのこと。その言葉を聞いたときの安堵感はこれまで一度も感じたことのないものであった。その後の食事は１人につき１つのおにぎりと白湯。それでも充分な食料と感じられ学生たちも喜んでいたようである。

「ガソリンは一杯してたほうが便利だから」と施設の白木さんの案で私も車に乗り16：00ごろ２台で大学を出発したものの考えることは皆同じ、どのガソリンスタンドも長い列ができガソリン売り切れの札まで掛かっている。白川台まで探してみたがどこも給油できずこれ以上の遠出は帰りのガソリンにも影響が出るので諦めて大学へ戻る。その時刻にはすでに大学前の道路は大渋滞、ヘリコプターが何機も上空を回っている。相変わらず救急車のサイレンはなり続け灰が降っている。日没後になると安全と分かってはいるものの暗さは少々恐怖に繋がる。

少ない回線を使い学生が列をなして家に再度連絡をとっている。下宿生も含め約300名集まっていたように思うが定かではない。電話口ではご両親の声を聞いた途端泣き出す学生がほとんどで、その姿を見ると無事に避難できたとは言えまだまだ十分でない、安全に家に帰らせて初めて「寮生は無事でした。」と報告できるのだ、という思いを強くし、気を引き締めた。

夜になっても引き続き強い余震が続く。暗い部屋の中で建物は不気味な音を立てて揺れ仮眠さえもとれない。「先生、昼間の時間は早いのに夜が明けるの

は長いねぇ」濱脇先生と交代で仮眠をとるはずが２人ともまったく眠れない。これは18日の夜も同じ事で寮監４人は２晩一睡もできなかった。

〈H．７．１．18　６：00～１．19　12：00〉

食料の次はトイレの問題である。かなりの悪臭が漂っていて学生に聞くとトイレに行きたくなるから水分は全く取らないようにしていると言う。これは問題である。体のためにもにおいは我慢してトイレにはいくように、水分はできるだけ補給するようにいったもののこの悪臭では私でさえ同じ事をしてしまうような気がする。甲南建設の若い方のヒントを井上教授が仲介し、学生部の並河先生の音頭取りで学内のバケツが集められた。そして登場したのがバケツリレーである。学内の池から各館のトイレまで学生がずらりと並び、水を汲み上げる作業をする。どこか楽しそうな雰囲気さえする。ごみ箱も利用して水を流したが残念なことに充分と言えるほどの水量ではなかった。このような緊急時に対応できる貯水池を学内に確保できないものかと考える。その後、トイレのつまりを少しでも少なくするため排泄後に使用したトイレットペーパーは別のポリ袋に捨てることとなる。

18日になると家に帰りたがる学生が増えてくる。しかし、せっかく無事にここまで避難してこれたのに、今ここで寮生だけで帰省する途中で余震による二次災害に巻き込まれでもしたら取り返しのつかない事態となる。気を付けて帰るからと泣いて頼みにくる学生たちに「せっかく生き残ってるんよ。途中であんた達に何かあったらどうするの。あんた達を今行方不明者の数の中にいれるようなことだけは先生は絶対にでけへん。これは絶対に譲らんよ。生きていく難しさを今回じっくり考えような。」泣きながら全員が納得してくれた。保護者が大学まで迎えにきてくれるなら学生の帰省を許可することにした。遠方で神戸まできていただけない保護者の方には出てこれる駅で待っていただいてそこまでは別の保護者が付き添い学生をバトンタッチする形をとった。例えばＡ九州Ｂ広島Ｃ京都Ｄ新潟の学生が４名いてＢの保護者だけしか神戸にこれない場合、Ｂの保護者は４名を連れて西明石駅まで歩き、ＪＲに乗る。加古川駅で

はCの保護者が待ちＣＤを引き取る。ＡＢは新幹線で移動、広島駅で待つＡの保護者とおちあいＡは保護者と共に九州へ。一方ＣＤはＣの保護者と京都に向かい、そこでＤの保護者と待ち合わせる。Ｄは最後に保護者と共に新潟へ向かうことができる。このようなやり方でとにかく家に着くまでかならず保護者が付いている状態にした。そして家に着いたら必ず大学に連絡をいれることを念押しして見送った。

迎えにこられたご両親の中で救援物資を届けてくださった方が多く、この場を借りて深く感謝します。米・水・パン・菓子類・弁当・果物・生理用品・使い捨てカイロ・その他多くの物資を差し入れてくださった。娘を思う親の気持ちが痛いほど伝わってくる。着の身着のまま化粧もせず車でこられたお母様の姿を見ると「これが親なんだ」と胸が熱くなった。それも大渋滞の中ほとんどの方が朝一番に家を出て大学到着は真夜中である。

下宿生の中にも物資を届けてくれた人もある。高倉台に住んでいて自分たちのところは大丈夫だったからと言っておにぎりやお茶を持ってきてくれた。「さすが先輩やね。ありがとう、助かったよ。」と職員皆で声を揃える。

いただいた食料を細かく分け学生に配る。学生リーダーがさらに細かく計算をして全員に行き渡るように手配している。１つの物を大切に皆で分け合う喜びを経験できたのではないだろうか。物余りの時代に育っているので物を大切にしないと批判されがちな世代である。今回の出来事は彼女達には貴重な体験となったに違いない。

19日の日中でほとんとの学生が帰路に就き、「家に着きました。ありがとうございました。」と連絡も入り始める。全員の無事到着を確認したときはようやく肩の荷がおりた気がした。「ちょっと休憩しようか。」寮監４名その日の夕刻はひさしぶりに笑顔が戻る。その頃になると遠方の火事がおさまったのか空気が澄んできたような気がした。

「学生も全員帰ったし、今日の晩はゆっくり眠ろう。」そう言って笑っていたのも束の間、事務所に何気なく置いてあったメモを見て中尾先生が叫ばれた。

「えー！坂田さん！あの坂田美香さん！どうして！」死亡学生のメモだったのである。２年前の天神寮の学生、熊本出身できどることなく熊本弁を使い、底抜けに明るい学生だったそうである。いくら泣いても足りない様子で中尾先生は涙を流される。まさか死亡した学生が出るとは思わなかった。それこそご両親のお気持ちを思うと胸が締めつけられる思いであった。

― 心よりご冥福をお祈りいたします。 ―

＜終りに＞

３月１日現在、天神寮は電気・水道の復旧がなされたが、行幸寮にはいぜん電気も通らずあの日のままの状態であるが、トイレの排泄物の処理やガラス破片などの危険物の処分は、施設課の平田課長のご指示で白木さんがすべて行ってくれた。今後は電気がくるのを待って厨房・事務所など被害の大きかったところから復旧作業を行う予定。

今年度の寮生の荷物もそのまま部屋の中に残してあるが、来年度の入寮式が例年通りならばそれに向けての作業も並行して行わなければならない。また、今年度の寮生の一部にも４月以降の下宿先が建物の損傷で確定できずにいるものもあるが学生部の先生方が最善を尽くして下さっている。電気・水道復旧後の早い時期に各自の部屋の清掃引っ越しの作業を行うよう寮生全員に文書を送付した。

本来ならばこの時期、寮生全員揃って笑顔で『さよなら』を言えるはずであったのに、それさえもかなわなくなってしまった。退寮の前日の夜ははなむけの言葉として何がいいか私なりに色々と考えていたのだが、もしその機会があったとしても今回のことで用意していたその言葉も変更になってしまった。せめて彼女たちが神戸で一人暮しをしている間だけでも安心して暮らせる神戸であってほしいと、勝手ながらそう考える。

避難期間中デマが多く飛び交い、学生も私たちも惑わされることが度々であった。どちらの寮も全壊したと言うデマも流れてかなり学生は混乱した様子。わざわざ確認のために中尾先生と２人で寮まで見にいったが渋滞のために大学

から寮まで車で1時間以上もかかってしまった。人の噂には十分気をつけなければならない。

今回の出来事を学生全員に体験談として文集に残すことも一度は考えたのだが、文章にして書き表すことによって返って恐怖感がよみがえり精神的に苦痛を生じる性格の人がある、とテレビで放送していたのを聞き、一人でも学生の中にそのタイプの者がいると申し訳ないのでこの計画はやめることにした。

今回の地震より3日間の避難生活について日記程度の文章で記録を残しました。何より寮生全員が無事に帰省できたことが良い結果であったと思います。この結果を得られたのは寮監長である宮田先生の電話での優しい励ましのお言葉と三日間適切な指示を下さった雑賀事務局長をはじめ、学生部次長の平田教授・学生部の永田先生・並河先生・施設課の平田課長・坂根さん・白木さん、また炊き出しに大きな協力をいただいた小林先生のお蔭でした。心より深く感謝し、これからの私の仕事に対する姿勢を先生方から学ばせていただいたことも書き残しておきたいと思います。また寮監6名の団結力も付け加えたいと思います。ありがとうございました。

③　大震災をふりかえって

生田寮　寮監　多　田　知　子　記

1・17の真冬の震災から半年、私にとってはっきり言って思い出したくない出来事である。しかし、精神的に落ち着いてきた今だからこそ振り返ることが出来るのではと思い直し、起こった出来事を綴ってみた。

最初の一揺れで、私の枕元にあったビニール製の衣装ケースが、布団ごしに私の上に倒れ、その後の激しい揺れの間中のしかかっていた。

もしこれが木製の家具であったならどうなっていたか。幸い無傷で部屋を出ることが出来た。停電、真っ暗な中を受付に一つだけあった懐中電灯を手に廊下に出る。

生田寮は他の寮に比べ建物が小さいため、殆どの寮生がもう一階の廊下・階段に集まり、うずくまっていた。みんな緊張しているのが分かる。自分の顔も多分、緊張のため引きつっていたことだろう。

まず、最上階の四階まで駆け上がり、各部屋にけが人がいないかどうか確認しながら一階の玄関まで降り、在寮生の無事を点呼表をみながら確認。けが人が一人もいなくて一安心。こういう事態になってみて始めて、寮監という仕事が、寮生の命を預かっているということの大変さを思い知った。

その間にも大きな余震が起こる。玄関に集まってはみたけれど、この後どうすれば良いのか。しばらく寮に居た方が良いのか、しかしまた大きな地震が来たら、その時寮はひとたまりもないのではないか。どこかに避難した方が良いのか、しかしどこへ避難したら良いのか分からない。誰かが玄関を叩き中を懐中電灯で照らす。若生さんである。男の人一人居ることがこんなに心強いことはなかった。

「ここは危ないから、道路一本隔てた北野小学校に避難しなさい。外は寒い

し、上から何が落ちてくるか分からないから、布団か毛布にくるまって行くように。」と指示して下さった。

寮を出た途端、外はガスの匂いが充満し、自販機は倒れ地割れが至る所に生じ、避難先の小学校も外壁が殆ど倒れ、２・３軒隣に建っているマンションの３階付近からは火事が起こり、地震の恐怖だけでなく火の恐怖も容赦なく襲いかかる。しかし、その火災は、幸いにも１時間程で収まりまわりにそれ以上の被害を出すことはなかった。

寮生を一応は小学校に誘導したものの、この後何をなすべきなのか頭がまわらない。まわりを見渡せば布団も持ち出せず、この寒空に着のみ着のまま茫然と立ちつくす人たち、寮生も泣き叫ぶのを忘れる程の恐怖を味わったためか、みんなうつむきだまっている。

その後、避難先を三宮学舎へ変え、一階の食堂に集まる。時計は、いつの間にか９時を指していた。

「そうだ、朝食を用意しなければ」

食料調達のため寮にもどる。その時になって、やっと寮の中の様子をゆっくりと見ることが出来た。大型テレビは前のテーブルの上に落ち、食器棚の皿は床一面に砕け散り、人の背丈以上ある食器乾燥機は完全に前に倒れ、食堂の出入口をふさいでいた。もしこの地震が、みんなが食堂でくつろいでいる時間に起こっていたら、どうなっていたのか。私達はわずかばかりの食事をとった後、三宮学舎二階の閲覧室に移動し、寮で使っていたコタツの敷布団、自分の布団・毛布を出来るだけ持込み、かりの寝床をつくり、余震におびえながら一夜を過ごした。

震災２日目より、中山手寮でお世話になった寮生たちは、車を丸一日とばして駆け付けてくれたお家の方々と帰ったり、メリケンパークからの大阪行きの船の出ることが分かり、朝４時に寮を出発して、寒くつらい長い行列に並び、やっとの思いで神戸を脱出する事が出来た。このようにして、全員怪我もなく自宅に帰すことが出来た。

震災は、多くの人に命を奪われる恐怖を与え、また、命は残されても心の中に深い悲しみの傷をつけてしまうものであると、私は強く感じました。本当に、一生のうちで、もう二度と味わいたくない経験であった。最後に、震災によって亡くなられた方々の御冥福と、大切な家族を一瞬にして奪われた方々の心が少しでもいやされることを心からお祈りし、震災の記録とする。

（４）被災者の記録

不幸の中で感じた幸運

渡　邊　正　雄　記
（東灘区田中町で被災）

平成７年（1995）１月17日（火曜日）午前５時46分は、その地域の私を含む人達にとって不幸な一瞬でした。命を落とした人、肉親を失った人、怪我をした人、家を失った人、その人達にとっては掛け替えのない大切なものが、一瞬にして奪われてしまいました。私も永住の地と定め、心身の安らぎの場と信じていた住居を奪い去られてしまったのです。それからはや２ケ月、心身落ち着きを取り戻すにつれて、私達にはたくさんな幸運にそのときから恵まれていたことに気が付き始めました。その恵まれた数々の幸運を忘れないように、思いつくままに書き出してみることにしました。

１．天候に恵まれた当日。

あの日もし雨が降っていたら、私達はその日のうちに武庫の荘の姉の家まで避難することができたでしょうか？言うまでもなく、地震の直後に中の町公園へ一時避難したときも、雨露しのぐには２メートル四方位の吾妻家しかなく、寝間衣に素足サンダル履きではとても平静では居られなかったでしょう。あの日は晴天で風もなく、本当に有り難かったと思います。

２．日の目を見た梯子。

私達のマンションは、庭と道路の間に1.５m位の高さのフェンスがありました。これが外部からは3.０mの高さになりますので、避難のときのおおきな妨げとなりました。幸いなことに、庭に植木の剪定などのとき使う折りたたみ梯子がありました。これが役立ちました。その後は、階段をなくした上階の人達の避難階段として活躍し、今は行方不明になってしまいました。

3．私に衣類を貸して頂けた幸運。

前にも書きましたように、私達は寝間衣に素足サンダル履きでしたが、103号室の松永さんのご主人がたまたま靴下を2足重ねて履いていらっしゃって、「これ1足お貸ししましょう」と言って、貸してくださいました。また、101号の山田さんのご主人が、「良かったらこのトレーナー着てください、ぼく2枚重ねてますので」と言って、貸してくださいました。

4．思わぬ光に助けられた幸運。

強烈な横揺れが「これでもか★これでもか★これでもか」と続くうち、電気製品に付いているデジタル時計の明かりが消え真の闇となりました。食器や硝子の割れる音、建物のきしむ音、とりわけコンクリート部分のきしみは不気味なものでした。そして、コンクリートが砕けたのでしょう、埃のような匂いが鼻を刺激しました。暗闇ですので、建物が壊れる瞬間は見ていませんが、恐らくこの瞬間に建物は大きな揺れに負けたのでしょう。真っ暗闇の中で、伊久子とふみの安全を確かめながら、縁側へ退出することとしましたが、ふみが何かに障害されて脱出できない様子で伊久子が助けに行きました。その時、足元に懐中電灯が光っているのを見つけ、そのお陰でふみの脱出を妨げているのは変形したステンレス製の網戸であることが分かりました。この電灯は、ホルダーにセットしておくと消灯し外すと点灯するという、よく旅館などにセットしてあるもので、ホルダーに付けたままふみの寝ていた部屋の吊り戸棚に片付けてあったものが、地震の衝撃で吊り戸棚が外れ、電灯がこぼれ落ち点灯したと言うわけです。もちろん、この後ふみはこの網戸を破るのに苦闘し、落ちている硝子の破片を使って血路を開きました。この電灯はその後105号の方にお貸ししましたが、今は行方不明です。

5．着衣と靴が取り出せた幸運。

普段私はその日に着ていた家着を畳んで枕元に置く習慣があります。ところがこの日にはどうしたことか、もう一日前に着ていたものを、逆の位置である足元（窓側）にも置いていたことを思い出し、それを破れた窓から取り

出すことができ履き物以外は一応活動的な服装になることができました。次に山歩き用の靴が庭にある倉庫の中にあることを思い出し、裏返しにひっくり返っている倉庫を回して扉を少しこじあけ、靴箱を取り出しました。箱の中には毛糸の靴下もあり、雪山用の靴と2足の靴が確保できました。これで、私とふみの履き物は長距離を歩く準備が整ったわけですが、伊久子だけが庭履きサンダルで歩きにくそうに見えました。

6．由香ちゃんたち有難う。

衣類のことでもう一つ奇跡が起こりました。被災し公園に3人が寝間衣のまま避難して、伊久子が持ち出してくれた2枚の布団のカバーを剝がし、それを私が体に巻き付け、残りの布団1枚ずつを伊久子とふみが被って寒さから身を守っていましたが、布団の無い人がいたりしたので、1枚の布団を2人で被るなど助け合いました。しかし、このままでは目標としている武庫の荘まで歩けそうにもありません。どうしたものかと思案していたときです。昨春の神戸女子大卒業生で、近所に住んでいた永井の由香ちゃんが妹さんと一緒に避難してきて、私を見つけてくれました。互いに無事を喜びあった後、伊久子やふみの服装を見て「何か取ってきます」と自宅に戻り暖かいコート・スポーツガウンやセーターなどを取ってきてくださいました。このお陰で私達3人は何かと長い距離を歩く準備ができたわけです。2人の若い女性がこのようにな災害に遭遇し、元の教師を頼って安堵しようと思っていたのに、逆に救援しなければならないことになり、随分と失望し、また戸惑いも感じられたのでは無いかと思います。由香ちゃん達が来てくださったことは本当に有り難いことでした。

7．無事を知らせる上での重なる好条件

平素は夫婦2人でしたが、罹災の当日に長女が嫁ぎ先の横浜から帰神していました。正月は交通機関も帰省ラッシュで混雑するから、少し時期をずらし、14日に夫婦揃って関西入りし、守口の谷家で一泊、15日に来神拙宅で一泊、16日（月）に芳樹氏のみ帰浜されました。ふみは1月18日から伊久子が

一泊旅行に出るので、その留守中私が淋しがらないようにと残ってくれたのです。もし、この時ふみが芳樹氏と一緒に帰っていたら、震災後私達夫婦の安否が確認できず、どんなにか心配したことだろうと思われます。電話がかかりにくい状態もさること乍ら、我が家の電話番号帳を持ち出していなかったから、連絡しようにもできない状況だったわけです。ふみが芳樹氏に無事を知らせたいと、本山駅の公衆電話に向かいましたが、芳樹氏の新しい職場の電話番号を数日前に電話帳に書き加えた記憶がかすかにあり、その記憶のお陰で連絡が取れ無事を知らせることができました。この連絡が効を奏し、その後谷氏宅がキーステーションとなり、アメリカを含む各方面の知人らからの問い合わせに、無事を知らせることができました。

8．野良猫撃退の水に救われる。

私達の家はマンションの１階で、小さいながら庭があり、みかん・つばき・もくせいや紅葉などが、四季を通じて私達の目を楽しませてくれていました。ところがここ半年ほど前から、野良猫が毎日のように庭を通過するようになり困っていました。伊久子がペットボトルに水を入れて、猫の通路に配置し通過を妨げるようにしていました。その効果の程は分かりませんが、壊れた我が家から退去するときに、伊久子がこれを持ち出しました。午前６時前の避難以後昼頃まで、何もすること無く公園で近所の人達と救援を待っていました。こんなとき、この水が私達家族だけではなく、近所の人達の喉を潤し、気持ちを落ち着かせるのに役立ちました。言うまでもなく、その内の１本はリュックに収まり、私達と一緒に武庫の荘まで行くこととなり、道中身も心も疲れ果てた私達の、安らぎの泉となりました。

9．次々と差し延べられる救いの手。

私達は武庫の荘の姉のところへ避難することを、既定のことのように地震以後決めていましたが、姉の家が無事だとの保証はありません。何度か公衆電話でトライしましたが、うまく通じず確認の仕様が無いのです。そうなると悪いことばかりが想像されて、気が重くなるばかりでした。しかし、自分

たちの唯一の避難先であると言うこと、姉たちの無事を確認すると言う目的のためにも、武庫の荘まで歩かなければなりません。いつもならば、車を走らせて30分もあれば着ける距離です。ところがその車は瓦礫の下敷き。歩くしかないのです。私はどちらかと言えば歩くのが好きな方ですが、伊久子は体調が今一つで今は余り好ましいことではなかったのです。と言うのも、脊髄に弱いところがあり、血圧も突発的に乱高下するので、最近は薬を常用していました。その薬も瓦礫の下。その上普段掛けている眼鏡もありません。これだけの悪条件を克服して、果たして武庫の荘まで約15kmの道程を歩けるだろうか。

昨日までの面影を留めない景色は、見えにくい目には余計に衝撃的な物に見え、目まいを覚え、血圧が異常に上昇するのを自覚したようでした。だから１～２km毎に休憩すると言うスローペースで歩きました。伊久子は安全のために血圧の薬だけが欲しいと、何度も訴えました。沿道の薬局も医院も軒並み被害を被っていて休業中。芦屋の保健所に立ち寄って尋ねてみましたが、「今のところ救急活動はしていません、最寄りの避難所に行ってください」との返事。幸い水道が出ていたので、トイレを使わせてもらい、手を洗うことで気分が随分良くなったようでした。これが救われた気分の第一です。

しかし、この気分も長くは続かず、芦屋の宮川交差点を過ぎた当りで、腰を降ろしてひと休みしました。そこは、外車の販売店の前だったのですが、伊久子の姿に気の付いた店の人が出てきて、「中に椅子がありますからどうぞお入り下さい」と言ってくださいました。椅子に掛けていると、別の店員さんがジュース缶を３本持ってきてくださいました。おいしかったです。これが救われた気分の第二です。

少しは足取りも軽くなって、これからの逃避行は予想外にはかどりました。国道は動かない車で一杯だし、壊れた家は歩道を塞いでいます。だから、時には中央の分離帯を歩くなどして西宮市に入りました。ここで国道２号線を離れて車の少ないところを歩くこととしました。ＪＲの山側を歩いていると、

特急列車が脱線しているのが見えました。西宮の札場筋を北に向かい山手幹線に入ろうと考えました。途中でトイレに行きたくなり、そばの新聞販売店に立ち寄りお願いをしましたら、どうぞどうぞと快くトイレを貸して下さいました。その上お店のご厚意で電話を拝借してトライしましたところ、今まで何度試みても通じなかったのに、この度は武庫の荘に通じたのです。そして安全が確認できたのです。これが救われた気分の第三です。

伊久子は眼鏡無しのままここまで歩いてきたのですが、どうにも調子が悪く目まいを覚えるくらいの状況でした。3人は目を八方に配り医院を探しました。山手幹線を東に向かって歩いていましたが、ＪＲ西宮駅の北あたりに来たときに、広川医院の看板が目に入りお願いしてみましたら、快く診察して下さり「余り心配は無いですが、念のためにお薬を出しておきましょう、この薬は弱い薬ですから副作用はまずありません」との説明でした。代金はと尋ねましたら、「保険証をお持ちでないことですし、第一停電でコンピューターが働かないから、治療費の計算ができません、いつかおついでのときに払ってください」とのこと。お言葉に甘えてそのまま武庫の荘への逃避行を続けました。その後何度か電話で支払についてお尋ねしましたが、「災害時のことですから、治療費は頂かなくて結構です」と言われました。その後分かったことですが、この広川先生は、震災後私財を投じて患者の救済に努められ、医療関係のボランティアの活動センターとして、医院を提供なさっているとか。これが救われた気分の第四です。

10. 財布・運転免許を取り出せた幸運。

このようにして武庫の荘まで歩くに当って無一文では不安ですが、それが幸いにも私の平素携帯していた財布、小銭入れそして定期入れが取り出せていたのです。私の寝室の縁側寄りの小さな戸棚に、いつもこれらのものを入れていました。この戸棚が前に引っくり返り、私達の退出の邪魔をしていたのですが、私の衣類を取り出すついでに、戸棚を少し持ち上げましたらうまい具合に扉が開き、財布などが飛び出してきたのです。定期入れには今年の

正月に更新しました、ゴールド運転免許証が入っていたのです。大変な異常状態の中で、こんな幸運に重なって恵まれるのは、よほどの幸運と言うしかないのではないでしょうか。

11. あのことも、このことも・・・。

こうして無事武庫の荘に、日の暮れと競うように到着することができ、姉たちと無事を喜び合いました。そこにさらに嬉しい連絡が届きました。千葉に住み東京でパイロットとして働いている長男の正樹が、震災の取材協力でヘリを操縦し八尾まで来ており、親の家が罹災したことを知った上司が、「休暇を取って両親の力になれ」と言ってくださったとか。そして、その日の真夜中にいろいろな食料を携えて帰宅してくれたのです。だから私達千葉・横浜・神戸に分散していた親子４人が、震災から24時間を経ない間に一堂に会したわけです。情報として安全を確かめる以上に、互いに安全な姿を確認できたことはこの上もなく幸いなことでした。

姉たちの家で約10日間世話になりましたが、その間姉たちの細かな配慮、行き届いた骨折りのお陰で、暖かい３度の食事と暖かい寝床に恵まれ、どんなに有り難いと感じたことでしょう。でも、静かな生活に騒々しさを持ち込むこととなり、大変申し訳ないことだったと思います。

震災４日目にJaneから電話。大混乱の真っ只中、アメリカから私達の避難先探しに努めて下さった彼女の親切と苦労。はたして私にここまでできたでしょうか。恥ずかしい思いをする出来事でした。

交通機関混乱の中横浜から娘婿の芳樹氏が西下、守口のお父さんと一緒に18日夜救援に駆けつけてくださいました。

一方、21日には千葉から正樹の嫁の直美さんが、半日足を棒にして探して下さった運搬車（キャリアー）と衣類など、持ち切れないくらいの荷物を持って、夜遅くに来てくださいました。このキャリアーはその後水運びに、そして今は被災地からの荷物運びに大活躍です。それより前、19日には直美さんのお父さんからは、郵便事情の混乱を縫ってお見舞いが郵送されて来まし

た。

この皆さんの速やかな対応には、ただ唯頭の下がる思い、人としての道を教わったような気がしました。

21日の夜には神戸女子大1990年卒業の南部優子さんから、ご親切にも山科のマンション提供のお申し出があり感激しました。

翌22日の夜には親戚の西田弘道さんから豊中市の住宅提供のご提案があり、どんなにか気持ちが安らいだことでしょう。

そのほか、いち早くペットボトルの水を十何本もさげて、二度までも来てくださった土山さん夫妻。などなど枚挙に暇がありません。

この数々の喜びや感動を、一々文字にしていると何か白々しく感じられ、本当の感激が薄らいでしまいそうです。と言って、何も書き残さなかったら忘れてしまいそうです。結局心の内を文字にする才能に欠けている自分を、自覚させられるだけでした。

67年間の生活の中で、我が家を失ったのは二度目です。最初は戦災そして今度は震災。この度、友人知人から寄せられた、数え切れない暖かい援助の手。このご厚意に、私はどう応えればよいのでしょうか。この言葉にできないよろこびをいつまでも忘れずに、一日も早く生活を復旧することに努めたいと思います。

何に感謝すればよいのでしょう。誠に有難いことでした。何度言っても足りませんが、本当にありがとうございました。

（平成７年３月17日記）

「わが家の阪神大震災」

林　　芳子記

（芦屋市潮見町にて被災）

1995年1月17日朝5時46分、家が大きく揺れた。びっくりしてベッドから起き上がって逃げようとすると、立っておれないくらいにぐらぐらと揺れて、ひょっとしたらこのままかな、と怖くなってその場にしゃがみこんでしまった。隣の和室から娘も飛び出てきた。どうしようと迷っている間に、ドスン、と大きな音をたてて重いはずのピアノが移動した。その後すぐ、ざあーと大雨のような音がした。揺れがおさまってから、電気のスイッチをいれたがつかない。前の晩、つい5時間ほど前、大雨で停電したというロスの夫に、「懐中電灯を買って用意しとかなきゃ」と答えたばかりで、いざ我が家の懐中電灯はどこにと捜してもその時は見当たらず、暗い中手探りで右往左往し、結局仏壇のろうそくを使った。あたりはしーんと静まりかえっており、外の様子や近所の人の様子を見ようと玄関から出た。まず階段でふらふらと足をとられた。その時、誰かが「ガスの元栓を閉めてください」と言うのが聞こえ、そうだと思って道路側のその場所に行こうとした。がそのとき、暗くて見えなかったが、道路にできていた15センチばかりの亀裂にはまり、膝と手首に怪我をして出血し、右腕をひどく打った。しかし必死の思いではい上がり、ガスの元栓を捜したが、いつもの高さにはなく、明るくなってから分かったのだが、それも反対を向いていて、何がどうなったのかさっぱり分からなかった。

夜が明けると、ガレージには車が半分埋まるくらいの砂の噴出があり、玄関口と風呂場近くでは、砂の大きな噴き出しの穴がぽっかりあいており、かなり深いところまでみえた。下水管はすべて破壊されているようだった。道路は2重に亀裂が入り、庭にも3本の亀裂があり、細い棒をつっこむと2メートル近くまで入った。庭木は背が低くなり土砂にうまっていた。家の中も、大きな石膏の彫像が階段に落ちて割れたり、書斎の本や置物などめちゃめちゃだった。

結局、家全体が30センチほど沈下し、その上真っすぐ歩けないくらい南東方向へ傾いていた。

電話がなった。思いがけずロスからだった。すこし怪我をしたもののまず無事だと伝えて安心してもらった。国内での電話はなかなか通じなかったが、意外にも国外からは通じ易かったようだ。電気は比較的速く回復し、寒さは電気ストーブで凌いだ。関東に住む息子からの電話で、1階が危ないと言われ、2階に布団を運んだ。

翌18日、朝6時から給水車を待って並んだ。2時間並んでやっと、持っていったやかんと、麦茶用の容器とに2リットルほどの水がもらえた。他の人たちは夏の水不足のときの20リットル入る大きなポリ容器を持って並んでいるので、同じ並んでも不公平は致し方なく、内心悔しい思いをした。次の給水車は12時間後といわれ、心細くわびしかった。

最初のうちは、元気でさあ頑張ろう、と意気込んでいたが、あれこれの情報を得ようと外に気を配り、水汲みも待つよりは、遠くの井戸水まで歩いて行くことになり、その上庭やガレージに噴き出した土砂を亀裂に埋める仕事もあり、体力的に限界に達し、そして精神的にも気弱になった。一番こたえたのは、近所の人は近くのプールから水を汲んで来て、トイレに流すと使えるというのに、わが家のトイレは下水管の破損で使えなかったことだった。（ずっと後になって、水道やガスが通っても、わが家の状態は全く同じで住むことはできなかった。）小、中学校まで用たしに出かけたのだが、特に夜、遺体安置所となっている体育館のトイレまで行くのは気が沈んだ。避難所では、避難している人数分の食料や、飲みものしかなく、あまった場合だけ、おにぎりをいただいた。その他の救援物資も何もいただけなかった。

主人が最初の電話のときに帰ろうかと言ってくれたとき、即座に遠くから大変だからいいわと断っていたのだが、そのあと有事の時にはやはり、心身ともに頼りになる人がそばにいてくれたらと痛感した。そして家族総出で頑張っている近所の人達を見るにつけても、家族の絆の大切さ、それも人手が必要だと

わかった。あちこちから心配の電話で、避難して来い、と誘われたが、どこも2、3時間歩いてから、乗り継ぎで行くところなのでその気力もなく、また家の見捨てるような気がして思い切りがつかなかった。

4日目、主人の会社から、お2人が、水、食料など50〜60キロもの荷物をリュックにいっぱい詰めて、はるばる甲子園から歩いて持って来てくださった。うれしくてありがたくて涙が出た。そして5日目、まだ別のお2人が来てくださった。カセット・コンロ用のボンベなど、入り用なものをいろいろ買い集めてもって来てくださり、主人の代わりに土砂を隙間に詰める仕事をしてくださった。丁度翌日が大雨という予報が出ていたので、傾いた家が余震と嵐で崩壊するのではないかと怖くもあり、自分たちだけでは甲子園まで歩いて脱出する元気がなかったのが、お2人に連れられ守られて、芦屋の家をあとにすることができた。河内長野へ向かったのだが、途中わが家よりはるかに大変な所を歩いて行った。梅田駅に着いてみると、全く別世界だった。みんなお化粧して、店にはきれいに品物が並んでいた。自分が異次元から来たような気がした。

あれからはや3カ月。その間、もっともっと大変な人がいる中で、わたしたちはおかげさまで、いろいろな人から親切にしていただき、人々の暖かさが身にしみ、こころより感謝している。

わが家のある芦屋の潮見町地区は、震災で液状化現象を起こし土地が沈下した。今後の復旧作業は、埋立地全体の土地の調査など、全体として動く問題も多いことから、個人としての揚家工事もいまだにメドがたたず、まだまだ元どおりの生活には程遠い。しかし現在、マンションで仮住まいではあるがやっと落ち着ける場所ができて感謝している。

阪神・淡路大震災を通して

外　園　一　人　記
（芦屋市で被災）

有事で難儀した時に、真の人柄と組織の力が解る。

かって熊本御出身の渡辺哲也さんが、九州電力㈱の社長に就任された時、急に近い親戚が増えたそうである。

大江健三郎さんがノーベル賞作家になったとたん、国は文化勲章を贈りたいと申し出、知人や昔からの愛読者も増えたそうだが、その大部分は“偽者”であろう。

相手が災難にあったり借金に苦しんだり、病気で困っている時に、相手のために近づいてくる人があれば、それは“本者”であろう。

関東大震災（T12.　9.　1）の2倍強、死者 5,500余名、倒損壊家屋約20万棟が一瞬にして失われ3万余名が一時に負傷した。

私は、その被災者の一人として、人間の本質と弱点と自然の力の大きさを知らされた気がする。

▼その一　大自然には、人間の力では計り知れないことの方が多い。この度の大震災の結果もそのひとつである。それを科学におぼれた人間の思いあがりで、一見客観的なデータや数字を理屈におきかえて因果関係を割り出そうとしている。数字や計算はあくまでも架空のものであって当にはならない。人間を対象にした医学や教育界でさえ解決されている領域は10％にも達していないのに、自然を理解しているなど、もっての他である。

▼その二　私の場合、普段通り5時ごろに起床して6時20分ごろまで、書斎で書きものをしていたとしたら、三方のガラス戸が倒れてきて、間違いなく“出血多量”で死んでいたと思われるのに、奇跡と幸運が重なった。読書家で本棚の下敷になって亡くなった人、両方のタンスが倒れてきたすき間で助かった人。

鉄骨（筋）コンクリートの豪華マンションが座屈しているのに隣のプレハブ

住宅は無傷のまま。私のように、前夜も早く寝たのに、その日に限って朝寝坊していて、とんできた洋服タンスの観音扉が全開していた空間に顔の部分がスッポリはまって無傷で助かった者など奇跡と運としか思えないことが多かった。

▼その三　倒壊した家から出るのも恐かったが何十回と続く大きい余震も不安であった。

避難所生活で先ず困ったのはトイレと水と各人の心のクセである。消防車、パトカー、ヘリコプターが轟音をたてて動きまわる中、ガスの異臭がして助けを求める悲鳴が聞こえるのにレスキュー隊も自衛隊もなかなかきてくれない。パジャマの上から着物をきて、その上に厚手の皮のコートをはおり、つっかけで芦屋消防署へ走ったが署員はいない。余震は続き電柱が倒れ屋根ガワラが落ちてくる。

不安と恐怖と寒さの中で避難所を転々としている間も体内時計は確実に動きトイレがあふれる。1家族に1個のおにぎりも出先きが詰っていることを思うと食べられない。空腹なのに飲食できないのは難儀の極みである。

老化したり疲れたりすると、“心のクセ”つまり「わがまま」がきつくなる。85%の人が寒いというのに、ワシは暑い！　窓を開けてくれ！　には85%以上の人が困った。避難所は人間だけでもせまいのに犬や猫をつれてきている人がありそれが異様な声で鳴く。避難所生活も日がたつほど要求が様変りして人間関係がネジレてくる。

▼その四　民間が先、行政は後手ゴテ。企業は卆先、学校はダメ。もともと勤務時間と給料の範囲でしか動いたことのない人に、サービスとかボランティア精神を期待するのが無理であろう。有事の時に、日頃の取組みの成果とリーダーの実力の差がでる。信念・企画力・判断力・指導力や実践力は、日常活動で育まれ誠意で発揮される。

三菱地所㈱の社員、川崎重工㈱のマンションの管理人や大学生を初め若者のボランティアには頭が下った。イヤリングをはめ髪を染め、女と車だけが彼等の生活の全てかと思っていた自分の間違いを恥ずかしくかつ申し訳なく思った。

組織や団体で班長や係長になっている人は、50%を他人のために尽くさなければならない。ましてやそれ以上の“長”は、我れを忘れて他のために尽くすべき等とは言わないが、どこでも組織の最高責任者は、持てる力の殆どを公のために発揮して当然といえよう。

その気も力もない、統率力や実践力もないのに肩書きだけにしがみついている人があるとすれば、それは公害であろう。

ヒトは、地位や姿形だけで判断してはいけないと痛感することが多かった。

暴力団山口組の組織力と行動力は、この度の震災で多くの被災者を救った。医師・看護婦・薬剤師で構成された野村佳成医療班のボランティア活動には芦屋市9ヶ所の避難民が大いに助けられた。弱者の立場で誠意を尽くす若者・組員・自衛隊員・医療班・外国の人達、全てに感謝の気持がこみあげてきた。

▼その五　動物達は知っていた。地震の前日から家の近くの野良猫がいなくなった。家のネズミがいなくなったから猫の姿がみえなくなったのではない。北淡町では、地震の前日に鯛が大漁だった。こんな例はいくつもある。思いあがった人間様よりすぐれた能力をもった野生動物はいくらでもいる。日本の地震学者は震災のあとで理屈をつける。そして言い訳をするが、そんなことでは間にあわん。“間”が抜けたことをいっても始まらん。

村山総理、隣の大阪府知事も被災者とは感覚や取組みがズレていたが、それは仕方がない。立場が異なり被災していない人に被災者の気持や実態にフィットせよ！　と思う方が無理であろう。

震災後、3日目にはスイス、ドイツ、デンマークの知人から見舞状が届き、4日目にはインドネシアのスラバヤと中国のハルビンや成都からＨＯＫＡＺＯＮＯ！　大丈夫かと問合せがあった。101歳の菅サルさん姉妹（長崎県五島）、北海道のフィジカルカルチャーを初め多くの方々から救援物資と励ましをいただいた。

全国各地から被災地にかけつけていただいた方々、激励していただいた皆さんは、かつての被災者か心あたたかい知人とボランティアの若者が多かった。

親切な方々のおかげで4月10日にはトタン屋根ができ、100日目には自宅で風呂にもはいれるようになった。雨が降ると屋上オーケストラになる仮住いでも我家はおちつく。震災後120日がすぎて、ほっとしたせいか下腹と両肩あたりから、元気の“気”がスーッと抜けていく。解体工事やガレキの山、サラ地に飾られた1輪の花や線香をみるたびに、心が疼く。大阪に避難していた52日間、連日30km余りを歩いて、9ヶ所の避難所巡りをせずにはおれなかった疲れが今でているのかも知れない。

大地震を経験して

都築研究室助手　村　田　恵　子　記
（西宮市甲子園口；下宿）

一月十七日、午前五時四十六分。私にとって忘れられない出来事が起こりました。西宮のマンションの三階に住んでいた私は、まだ布団の中で熟睡していましたが、突然の地震に目が覚め、あまりの大きな揺れに驚き、どうして良いか分からずじっとしていました。するとまた大きな揺れが…。これは只事ではないと思い、隣で寝ていた妹と一緒に外へ出ようとして部屋を見渡してみると、家具、電気製品が全て倒れているではありませんか。玄関のドアもなかなか開かず気は焦るばかりです。ドアを蹴ったり叩いたりを繰り返しようやく外へ出ると、辺りはガスの匂いが充満しています。夜が明けてくるにつれ、私のマンションの惨状が露になってきました。一階部分は歪んで壁も落ちてしまい、一目でもう住める状態ではない事は分かりました。

結局その日は、食糧の買い出しに行ったり、公衆電話で広島の両親としばしば連絡をとったりしながら、近所の方々と一緒に公園で過ごし、夜は小学校で何度も襲ってくる余震に怯えながら、あまり眠ることもできず、夜明けを待ちました。

翌日には、幸いなことに、大阪の親類宅に落ち着くことが出来、新しい部屋も早くに見つかり、今はもうそこで生活しています。不自由のない生活が出来ることが、これほど有難いものかと感謝しています。

現在は、毎日電車に乗って倒壊した家屋や、長田の焼け跡などを見ながら学校に来ています。しかし、着実に復興していることも事実のようです。時が経つにつれ、街が綺麗になっていくことは大変嬉しいことです。でもそれと同時に、私達の記憶も薄れてゆくのは悲しいことです。生きているだけでも有難いと、心から感じたある時を忘れてはいけないと思っています。命があって尚且つ、健康でいられるということは、当たり前のことではないのですから。

美術研究室助手　東　　紀美子　記
（明石市太寺天王町；自宅）

１月１７日、朝、５時46分。突如として、ゴトゴトという音が私の脳裏を掠めた。２階で東向きに寝ていた私は、夢でも見ているのかとウツラウツラしていた。次第に家中がガタガタと震え出し、ギューッ！という音と共に、掃き出し口のサッシ雨戸がパタパタとレールから外れ落ち、障子はこちらに向かって倒れてくるさまを見て、一気に目が覚めた。心の中で「落ち着け、すぐに止まる。焦るな。」と自分自身に言い聞かせた。が、だんだん震動が大きくなり、次の瞬間にドッドーン、ドーンとけたたましい地鳴りのような音がして、体が上下に跳ねた。まるで、ゴジラが大暴れしているかのようなパワーで、１階から、いや地中から物凄い力で突き上げられた。どうしようもなく、体は硬直したままだった。その時、ウッと息が出来なくなるほどの激痛を足の方に感じたが、まさか和ダンスが倒れてきたとは、うす暗い部屋の中では想像できなかった。「ただ事ではないぞ！」全身に電気が走り、今までに体験した事のない恐怖の念にさいなまれた。一瞬にして訪れた生命への危機感に、「これは現実なのか？悪夢ではないのか？」と、疑った。我に返った私は、急いで上半身だけ体を起こそうとして、目の前に覆いかぶさっている和ダンスを見て驚いた。夫に助けられ、気が動転していたせいか、痛みや腫れを忘れたようにとにかく逃げ出した。

阪神大震災から、２ヶ月が過ぎた。が、今もなお神戸を中心とする阪神地域では、倒壊した家やビル、亀裂の入った道路等が、容赦なく目に飛び込んでくる。震災の傷痕がいかに大きくいたたまれないものか。精神的にもそのダメージは強い。そこ、ここに生活があったはずである。

震災の傷痕が消え、以前のような生活が戻って来ることを願い、やり場のない気持ちを抑えながら、とにかく今は物事を前向きに考えてゆきたい。

阪神大震災を須磨で

―生涯忘れられない日―

事務職員（入試広報課）　山　本　尚　実　記

あの恐ろしかった１月17日からはや半年が過ぎ、次第に神戸の街も復興してきましたが、私はあの日の出来事を、決して忘れる事はできません。

５時46分、私はまだ熟眠していました。ドーンという異様な音と激しい揺れで目が覚め、何が何だか訳がわからず、ふとんの中でうずくまっていました。やがて体の上にテレビが落ちてきたり、電気のカバーが落ちたり、タンスが倒れてきました。地震直後は、外も部屋も真っ暗でまわりがどうなっているのかも全然分からず、ただ、外で近所のおばさん達の叫び声がするので、少しでも早く外に出なければと思い、開かなくなっていた玄関のドアをたたいたり、けったりして必死で開け、やっと外に出ることができました。すると、大家さんの家から「危ないから早くこっちへおいで」という声が聞こえてきたので、私はパジャマ姿のままでそこへ走って行きました。そこには同じアパートに住む人たちが何人か集まって「大丈夫？」と声をかけて下さったので、とても心強かったです。私は“１人じゃない。みんながいるから大丈夫。”と思い、いくらか安心することができました。これが全く１人きりだったら、どんなに心細かったことかと思います。

電気も水もガスも止まってしまったし、電話もつながらず、何の情報も入ってこないので、大学や短大がどんなことになっているのかわからず、不安は募るばかりでした。暫くしてやっと香川県の実家に電話がつながった時には、大声をあげて泣いたことを今でも覚えています。２・３日は大家さんの所でお世話になり、何とか20日からは実家に帰ることができ、ほっとしました。実家ではこれからどうすればよいかを両親と相談したり、友達に会って話したり、何となく落ち着かない毎日でした。

そのうちに少しずつ神戸の状況もわかるようになり、早く学校に勤務するため、とりあえず須磨に帰り、入試広報課の山中課長がお世話になっておられたお宅に、居候させていただきました。そのお宅では、とてもよくしていただき、人の心の温かさをこんなに感じたことはありません。本当に感謝しています。また、暫くは寒い中を近くの小学校に水をくみに通いつらい思いもしました。お風呂は友達のところで、入らせてもらったり、その他にもいろいろ助けていただきとても嬉しかったです。こんな時は、お互い助け合っていくことが大切だということを実感しました。

今では、もうライフラインを始め、交通手段もだいぶ回復し、一時の不便さもなくなりつつあり、明るさももどってきたように思います。

この大震災では多くの人達が尊い生命を失いました。今なお被災した方が避難所におられます。建物が破壊されたり、焼失したり多くのものを失いました。しかし人々が互いに助け合ったり励まし合う中で、人の心の温もりが通い合う等、得たものもいっぱいあったと思います。この震災で得たことを生涯忘れずに、何事にも頑張っていきたいと思います。

阪神大震災を
新長田の街で

事務職員（庶務課）　斎　藤　真理子　記

平成７年１月17日、その日の新長田の街を私は生涯決して忘れることはないだろう。新長田は私が学生の頃から住んでいた街であるからだ。

地震の起こった直後は、何がどうなったのかわからぬまま、着のみ着のままで外にとび出した。最初に見たものは、普段は建物の陰に隠れて見えるはずのなかったＪＲ新長田の駅付近から赤々と燃え上がる炎だった。見渡せる範囲で少なくとも３ヵ所から、早々と火の手が上がっていた。

その時初めて、今日起こった地震の被害は自分の部屋の中だけのことではないのだ・・・もしかしたら、街全体が本当に大変なことになっているのではないのか・・・私はその事実に直面した。

しっかりと周囲を見渡すと、マンションの隣の建物は全壊しており、崩れた建物の瓦礫が前方に流れ出ていた。国道２号線上にある阪神高速道路の橋げたは、コンクリートが落ちて中の骨組が見えていた。

私のマンションも１階部分が大きく破損しているのがわかった。必死でかけ降りた非常階段も、部分的に崩れ落ちているのを見てぞっとした。今まで見えていなかった凄い風景が次々と現れて来た。

しばらく暗闇の中に立ちすくんでいたが、駅前で発生した火事がどんどん大きくなり、国道２号線側に迫って来ていたので、２号線沿いにある私のマンションも危なく、このままでは燃えてしまうかも知れないと思うと、体の震えが止まらなかった。遠くで消防車のサイレンは聞こえているが、瓦礫が道をふさいでしまい、とても現場まで行けない様子だった。火が消されない苛立たしさと、恐ろしさとで、沢山の人が泣いたり叫んだりしていた。とにかく早く火を消して・・・お願いだから焼けずに残って・・・という思いだけだった。貴重

品だけ取り出して、マンションから離れた。近づいて来る炎の煙と煤とで、近くに居ることが出来なかった。寝ていたままの恰好に、貴重品を入れたかばんだけを下げて、ただただ町内を歩きまわった。

街の風景はすべて変わっていた。新長田の街全体が全壊していたといっても過言ではない程、まともに残っている建物はコンクリートのビル数軒だけで、民家は殆どつぶれていた。それに追い打ちをかけるかのように火は崩れた建物をなめつくしていた。

まともに歩ける道路は見当たらず、あちらこちらで電柱が倒れ、切れた電線が頭上に垂れ下がっていた。ＪＲ新長田の駅舎も線路も崩れ落ちていた。怪我をして血を流している人や、横たわったり座り込んでいる人がそこかしこにいた。また、多くの住民が布団を頭からかぶって歩いていた。テレビや教科書で見た戦争で空襲に遭った後の様子と同じであった。

すでに明るくなっている時間なのにまだ薄暗く、煙が立ち込めて煤と灰で空はねずみ色をしていた。太陽は夕日の様に真っ赤な色をしていた。サイレンの音や物が焼け落ちる音、人の叫び声等いろいろな音が入り混じって聞こえていた。

歩き疲れて、避難場所になっている小学校を思い出し、そこに行った。朝の10時ぐらいだったと思う。余震が続いていたので、体育館には入らず、校庭に座っていた。聞こえてくるラジオで初めて地震に関する正確な情報を得ることが出来た。寒さと怖さとで、また体が震え出した。時間がたつにつれて、小学校の周囲も燃え始めたので、その場を離れた。自分のマンションのことがずっと心配で何度か戻ってみたが、かなり火が近づいて来ていたので危険で近寄ることが出来なかった。

誰とも連絡がとれず、その後もいろいろな場所を転々としていたが、あれは２時過ぎ頃だったと思う。テレビを見て火災が起こっていることを知り、かけつけてくれた友人に奇跡的に出会った。私の名前を叫んでくれた時、一瞬自分の耳を疑ったが、友人の顔を見た時は安心してつい涙が出て来た。この時、本

当に助かったと思った。マンションのことが心配だったが、とりあえず新長田の街を出ることにした。

震災の翌日、私のマンションは、幸いにして焼けずに残っていることをテレビで確認出来た。火の進んだ方向に対して背を向けて建っていたことと耐熱コンクリートで出来ていた為、無事であった。

その後、何度か新長田の街に行ったが火事の起こった場所は焼け野原になっていた。いつ行っても焼け焦げたにおいがしていた。あちらこちらに花や水が供えてあり、避難先が書いた貼り紙が残してあった。

あれからいつの間にか半年が過ぎたが、神戸の街もそして新長田の街も日々復旧に向かい、新しい街づくりが始まっている。

私は幸いにも、地震から約1ヵ月後なんとか大阪に家を見つけ、生活できるようになり今に至っている。被災地では、まだまだ不自由な生活を余儀なくされている方々も多くいらっしゃることを思えば大変心苦しい。

私も今度の地震で、多くの方々に助けていただき励ましてもらった。これほど人の温かさを感じたことは初めてだった。本当に感謝の気持ちでいっぱいである。

日々落ち着いて来た今、私自身が誰かのために、何かのために力になれたことがあったかと考えると、人の力を借りるばかりで何もできなかったことに気付き、もっと強くならなくてはと思った。そして、支えて下さった人々のことを決して無駄にすることがないよう、私自身も何かのために役に立てる人になれるよう努力していこうと思う。この地震のことも、大好きな神戸の街に住んでいた証として、心にしっかりと刻み込んで、怖かったことも、辛かったことも、大変だったことも泣いたことも、そして嬉しかったことも、見たもの感じたもの全てを貴重な経験として、いつまでも大切にしていきたいと思う。

１月１７日　阪神大震災に思う

保健室　　坂　東　節　子　記

ガタガタガタガタ、ポーアイマンションの５階、下から身体を突き上げるような強い衝撃で目覚めた。寝ていた布団の上に、巾２ｍ高さ 180cmの大きな箪笥が激しく揺れ身体の上に倒れてきた。かなりの重さだったらしい。後で家族が必死で持ち上げたが、びくともしなかったそうだ。何とかわずかの隙間を作ってくれたので、やっと呼吸が楽になり身体をよじりながらやっとのことで、外へ這い出せた。部屋の中はまだうす暗くドッドッドッドーと勢いよく流れ落ちるような水の音。ガラスが割れ飛び散る音。揺れがおさまった後もその音だけが部屋にひびき、何が何だか判らない恐怖が襲ってきた。ようやく身体は抜け出せたものの、足腰が立たず又へたりこんでしまった。しかたなく這いながら、隣のリビングに出た。手を床についたところ、そこは熱湯が床に流れ出ており、温水器が壊れたらしい。慌てて横にあった長椅子によじ登った。それから先は、下半身の痛みで動きがとれなくなり、そのまま動けなくなってしまった。

夫も倒れてきた家具で顔を打ち出血していた。幸い娘二人は怪我も無く、部屋は散乱していたものの無事だったことが何よりだった。夫と娘が、なんとか部屋が歩ける様に散乱したガラスのかたづけをしているのをぼんやりとながめていた。あんなに重い家具が倒れてきたのに不思議にも痛みも身体の上に落ちてきたことも記憶に無かった。部屋の中はまだ暗く、家具の倒れてきた瞬間の映像が無くてよかった。少しでも腰を動かすと激痛だ。何とか病院へ行こうと思い、近所の人達の助けを借りてその日の昼ごろ市民病院へ行った。子供の勉強に使う事務椅子に身体をくくりつけ、５階からかかえておろしてもらった。しかし、市民病院はドクターもあまりおられず、結局マンション集会室で２日、友人宅で３日、痛みをこらえて我慢することになった。その間救急車の音もな

く、市民病院はひっそりしていた。

マンション2階の集会室の和室に高齢者の一人暮らしの方、病人の方、怪我をされた方等が運びこまれた。私もご厚意で2日間そこでおにぎりの炊き出しや甘酒、みそ汁等をわけていただき、寝たっきりで寝返りも排泄も思うにまかせない身体を、皆してお世話になった。日頃お付合の無い方達であった。本当に有難く感謝している。集会室では何度も温かい食事を配って下さった。私は余震の続く中、あれこれ不安がつのり何ものどを通らない。同室のお年寄から「食べられる時に何でも食べておかないと体がもちませんよ」「お腹が減っていなくても食べた方がいいですよ」何度もおっしゃった。お年のいった方ほど配られたものは何でも召し上っておられて、戦争体験がそうさせるのか感心してながめていた。管理組合の組織がしっかりしていたこともあるが、地震後各部屋を廻られてようすを聞き状況把握につとめられたことは大変心強かった。マンション内のボランティアで、温水器の倒れたのをおこしに行ったり、老人の家の水汲みなど、我が家の事は後まわしにしても、困っている人達の助けを順番にしていくなど、日ごろからの自治会の組織の強さを改めて強く感じた。

この度の地震後、多くの方々が親戚知人宅にお世話になり同居生活も長くなると、いろいろ人間関係のむずかしさが出てきたと聞く。私達家族も同じ島内の別のマンション（被害が大変少なかったところ）の友人宅へ家族して約2週間もの長い間ごやっかいになった。それぞれ分担を決め、家事の協力もしたが、快く置いて下さったご家族に、本当にお礼の気持ちで一杯だ。非常時には一家族では決心のつきかねることも、二家族で考え行動した事は何よりも心強く合理的だった。

5日後に、主治医の先生のお世話で労災病院へ入院させていただき、骨折2ヵ所、約2ヵ月の入院治療となった。震災後病院内で様々な人間模様を見聞きした。退院しても全壊で家の無い人、若い高校生で足が立たなくなった人、家族バラバラになった人、それぞれのドラマがあった。患者のみならずＤｒもナースも医療スタッフ皆被災者だ。御家族、家の事等、気にかかる事も多かった

と思われるが、泊まり込みで勤務されていた。

退院後、久々の我が家に帰った時、寝室に入ったとたん急に不安な気持ちが広がり、動悸がしだした。夜も落ち着かず恥ずかしい話だが2日間押入れの中で寝た。

予想だにしなかった神戸の地震、日ごろから何の準備も心構えもせず暮らしていた私達一家に、震災後母親の入院、祖父の死と次々と困難が押し寄せた。平時には家事などしない夫や娘が、このたびは家族力合わせて乗り切れた事は何事にもまして大きな財産になったと思う。怪我をして入院したものの、病院の窓から見える景色は別世界のように平穏で、活断層で分けられた明暗をはっきりあらわしていた。2ヵ月間世の中の動きをテレビや話しでしか理解できず、何度も間の抜けた事を言って家族をイライラさせた私だが、何はともあれ、平和で明るい生活ができるよう一日も早く神戸の復興を願うものである。

地震が起きて今に至るまで思う事

家政旧4回生　池　田　敦　子　記
（須磨区；下宿）

地震が起こった時私は、まだ睡眠中でした。私はよく寝ている時さっ覚なのですが宙に体が浮かぶような事がたまにあるので、その時も最初はそれなのかと思っていました。しかし、揺れがだんだん現実のものへとなり、ようやくこれは現実であることを把握しました。2回目の揺れのときは、地鳴りのゴオ～ッという音の後ガタガタガタ・・・と激しく揺れだしたので、布団の中へもぐっていました。その時も、まだ「これは夢よね」と自分に言いきかせるようにしていました。現実の事だと決して思いたくなかったのです。2回目の地震の後、私は外へパジャマのまま飛び出しました。外へ出る途中、ぐちゃぐちゃになった部屋を通るとき、普段重くて動くことのないような冷蔵庫や食器棚など全て倒れていて、しかし地鳴りの音の方がそれらが倒れる音よりも大きかったので、そこを通るまでは物がたおれ、こわれている事に気付きませんでした。

私の住んでいたところは海岸に近い所だったので、外へ出ると大勢の中の誰かが「津波がくる」と言ってたので、とりあえず皆で月見山の方まで歩いて逃げました。が、その後ラジオで、津波の心配はないと知り、もう1度自分の家へ戻り、暖かい格好へ着替えて、しばらく部屋の中にいました。懐中電灯は、以前から置いていたのですがラジオはなく、情報が入ってこないので、不安なのでもう1度外へ出ました。だんだん空が明けてきたけれど空の色がいつもと違い、どす黒いような赤いような、この世の終わりのような空の色をしていました。

明るくなるにつれて、これが現実のものだとだんだん分かってきました。倒壊してしまった家、生きうめになった人を助ける人々、ガスもれ、火災、頭が割れて肉片が肩についてる人が歩いていたり、ひっきりなしに消防車、救急車、パトカー、ヘリコプターの音がし、あちこちで火事がおこっているせいか灰が

空からどんどん降ってきました。外にいても中にいても余震が何度もあり、地鳴りと揺れにおびえ、何が何だか分からない状態にいました。

連絡もなかなかつきません。私は友人と一緒に居ました。１人でいるとすごく心細いものです。

それから、今後どうなるのか分からぬまま、私達は須磨周辺を歩きまわりました。昨日までの風景がまるでうそのような恐しい光景でした。どうしてこんなことが起こったのだろう、その時の私は、現実逃避をしていました。「夢」と思いこませていました。夕方前ちょうどタクシーを偶然ひろえたので、友人ととりあえず三宮まで行こうということで乗りましたが、運転手さんが「三宮までこわくてとても行けない」という事で神戸駅のところでおろされました。友人の両親は大阪の方にいたので、なんとか連絡をとり、車のこれるところまで私達は歩いていくことになりました。私は何１つ物ももたず、ただ固形の食料と懐中電灯をもって歩き出しました。テレビなどでよく映っていた43号線のひどいところも見てきました。夜になると電気もなくまっくらで、歩いているとすごくこわいものでした。ときにはトラックの音も地鳴りの音のようにきこえ、こわかったです。それしか言いようがありません。

途中、休けいを何度かしたのですが、どこもガラスの破片や建物のくずれているところで、とりあえず早く脱出したかったので足の痛さも忘れて、私達は歩き続けました。５～６時間以上は歩いたと思います。武庫川のところで友人の両親と合流し、友人の家へ到着したのは夜中の12時でした。私達はすすにまみれていましたが、その日は疲れていたのか、すぐにねむりに入ってしまいました。

翌日、私は親せきの家へ行ったのです。大阪の方は、神戸の地震がうそのように町などもちゃんとしていました。はじめに電気があって、あたたかくて、そういうところへ着いたときはとてもうれしかったです。

しかし、何日かして、大阪でも余震が何度もありました。もう、かすかな揺れにも敏感になってしまい、とてもこわくて、でも地震の前は「地震がきたら、

こたつやテーブルの下へ入る」などと分かってても、いざ地震となると、どうしようもなく、頭がパニックになって、身動きとれず、じっとしたままブルブルとふるえることしかできませんでした。

あれから21日たちましたが、今だに恐怖はとれません。何もなく平凡に送っている生活がどれほど幸せだったかひしひしと分かりました。ケガなどは全くしなかったけれど、精神的にかなりまいってしまいました。もう、あんなことが起こらないよう、祈ることしかできませんが、お祈りする毎日です。

大地震を体験して私の考えたこと

家政旧１回生　国　分　朋　子　記
（須磨区；天神寮）

平成７年１月17日の早朝、ものすごい揺れで私は目が覚めた。ベッドに寝ていた私は布団を頭までかぶって、この部屋の天井が落ちてくるのではないだろうかと、ただ恐怖に脅えていた。この同じ瞬間に私も含めての大勢の人々が恐しい思いをしたと思うとぞっとすると同時に、自然の力の大きさを思い知らされた。

私は結局、大分の実家に帰れるまでの２晩、すぐ近くの小学校で避難した。まさか自分が避難所生活をするなんて思ってもみなかったし、避難所生活は想像以上に辛かった。辛いという最大の理由はやはり肉親がいないということだった。避難所にいる周りの人々はみんな家族だった。私は隣の部屋に住んでいる女の子と一緒にいた。しかし、その人と顔を合わせるのも話をしたのも、この地震がきっかけであり、今まで一度も会ったこともない人だった。避難所での夜はとても寒く、しかも余震がたびたびあってとても眠れなかった。不安でたまらない夜だった。次の朝、避難所に新聞がまわってきた。新聞の一面には、被害の大きかった長田区や東灘区の写真が載っていた。戦争の後のようなあまりの悲惨さに私は今までずっと堪えていた涙がどっと溢れてきた。でも、泣いているのなんて私一人だけだった。周りの人は少し険しい表情をしながらも淡々と新聞を読んでいた。みんな現実をしっかりと受けとめているのだなと思った。私はまだ信じたくない気持ちが大きかったのだと思う。地震の後、２週間ぐらいずっと、寝る前には必ずといっていいほど、明日の朝、目が覚めたら夢であったと笑えればいいのにと思っていた。それほど私は現実をなかなか自分自身に受け入れるのがむづかしかった。

自分の実家である大分に帰ってから、無気力の日が何日も続いた。しかし落ち着いてくると、現実をしっかり受けとめなければならないんだと強く思うよ

うになった。もうこれが夢でありえないことを自分の中で認めた。

この地震によって改めて自分の将来や自分の人生について考えた。神戸にもだんだん慣れてきて、本来、自分がこの大学に入学した目的を忘れかけてきていたような気がする。私は家庭科の教員になりたくて、その夢を果たすために入学したのだ。本当に目が覚めたような気がする。この地震で多くの人が犠牲になった。若くして亡くなった方もたくさんいる。彼らはすべて終ってしまったのだ。それを考えたら、私はがんばらなくてはと思う。生きるということの重大さを知ったし、自分が生きていくことに意味がなければならないと思った。

これから先、私の人生において、この地震があったからこそ、今の自分になれたんだと思えるような自分なりにすばらしい結果になればいいと思うし、そうならなくてはいけないような気がする。

そして、この神戸が復興し、今までよりももっとすばらしい都市になるために、私の出来ることは何でもしていきたいと思う。

「阪神大震災」で思ったこと

家政旧４回生　北　村　和　子　記
（長田区花山町；自宅）

テレビでよく「震度５はこんなかんじです」と、体験している番組がありますが、「一度体験してみたい」と思っていたら、こんなに早く体験してしまいまいた。こんな形で体験するとは夢にも思っていませんでしたが、テレビで見るよりも数万倍ものすごいものでした。揺れている間は何もできず、ただただ家がつぶれないことを祈るだけでした。家はつぶれませんでしたが、机の上の本はばらばら、台所は食器が散乱していて足の踏み場がない、テレビは転がっている、と散々で、震災後も水道・ガスのない究極に不便な生活が一ヵ月ほど続きました。

そのような混乱の中で、私が一番感じたことは、人は一人で生きているのではなく、助け合って生きているのだなあ、ということです。給水車は全国各地から救援に駈けつけてくれ、友人からは心温かい電話や手紙や救援物資が届けられました。そのほかにも普段の生活では見られない人の助け合っている姿をいろいろ見ることができました。そのような出来事の中で私の心に深く残っている出来事は、私の伯父の事なのですが、次のようなことでした。

伯父は地震のときはすでに仕事場に出ていて、あの突き上げられるような激しい揺れの後、飛んで自宅へ帰ると、自宅は全壊、幸い家族は無事でした。その後は自分の家のことより、近所の人を助けることしか頭になかったらしく、がれきの下から数人の人を助け出したそうです。そして伯父、は去年から体調がすぐれなかったので、こういうときにしかなかなか休めないし、と地震の数日後に病院へ検査に行ったのですが、伯父の体はガンに侵され、すでに末期の状態だったのです（伯父は最期までそのことは知りませんでしたが）。その伯父も本当にあっと言う間に亡くなってしまいました。そんな体でありながら、自分のことよりも、困った人のことや！と一生懸命な伯父の姿を思うと、健康

で何不自由ない私はこの震災で困った人のために何かできたのだろうか？と考えさせられました。これからは私も伯父のように、困っている人がいたら自分のことをなげうってでも助けることができるような人にならなければ、と心から思いました。

「大震災を体験して思うこと」

家政旧１回生　川　端　直　美　記
（兵庫県揖保郡太子町；自宅）

信じられなかった。自らの目を疑った。テレビの向こう側の世界は、まるで、戦争が起こっているかのような醜悪な景色としか思えなかった。そこには、自分が歩いてよく知っている、しかし違う、あの場所ではない。そう信じたくてしょうがないような映像があった。少し前まで学校へ行く用意をしていた私は鞄を持ったまま、テレビの前から動くことが出来なかった。地震が起きた時、とにかく怖かった。約10年前、この辺りでも山崎断層により、震度４くらいの地震があったらしいが、私が覚えている限りでは、あれほど恐ろしかったことはない。しかし、まさか学校に行けないほどの被害を被っているとは、あの時、思いもしなかった。あれから一ヶ月たった今、死者の数を聞く度に、テレビからの情報で死者二百人と聞いて驚きと共に信じられない思いでテレビの画面を何度も見直していたことを思い出す。しかし今、ようやく人々は、予想もしなかった現実をなんとか受け止め、甚大な被害を克服して復興をめざそうとしているのだ。

地震で電車、新幹線がほとんど不通になっている中、私は、２月25日に大阪フェスティバルホールで開かれるバレエの公演に出演しなければならないため、毎週日曜日、大阪まで稽古に通っている。加古川線、播但線（谷川、三田、宝塚を通る）を乗り継いで、４時間かけて行く方法、神戸線、代替バスを乗り継いで行く方法、また、船を利用するなど、行き方はいろいろあるが、だいたい往復で10時間くらいかかるので、とてもしんどい（被災者の方たちに比べれば全然たいしたことはないのだが。）しかし、私がしんどいとかいうことはどうでもよいのだ。大阪に行く途中に、神戸のなんとも無残に壊滅した姿をこの目で実際に見た時の無力感、やりきれなさは例えようがない。しばらくの間、一体どこの風景なのだろうとまるで神戸ではない別世界に来ているような感覚に

襲われていた。これは紛れもなく本当に起こってしまった惨事なのだと、ようやく思えるようになるに従ってそこで避難生活を送っている人々の恐怖や苦痛を思い、ただ、義援金を送ることぐらいしかできない自分が腹立たしくてならなかった。私は被災者ではありません。被災したことのない私がここで何を言っても、何が分かると言われるでしょう。そのとおりです。しかし、被災者の方たちにこれだけは分かってほしい。応援している人々が世界中にいることを。海外に行っていた姉は、外国人と話した時、誰もが最初に「神戸は大丈夫なのか」と口々に聞いてきたそうだ。それを姉から聞いた時、人間の心の暖かさを感じた。テレビで「ほんまに被災者にしか分からんことが、ようけあるんや。」と言っている人がいた。しかし、分かってほしい。その本当の気持ちが分からないことに悲しみを覚え、ただ、頑張ってほしい。早く活気のあったあの神戸に戻ってほしい。そう願っている人がいることを。

こんな時、人の弱みにつけこんで悪行をする人間も中にはいます。しかし分かってほしい。毎日、手を握ってニュースを見ている人の方が数多くいるのだということを。全壊してしまった家の前を通った時、その散らばった木々の前でじっと座り込んだまま動かない、動こうとしないおばあちゃんを見た。当然何も出来ずに通り過ぎた。しかし分かってほしい。何かしようと思っても、声をかけることすらできないで涙で前が見えない人間がいたことを。

この地震で、自分はなんてちっぽけな人間にすぎないのだろうと実感させられた私であるが、毎日、なんだかんだと忙しい日々を過ごしている。この地震が起こって、思うこと、考えることはいろいろあるが、こんな私に訴えることなどない。ただ、私のように、全ての人間が幸せであってほしい。そう願うだけです。心から・・・。

「震災を通して思うこと」

家政旧１回生　片　山　恵　美　記
（須磨区；天神寮）

１月16日、私は東灘区に住む姉の所へ遊びに行っていて、16日中に寮に戻るつもりでしたが、熱が出て結局帰ることが出きず、17日学校も行けないだろうと思っていました。それが幸いだったのかわかりませんが。

17日の朝、突然の激しい揺れに私は、何が起ったのかわからなかったが、姉の「地震よ」の一言ではっと気づきました。その間、ものすごく長い時間だったような気がしました。

姉の住む所は、女子学生寮なので、多数の女子大生などいて、もちろん寮母さんもいました。部屋から外に出てみると、みんな廊下に集まっていました。ふと外を見てみると、もうポツポツと火の手があがってました。大きな看板なんかも傾いていました。でも、その時はまさかこんなに酷いことになるとは、思いもよりませんでした。

一時間くらいたつと、警察官からグランドに避難するようにとの警告が入り、私達はその日初めて外に出ました。外に出てみると、一軒家はほとんど全・半壊してて無残でした。家だけでなく、マンションや学校、道路、もう何もかも壊れはてて、なんだか現実とは思えませんでした。食べ物もほとんどなく、近くのコンビニに行ってみると、長蛇の列で、もう品数もなさそうな感じでした。

その晩、とにかく余震が恐くて、姉と２人でいるのも心細くて、私達だけでなく周りのみんなもそう思ったのか、みんな部屋には戻らず、廊下に布団をもち出し、横にラジオをおき、くるまって横になりました。ラジオでは、一時間おきくらいに死者の数が増えていき、また余震が激しく、恐怖でいっぱいでした。もう一度大きな地震がきたら、この建物も弱っているだろうから、やはりくずれるのでは、という思いでいっぱいでした。

次の日、福岡の実家に帰りました。福岡ではもちろんみんな普通の生活で、

今自分がここにいるのが不思議に思えて、本当にこっちに帰って良かったのかなあと錯覚をおこすほどでした。

あれからもうすぐ２ヶ月たとうとしていますが、今でもあの恐怖は忘れることができません。今、自分がこうして元気でいるのが、とてもありがたい事だと思います。だから、今だに避難生活を続けている人に何かしてあげたいと思います。でも何をしてあげればいいかなあと考えると、なかなか難しいです。

この地震を通して、人の温かさをものすごく感じました。助けあう気持ちの大切さを実感しました。もうすぐ神戸に戻るけれども、私も一生懸命頑張りたいと思います。

大地震を体験して思うこと

家政旧１回生　稲　葉　　薫　記
（須磨区一の谷町；自宅）

私は、はっきり言って被害がこんなにも大きいとは思いませんでした。１月17日、５時46分、最初『グラグラッ』という３秒ぐらいの揺れで目が覚め、ふとんの中にもぐりました。そしたらそのとたん横揺れ、縦揺れと、10秒ぐらい続いたと思います。私の寝ているふとんの上に、本棚やタンスが全て、倒れてきました。幸いにけがは、ありませんでした。ちょうどその時、群馬県に、単身赴任中の父が帰ってきていたので、タンスや本棚を持ち上げてくれました。普段は母と二人なので、もしかしたら、母だけならば、タンスなど持ち上げれなかったかもしれません。今考えても本当におそろしいです。家の中は、もう手のつけようがないほどめちゃくちゃで、片付ける気力もなかったのですが、電話が通じた友達が「もう、ほとんど片付けたでー」と言ったので、こんなのんびりしていてはいけないと思い、片付け始めました。不安な毎日をすごす中、友達と話す事が、こんなにも落ち着くなんてと感じさせられました。

地震で、水、電気、ガスが止まり、本当にこの三種のありがたみがわかりました。電気は地震から３日目にきたので良かったのですが、水とガスはなかなかきませんでした。近くの川まで水をくみに行ったり、配給の水をもらったり・・・今まで、全く予想もしてなかった事を行っていて、他人事じゃないなと考えさせられる毎日でした。その後、１月30日に水、２月11日にガスが出ました。全て出そろった時は、感激、本当にうれしかったです。しかし、まだガスが出てない所はたくさんあります。家がない人もたくさんいます。今は家で、生活出来るという事だけで、私は幸せだと思います。地震を体験して、生活の過し方が変わりました。いつ次の災害がきてもいいように玄関には、最低必要な物を入れて、リュックを置いています。電車に乗ってても、ここで地震がきたら「この窓から逃げよう」など考えたりしています。

この大地震は私にとっては、生涯忘れることの出来ない体験と思います。今後の人生の中でこの体験をかみしめながら、生きるよろこびを感謝し、まわりの人達に笑顔で接したいと念願しています。

「今、思うこと」

家政旧１回生　西　肥　知　子　記
（西宮市甲子園口北町；自宅）

１月17日、大地震があった。口では説明できない、何かすごい事が起こった。私は夢の中の出来事かと思っていたが、母の私を呼ぶ声で目を覚ました。その時は頭の中に地震だという感覚はなく、揺さぶられている自分に気付き、激しい揺れに耐え、揺れがおさまるのを待っていた。

時間が経ち、日が昇るにつれ、被害の大きさが分かってきた。私の家の近くにも、家が倒壊し生埋めになっている人々がいたり、道路は盛り上がり、ガス漏れが発生していた。そんな多くの被害の中でも最も驚いたのが、家から徒歩３分ほどの所にあるＪＲ甲子園口の駅前ビルがいとも簡単に倒れていたことだ。そこからは黒い煙がモクモクと立っていたが、消防車が１台出動していたにも拘わらず、断水の為消火活動は行われていなかったし、生埋めになっている人の救出作業も全く行われていなかった。というより、消防の方だけの力では、どうする事も出来なかったのだ。今思うと地震が起こった当初、駅前で見た消防車以外、救急車もパトカーも見ていない。

家族、近所の人々の無事が分かり、ほっと息を尽く暇もなく、次に親類、友人の安否が気になった。しかし電話は通じず、公園の公衆電話に並ぶことになった。それでも神戸方面への電話は不通、やっと通じた東大阪の親類は何かあったのと驚いている様子だった。私はその時、大阪では昨日と変わりない生活を送っている事を知り驚いた。いったいどうなっているのだろう。その頃は情報もほとんど入ってこず、本当に不安で不安で仕方なかった。

誰もがこのような体験が初めてであったが、混乱することなく行動していたと報道されていたが、決してそうではなかったように思う。体験した人にしか分からないと思うが、今回の出来事は混乱する、しないといった以前の問題である。目が覚めると何もかもが変わっていたのだから。言葉も無く呆然として

いた。自然の力でなった事に怒るわけにもいかず、今一番何をすればいいのか、これからどうすればいいのか、誰かが教えてくれるわけでもない。ただこれからも生活しなくてはならないという事を目の前に人間の無力さを感じた。

私の家は倒壊はしなかったものの、大変な事になっていた。棚が倒れ、和箪笥は上下に分かれ倒れるというより、転がっていたし動くはずのないピアノや冷蔵庫が動き、あらゆる電化製品は思いもしない所に飛んでいた。家の壁にも亀裂が生じ、落ちている箇所もある。ドアや窓の開閉具合を見ると、家が傾いているのがよく分かる。かといって、私達が住む場所は今住んでいるこの家しかなく、何もかもがメチャクチャになってしまった物を片付けなければなかった。それから何日もかかって片付けをしたが、今思うと、どのように毎日を暮らしていたのかよく思い出せない。長く、また短い１日だった。

何日かたち少し落ち着いてきた頃、大学はどうなっているのだろうと思った。ＴＶを見ていても被害をうけたとも言っていないし大丈夫だろうと思っていたが、今後の事も知りたかったため連絡をとったところ、とりあえず１週間ほど休校ということだった。私がその時大学に対して、何て対応の遅い大学なんだと思った。というのも知人が通っている大学などでは、すでに後期試験をレポートで代用すると決定していたり、試験の中止など大学からの情報が入っていた。私が最も感心したのはKiss F.M. 神戸というF.M.を通じて多くの大学が受験生、在学生に情報を伝え続けていた事だ。私も、もしかしたら神戸女子大も…と思い聞いていたが期待は裏切られた。

今後、私が大学に望むことは、適切な情報をより速く伝えていただきたい。その手段として、混雑する電話を避け、郵便を中心にし、新聞やF.M.を利用して欲しい。今回は、後期試験前ということで、試験の事が非常に気にかかる。神戸女子大学では４月に試験を行うように私は受けとめましたが、この時期にその必要性はあるのでしょうか。日頃、あれほど出席を厳しく取り締まっているのだから、今回のような災害に見舞われた場合、出席点＋α、レポート提出などの試験の代用にするのは無理な事なのでしょうか。地震後、急に２ヶ月以

上の休学期間を与えられ、あれから１ヶ月以上がたち、充分な時間がある今、私はこの時間にレポートを書き、試験を終了させておき、４月からは新たな気分で大学生活をスタートさせたかったというのが率直な意見だ。

今、私が書いてきた事柄は、私にとっては重大な事柄であるが、視野を広げてみると、もっと重大な事柄がある。これから私達はいったい何をしなければならないのだろう。私に出来る事はいったい何か、という問題がある。今、ここで答えを出す事は難しいが、今回の体験を無駄にせず役立てて欲しい。私は今、被災したという感覚でなく、良い経験ではないが、経験して多くの事を学び、感じ、この震災も私の人生のうちで経験すべき事だったのだと思っている。今回体験して思った事 ― 自然の力の恐さ、命の尊さ、人間１人では何も出来ない、救けあいの必要さ ― 人間は人間らしく生きてこそ人間だということだ。

最後に私が19年間慣れ親しんできた神戸が１日も早く復興することを願っている。

「大地震を体験して思うこと」

家政旧１回生　高　木　裕　子　記
（中央区花隈町；下宿）

阪神大震災からもう１ヶ月半が過ぎましたが、私はまだあの日のことを忘れることができません。私は成人式出席のため、実家である熊本の方へ帰省していて、１月16日の夜、神戸に戻ってきました。そして、明日から学校という時でした。私は深い睡眠の中にいて、突然の激しい縦揺れ、横揺れに、部屋の家具である本棚が、ちょうど私の寝ている上に倒れてきたのです。まだ揺れは続いていましたが、私は必死で本棚の下から脱出しました。幸いにもすり傷程度ですみました。何が起こったか把握するまで、時間が少しかかりました。下宿先のマンションでは知り合いもいないので１人で不安でしたが、その日のうちにまた熊本の方に帰ったので、その後のことはよくわかりません。

私はあの地震で疑問に思ったことが１つありました。それは、よく地震が起きたらトイレなどに逃げなさい、と言うけれども、今回の地震では家が全壊した人などがいて、そういう時もトイレとかは安全なのだろうか、ということです。高速道路も地震を考えてつくってあるので安心だ、と言われていたのに、あんな風にも崩れ落ちてしまった。どれだけ社会が、もしくは技術が発展しても、自然の力にはかなわないのだということをつくづく感じました。これから先も、いろいろな建築物が建てられますます住みやすい社会になるでしょうが、いつ起こるかわからない災害にいつでも対応できるように、人々は考えて生きてゆかねばと思います。

私は今でも、ちょっとした電車の震動や、大型車が通ったあとの揺れにびくびくしています。

神戸から大阪空港へ向かう途中、さまざまな光景を目にしました。倒壊した、またはしかけた建物、道路の亀裂、火災、何台もの救急車、そして大渋滞。もう生涯経験できないかもしれない。もう二度と起こってほしくないけど、私た

ちは大地に足を踏みいれて生きている以上、天災からのがれることはできないのでしょう。

「震災を体験して」

家政旧１回生　大　竹　由利子　記
（須磨区須磨寺町；下宿）

私は神戸に憧れて、神戸女子大に進学しました。美しい街並が大好きでした。新しい建て物に囲まれている神戸は本当に素敵でおしゃれな街だと思っていました。けれどもこの地震を通して、神戸の隠れていた背景を知ることができました。新しくハイセンスなビルディングの影には、せまい道路、そしてもろい住宅が存在していたのです。つまり、神戸は新しい部分と古く手のつけられていない部分が共存している街だったのです。

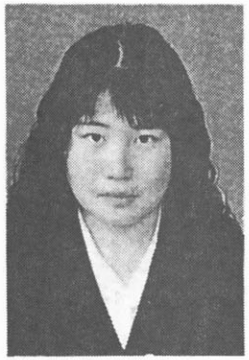
阪神大震災では、この古い部分に犠牲者が集中しました。テレビを観ていて、犠牲者に学生が多いのがとても気になりました。結局は経済的に弱い立場の人間が大勢亡くなっています。同じ学生として、とても悲しいし、とてもくやしいです。

市民全員の安全を確立してこそ、本当の意味での都会的で、誇れる街になれると思います。孤立した都市の中で、見ず知らずの他人同士が助け合うことは、すばらしいことだと思います。そして、互いにはげましあい、がんばり続けている姿には、日本中、胸を打たれるものがあると思います。

今、このように注目されている中で、神戸は確実に復興にむかって前進していると思います。今、さかんに言われている、地震に強い神戸をつくるためにも、神戸に住む１人として、地域に協力して行きたいと思っています。

HIGASHI IZUMO 広報 ひがしいずも
3
1995. 3. 1
MAR.VOL.452

阪神大震災を体験して



石倉真知子さん
（中意東・須磨区で被災）
栄養旧２回生：
…島根県出身…

一月十七日の早朝、突然の激しい揺れと食器の割れる大きな音で目がさめました。地震だと気付きましたが、あまりの揺れにふとんの中でうずくまるしかありませんでした。

私の住んでいたアパートは倒壊は免れましたが、外へ出てみると周りのほとんどの家が倒壊していました。崩れた建物からはい出てきた人たちは、薄暗い中、ぼう然と立ちすくんでいました。間もなく、建物の下敷きになった人々の救出が始まりました。隣の家のおばあさんが助け出されましたが、私たちの目の前で息を引きとられました。

区役所に行くと、たくさんの人が避難していました。昼になっても火災の煙で夕方のようでした。水も食料も、何の情報もないまま夜を迎えました。長田区の大火災で夜空がまっ赤になっていて、とても不安でした。

私は神戸の人に「神戸は地震のないところ」と聞いていました。地震に対する備えが不十分だったことが、被害をさらに大きくしたのだと思います。大震災の恐ろしさと、いざというときの備えの大切さを痛感しました。

（５） ボランティア活動

「ボランティアを体験して」

教育旧２回生　高　見　　彩　記
（長田区林山町；自宅）

警報ベルの音というものがこれほど人を動揺させるものとは、私は今まで知りませんでした。たんすが倒れても、机から本が降っても、どうにかしたらそれは夢で終わらせられるような気がしました。でも確かに何かが起こったと警報ベルは叫んでいました。外を見ると夜明け前の空がほんのりと明るんでいました。地震が起こると火事になると知らなかった私は、早い夜明けだと思っていました。しかし本当の夜明けはなかなか来ず、８時になっても９時になっても火事の煙でくすぶる空は暗く、灰がひらり、ひらりと気味悪い雪のようでした。道は車だらけで誰もが荷物をつめるだけつんでの大移動でした。20分程度で着く道のりを４時間かけて進みました。目の前で家がぺしゃんこになっていました。２階建てはほとんど１階部分がつぶれて、みんな平屋になっていました。つぶれた家の前で難しい顔をするでもなく、悲しい顔をするのでもなく、無表情で座りこんでいる人が大勢いました。誰も話をしなくて、騒音だけがやたらとするのです。騒音は、多分、車のエンジン音、パトカー、救急車、消防車のサイレン、それと無言のざわめきが混じった音だったのではないかと思います。火事の通りをぬける時、顔が熱くて、初めて事の重大さに気付きました。たくさんの人が死んだろうと思いましたが、それも十人単位だろうと考えていました。激しく車を上下させながら、ノーヘルの原付き、単車をよけながらの走行でした。地震後１ヶ月は“何でもあり”であり、秩序が全くありませんでした。

家にやっとのことでたどり着き、水もでない、ガスもでないことに気付きました。現実に迫りつつある“我が身”への危機に初めてぞっとしました。失ってその大切さがわかるものの中でも、いのちの源である水は本当に生活に不可欠です。数え切れない程毎日水を使っていたことを、毎日の重い重いポリタン

ク運びが教えてくれました。給水しに来てくださる方々のひげが日に日に伸びてゆき、遠方から来ている彼らはもっと大変なのだ、と気付きました。水には苦労しましたが、水やガスが無くとも、人とのつながりさえあれば生きてゆけるものです。その人も同じ神戸でしかも三宮に住んでいる人であるのに、山の湧水やら野菜やらをせっせと運んできてくれたのには、感謝で言葉がでませんでした。その水がペットボトル１本でも、野菜がほんの少しでも、それは量の問題ではなく、自分にはこうしていざという時に助けてくれる人がいるのだという安心感を起こさせるのです。それは何にも替え難いものなのです。

ボランティアとして初めて行ったのは、村野工業高校でした。そこの方々は村工の建物自体の破損のため、すぐに２つの施設に分かれて移動しなくてはなりませんでした。みんな疲れて、いつも眠そうでした。ぎゅうぎゅうに詰まった人々の間には、いさかいが絶えませんでした。彼らに何を言っても返ってくる返事は少なくて、重く、暗くて、何かの拍子に笑ったとしても、その笑いはすぐに沈んでいきました。荷物をまとめ終え、それぞれの移転先へ、意外にさっさとみんな散ってゆきました。しかし荷物をひとりでは持ち切れないお年よりもいて、私はそのうちのひとりのおばあちゃんの２つのカバンのうちのひとつを持ちました。たったふたつで、これだけが全財産なんだけれど、持って歩くには、おばあちゃんにとって重すぎるのです。もうひとつのカバンは、私ではなく誰かが持つべきものなのです。そんな人が、たくさんたくさん、神戸には居るのです。須磨区役所でも、義援金をもらうために来られた方々に請求書の書き方を教えるなどの仕事をしていました。これらの方々は、リュックを背負い、マスクをして１～10までの窓口を辛抱強く渡り歩き、いわゆる“一日仕事”を終えてやっとり災証明をもらい、それと共に義援金を請求することができるのです。中には疎開先の他県から来たにもかかわらず、必要な書類が足りなくて、ダメだと言われている人もありました。とても怒って反論していましたが、やがてまたはるばると帰って行きました。「私は字が書けないから、お願いします。」と言う方も大勢いました。目が見えない、年をとって手が震え

てしまう、日本語があまりわからない・・・。私は頼まれる度に、精いっぱいきれいな字で書きました。それが私にできる全てでした。その方々にしてあげられることはほんの少ししかありません。私の援助が果たしてどれ程の効果をもたらしたか、などと考えても、それはゼロでしかありません。神戸の人は、何でもちゃんと自分でできます。お年寄りには難しいんじゃないかと思うような書類だって、たよりなげな足どりででも区役所まで出向き、一日かけてり災証明を発行してもらい、人にききながらでもきちんと書きあげて義援金をもらっています。行動しているのは、いつも家族を、家を失った人々であり、私達ができることはほんの少しです。しかしこれがほんの少しだからといって何もしないのは、恥ずべきことです。何もできないことを自覚しながら援助するのは、たまらなく空しいことですが、できることなら助けたい、何かをしてあげたいと思う気持ちは消えません。 ― 絶対に神戸を見すてんとこうな！　神戸っ子は何でもできるで！ ― 今、くじけようとしている人への私からのエールです。

「ボランティアに参加して」

英文旧２回生　増　田　　歩　記
（須磨区北落合；自宅）

私は地震の後、１週間位家に居て暇を持て余していた時に近所の人から聞いてボランティアのことを知り、友達と２人で２月中旬まで神戸市立外国語大学に行きました。私達が行った時には、もうすでに多くの人が参加していて、それからも毎日約七百人の人が来ました。その中には主婦や学生、会社員や外国人の方などいろいろな人が含まれていました。

神戸外大では、遠くは九州や東北地方など各地から送られて来た救援物資を、須磨区、長田区、兵庫区の避難所へ送るための仕分けと運搬をしていました。私は仕分けと運搬の両方ともしたのですが、仕分けは考えていたよりも大変でした。送られてきた救援物資を一つ一つ丁寧に開封し、新品の服、古着、家庭用品、文房具、食料品というように分け、そして古着の中でも男性用、女性用、子供用、そしてまたそれぞれ、大きい物と小さい物というふうに細かく分けていかなければなりませんでした。荷物は次々と運ばれて来て仕分け場の端に山のように積まれていました。

荷物の中にはさまざまな種類の物が入っていました。綺麗な便箋に手紙を書いて送って下さった方もいれば、使い差しのポケットティッシュや底が真っ黒に焦げた古い鍋、クリーニングに出していないシミのついた服等、私たちがもらっても嬉しくない物まで送られていました。食料品でも賞味期限が３年以上前の缶詰や、郵送料が無料なのをいいことに家中のいらないものを整理するために送って来たかのような人もいました。私はこれを見て、自分が救援物資を送ることになった場合、何をどのようにして送ればいいかを理解し、それを受け取る人が喜んでくれるか、という事が一番大事だとわかりました。

他にも自分が実際にボランティア活動を体験していろいろな面で勉強になりました。体力的にはきつかったけど人間の心の暖かさを感じ、協力することの

大切さがわかりました。日本も、アメリカのようにボランティアがもっと重要視され、学生達が進んで活動に参加してくれるようになることを私は望んでいます。また私自身も機会が有れば積極的に参加しようと思っています。そして今回のボランティア活動で得た知識をこれからの自分の人生に役立てたいと思います。

「ボランティアを経験して」

国文旧２回生　樽　井　美　帆　記
（宝塚市中山五月台；自宅）

私は、宝塚市役所でボランティア活動を行いました。二月に入ってはじめて市役所に行ったのですが、市役所を埋めつくすほど、そして高々と積み上げられた莫大な量の救援物資のダンボール箱と学生や主婦、遠方から泊まりがけで来られているボランティアの人数の多さにまず驚きました。宝塚市役所では、ボランティアは午前九時に集合して集会を開いてその日一日の仕事のグループ分けをします。グループは、今ではよく目にする家の屋根を覆っている青いビニールシートの貸し出し、仮設風呂のお世話、炊き出し、救援物資の仕分け、小学校を巡回して子供達の遊び相手になる等です。この集会では、ボランティアの人達は率先して手を挙げてグループに分かれます。私は、市役所に設けられている仮設風呂のお世話と救援物資の仕分けを経験しました。

救援物資の仕分けでは、次々に送られてくるダンボール箱を一箱ずつ全て開封し中味が何であるか確認し、下着、防寒具、上着、ズボン、スカート、日用雑貨等に細かく仕分けします。一つのダンボール箱に色々な物がぎっしりと詰まっているものがあったり、足の踏み場もないところでの作業で大変でした。避難所ごとに分けて運ぶため下着をサイズごとに枚数を決め、詰め直したりもしました。救援物資には、会社や市町村等のグループ単位で送られてきているものもあれば、個人的に送られてきているものもありました。作業中、古着の中に手編みの子供服があったり、つめ切りや耳かきや使い捨てカイロが添えられているという細やかな心遣いがあったり、「頑張って下さい。」という内容の手紙が入っていたりして何度も感動しました。下着や古着、日用雑貨は腐ることはありませんが、果物が送られてきても長時間、日の当たる所に置かれていたりするので本当に被災者の人達に無事に届くのか、このたくさんの古着は避難所に届いて着てもらえるのかと不安に思うこともありました。

仮設風呂のお世話の方は、遠方から泊まりがけで来られているボランティアの方がリーダーとなってみんなをまとめていたので、はじめて出会うボランティア同志でも連帯感があり、とてもスムーズに仕事をすることができました。仕事内容は、受付け又は、十数基ある風呂に一基に一人担当者がつき、入浴に来られた人を案内し、使用方法を説明し、入られた後湯舟のゴミをとり洗い場と脱衣所のそうじをして石けんとシャンプーの補充をし、お湯の入れかえをする等です。入浴は脱衣も含め一人十五分とゆっくり入浴するにはほど遠い時間に決められています。風呂は、一人入ったらいっぱいという程度の大きさでした。終了三分前と終了時間になったらノックをするというのが一応決まりでしたが、よほど長く入っている人以外それを実行するボランティアは少なかったようです。私もほとんどすることはありませんでした。お風呂に入れるとうれしそうな顔で来られる人達をせかすようなことはでないという考えはみんな同じだったのでしょう。入りに来られた人達も入られる前に一言かけておくと時間通りに出てこられました。小さな子供がサッパリした顔で頬を真っ赤にして出てきた姿はとても印象的でした。そういう姿を見ると少しでも気持ち良く入ってもらってあったまってもらおうと一生懸命そうじしました。お風呂には、追い炊き装置がなくフタがなかったので冷めるのがはやく、多くの人が次々に入られるのでお湯がすぐ汚れてしまうので気の毒でした。

ボランティアを経験して、みんなが本当に責任をもって心を込めて仕事に取り組む姿に感動し、人間が持っている本当のやさしさを見たような気がします。

「ボランティアの体験を通して感じること」

国文A旧3回生　木　檜　綾　子　記
（姫路市白浜町；自宅）

3月31日、須磨ボランティアの活動は全て終了した。私が参加したのは、1ヵ月という短い期間だったが、この貴重な体験は、私の人生の中で重要な位置を占めることになるだろう。

須磨ボランティアという、須磨区内で活動してきたグループに私が参加したのは、3月に入ってからだった。その頃には須磨はだいたい落ち着いているように見えた。

そもそも須磨は、震災直後から他地区に比べてボランティアの数が少なかった。自治会がしっかりしている所も多かったので、被災者の人々は、自らの力で立ち上がり、必死に避難生活をこなしてきたのである。

そのことが、各地のボランティアが撤退して被災者や避難所の自活が問題としてとりあげられる今となっては、ボランティアから地元への引き継ぎがスムーズに行くという結果を生んだのであろう。

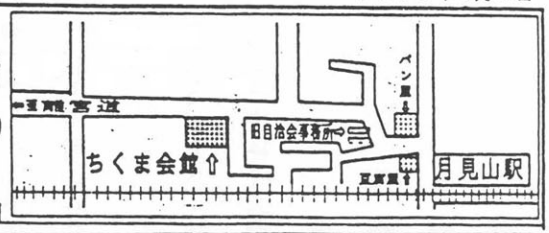
しかし、かといって須磨の全ての避難所が自活できているというわけではない。避難所をまわっていて意外だったのは、各避難所ごとに大きな差があるということである。自治がしっかりしていてボランティアの手を必要としない所もあれば、全員がご老人で自活のめどが全く立たないという避難所もあった。

これからのボランティアの活動の1つとして必要なことは、避難所同士のネットワーク作りである。自治の行き届いた避難所のノウハウを得ることで、他の避難所も自活への道をよりスムーズに進むことができるであろう。

また、被災者の要望が変わってきている今、ボランティアの活動も変化の時を迎えている。そんな中でボランティアの長期化を実現するためには、行政や各団体のバックアップの必要性が、これから切実な問題となってくるであろう。

西須磨東部
自治会だより 6

発行 西須磨東部
自治会仮事務所
離宮前町一丁目1－29
☎733-3718
ちくま会館内



お疲れさまでした
学生ボランティアの皆様
ありがとうございました

2月11日以来、学生ボランティアの皆さんが、毎日五～八名、自治会内の各所に散らばって奮闘してくれていました。毎日幾人か顔ぶれが変わっていましたが、心強い味方ができたとお感じの方が多かったと思います。

その若い人々のうち、神奈川大学（略称神大（じんだい））生を中心とする皆さんは、すべて21日の活動を最後に引き揚げてゆきました。町で若い力を存分に発揮して、住民に希望を与えてくれた学生諸君に心からお礼の言葉を捧げ、その前途に幸あれと祈るばかりです。

以上は首都圏方面からのボランティアですが、自治会地域で学生生活を送っていた溝渕 真弓（神戸女子大）さんの活躍も特筆されます。

震災後、他の学生たちが全て引き上げる中で当日からこの地を動かず、故郷の土佐清水市に帰省したのは3月に入ってからでした。その間、自治会で働いてくださっていましたから、顔なじみになった方も多いでしょう。男ばかりの事務所の中で、一輪の花として潤いを与えてくれたばかりでなく、神大生ボランティアの皆さんの心を地域に溶け込ませるのに大きな役割を果していただきました。

国文旧4回生：
須磨区で被災

登学路のクリーン・アップ活動

保健体育講師　重　福　京　子　記
体育実技助手　下　村　尚　美　記

阪神淡路大震災による被災建造物の解体処理作業が一月末頃から本格化し、その頃から、廃材や瓦礫、フスマやタタミ等を山と積んだ大型トラックが、列をなして、猛スピードで走るようになってきました。

処理場が「布施畑」（西区の北の方）にある関係上、大学の下を通る道路は、２月と３月のピーク時には朝から夕方おそくまで、これらのトラックの専用道路と化してしまいました。家政学部のＨｏ教授（北区在住）は毎朝８時半には来学されますので、Ｉ教授が理由をお尋ねしたところ、「無法トラックのラッシュに出会うとおっかなくてね」との返事だったとか。それはとも角として、問題はこれらのトラックの荷台からの落下物が歩道にまで降ってくる様な事態がつづき、安全な筈の歩道を用心しながら端の方を歩くようになりました。

この様な異常な光景を目撃した私達は、入学試験や卒業式も間近い時期でもあるので、何とかして大学周辺の歩道だけでも掃除したいと考え、施設課長や学生部長とも相談の上、ゴミ収拾のボランティアの呼びかけを事務所に掲示しました。

この呼びかけにこたえて、以下の様な活動が実施されました。

第一回目：２月21日（火）10～12時

大学側のバス停２カ所と病院側のバス停１カ所の計３カ所周辺歩道上のゴミを収拾。参加者は事務職員４名と私達２名。

第二回目：２月28日（火）10～12時

前回と同じ場所を私達２名で。

第三回目：３月３日（金）９時半～15時

入試の前日であり、家政学部のＩ教授の呼びかけと陣頭指揮で、

午前は家政学部の助手数名が、午後にはＩ研の院生２名とゼミ生２名の他にＫ研のゼミ生２名も応援にかけつけてくれました。

Ｉ教授は無謀にも、竹箒を持って車道に降り立ち、赤い交通標識のコーンと交通遮断棒とを使って、一車線ずつトラックの走行を規制し、車道のゴミを竹箒で歩道サイドと中央分離帯サイドへ丁寧に掃き集める作業を強行。一方、助手達は集められたゴミを歩道や中央分離帯の上から、ビニール袋にいれる作業を担当。これは若い人達が交通事故に巻き込まれないようにとのＩ教授の配慮であった由。この間、施設課の２名の方の応援で、集まったゴミを軽四輪車で運搬、荷台に２杯半もありました。

この掃除の範囲は上り車道と下り車道の他、中央分離帯および歩道に及び、上の方（北）はタクシーの大学内への進入路の少し北から、下の方（南）は病院下の横断路の少し下までにもおよびました。

掃除がすんでから、「こわかったなあ、ダンプが」、「下りの空ダンプの運転手さんが、オッサン、その棒ぎれを後の荷台にほりこみな、と言ってくれたのがうれしかった」とのＩ教授の言葉が印象的でした。

第四回目：３月13日（月）11～12時

卒業式前の化粧の意味で、式の準備後に、バス停周辺を中心に清掃。参加者は事務職員４名とＵ先生と重福の計６名。

以上の様にたった４回のボランティアではあったが、通りがかりの方々から「ありがとう」、「ごくろうさん」と声をかけて頂いたり、学内見学者の方が手伝ってくださったりという実に心あたたまる体験をさせて頂いたことを感謝しながら報告をおわりたいと思います。

追記：４月に入ってからは、トラックの荷台には覆いをするように取り締ま

りが強化され、さらに市の清掃車が活躍を再開したこともあって、車道もかなり美しくなってきました。

Ⅷ. 教職員および学生の被災者リスト

阪神・淡路大震災による被災教職員名簿

平成７年３月30日調べ

本　部

所　　属	職　名	氏　　名	被害状況	備　　考
法　人　本　部	本部長	行吉誠之	半　壊	
法人本部財務部	部　長	林　　敏彦	全　壊	
法人本部総務部総務課	課　長	中谷時雄	全　壊	
法人本部入試広報課	課　長	山中賢一	半　壊	
法人本部入試広報課	課　員	山本尚実	全　壊	単身

大学関係

阪神・淡路大震災による被災教職員名簿（1995/5/9現在）

所属	職名	氏名	被害状況	備考
文学部 教育	教授	新谷琇紀	全壊	
〃 〃	〃	上月節子	全壊	
〃 国文	〃	伊藤正義	全壊	
〃 英文	助教授	八日市屋多栄子	全壊	
〃 国文	〃	藤平泉	全壊	単身
〃 英文	教授	松原恭子	全壊	
家政学部 家政	講師	中西正恵	全壊	単身
〃 管理	助教授	渡邊正雄	全壊	
〃	助手	鷹合美千代	全壊	単身
文学部	助手	村田恵子	全壊	単身
就職課	課長	藤原敞之	全壊	給与負担銀行
文学部 教育	教授	外園一人	半壊	
〃 〃	〃	和田嘉子	半壊	
〃 〃	助教授	佐藤仁	半壊	
〃 英文	〃	林芳子	半壊	
家政学部 家政	〃	市川篤子	半壊	
〃 管理	教授	金谷昭子	半壊	
〃 〃	助教授	田中紀子	半壊	単身
〃	助手	田中智子	半壊	
〃	〃	稲田美穂	半壊	単身
〃	〃	安西弘子	半壊	単身
文学部	〃	東紀美子	半壊	
教務課	課長	早崎貢	半壊	
〃	事務	柏木純子	半壊	
庶務第一課	〃	大草一美	半壊	
庶務第二課	〃	藤原三紀子	半壊	
施設課	職員	中岡利江	半壊	
図書館	〃	内藤信子	半壊	
〃	〃	山崎由紀子	半壊	単身
		計	29 人	

学　生（自己申告による資料…３月末現在）

被災状況一覧表『自宅』

自宅全壊（全焼）・半壊（半焼）No.1			
学年学科ｸﾗｽ	担任・ｾﾞﾐ指導	被災学生名	備　考
1・英・B25	海老	西原　明子	半壊　修復?
1・英・A22	清水	大久保英美	「要注意」の貼り紙あり
1・史・A22	田中（久）	柏木　恵美	半壊
1・史・A58	田中（久）	武田　典子	全焼
1・史・B 1	藤井	中島　千明	全壊
1・史・B13	藤井	長谷川容子	半壊
1・史・B33	藤井（利）	前田　明子	半壊
1・史・B53	藤井（利）	森田あゆみ	調査中
1・教・A37	白嵜	上野　裕子	半壊
1・教・B44	木村・重福	末延美佐子	半壊　修復?
1・教・C43	松浦	森　　祥子	半壊
1・教・C54	松浦	福田　美香	半壊
1・教・C59	松浦	藤本　真恵	半壊
1・教・D16	三室・図子	松田　純子	半壊
1・家・A 9	平田	市野　智子	半壊
1・家・A35	平田	西肥　知子	半壊
1・家・A37	平田	佐藤　由佳	全壊
1・家・B34	市川	溝上ゆかり	半壊
1・管・A 3	瀬口	池田　恵子	全壊
1・管・A 8	瀬口	岩浅　紀子	全壊
1・管・A35	瀬口	権田　利恵	全壊

被災状況一覧表『自宅』

自宅全壊（全焼）・半壊（半焼）No.2			
学年学科ｸﾗｽ	担任・ｾﾞﾐ指導	被災学生名	備　　考
2・国・A17	小久保	上原　朋子	半壊
2・国・B18	信太	並木貴美子	全壊
2・英・A 3	川田・花戸	網城　小巻	全壊
2・英・A40	川田	菊地　薫	半壊
2・英・A52	川田	小林　優子	半壊
2・英・A61	川田	新冨　真深	全壊
2・英・B49	湯谷	森原英美子	半壊
2・史・A60	今井	重光　一華	全壊
2・教・A 4	外園	足立　智香	全焼
2・教・B53	榎田	多田　美佐	全壊
2・教・D 2	宮村	古村　綾子	全壊
2・家・A46	徳久	坂口　三恵	全焼
2・管・B36	角谷	古川佐知子	半壊
2・管・B50	角谷	横山　美和	半壊

被災状況一覧表『自宅』

自宅全壊（全焼）・半壊（半焼）No.3			
学年学科ｸﾗｽ	担任・ｾﾞﾐ指導	被災学生名	備　　考
3・国・A10	岡田	安茂　郊美	全壊
3・国・A35	岡田・藤平	香川　真美	全壊
3・国・A71	岡田・柏谷	高橋富美子	半壊
3・国・B 7	榎坂・藤平	谷本　尚美	半壊
3・国・B 7	榎坂・伊藤	堀田　百恵	全壊
3・英・A67	植木	十亀レイ子	半壊
3・英・A73	植木・八田	田崎　朝加	全壊
3・英・B15	那須・花戸	中川由美子	半壊
3・英・B24	那須・伊藤	平野　紀子	半壊
3・英・B64	那須・伊藤	吉岡　由美	半壊
3・史・A45	石田・田中	坂上まゆみ	半壊
3・史・B50	間壁・知名	山田　るみ	半壊（建て直しが必要）
3・教・B 2	川崎	切原　明子	全壊
3・教・B 8	川崎	黒龍　佳子	半壊
3・教・B31	佐藤・稲浦	佐久川亜希	半壊? 修復?
3・教・C27	都築・吉本	中尾　伸子	半壊
3・教・C29	都築・榎田	中澤由紀子	半壊
3・管・B14	橋本・本間	長野　泉	全壊
3・管・B20	橋本・本間	濱田　睦	全壊
3・管・B54	橋本・早川	横田ひろみ	全壊

被災状況一覧表『自宅』

自宅全壊（全焼）・半壊（半焼）No.4			
学年学科ｸﾗｽ	担任・ｾﾐ指導	被災学生名	備　　考
4・国・B54	北山・小久保	渡辺　彰子	半壊
4・英・A 2	岡本・木下	青西　敦子	全壊
4・英・A 3	岡本・木下	赤穂　恭子	半壊
4・英・B21	八日市屋	並木由美子	全壊
4・英・B24	八日市屋	二宮須美枝	全壊
4・英・B35	伊藤	原口　美香	全壊
4・英・B59	伊藤	山内佐知子	半壊
4・史・A20	小林・石田	蔭山　紀子	半壊?
4・史・A38	小林・今井	坂西　弘子	全壊
4・史・B 3	小林・秋山	池尾　雅代	半壊
4・史・B48	中村・秋山	森崎菜穂子	倒壊していないが修復不可能
4・教・B64	中山・久松	飯尾奈津子	全壊
4・家・B 2	松本・平田	谷　　恵子	半壊?(修復可能)
4・家・B38	松本・山岡	三好　理恵	全壊
4・栄・A46	林　・松本	山口　敦子	半壊? 修復?
4・管・B 1	田中	坂口　朋子	全壊
院・1・栄養	井上	野村　雅美	半壊
院・3・栄養	小原	田淵りつこ	半壊　避難先（中央区神仙通・知人宅）

被災状況一覧表『下宿』

下宿全壊（全焼）・半壊（半焼）No.1			
学年学科ｸﾗｽ	担任・ｾﾐ指導	被災学生名	備　　考
1・国・A 6	柏谷	安西智恵子	半壊　修復不可能
1・国・A15	柏谷	芋畑　和代	半壊　修復?
1・国・A46	河田（千）	後藤　宙美	半壊　修復?
1・国・B 3	藤平	塚本さやか	半壊
1・国・B20	藤平	西本まさみ	全壊
1・英・A12	清水	市原　智佐	半壊
1・英・B24	花戸	野川みゆ樹	半壊
1・英・B79	花戸	米阪　一恵	半壊
1・史・A47	田中（久）	島田　貴子	半壊
1・史・B 6	藤井（利）	永野　　愛	半壊?
1・史・B20	藤井（利）	原　　忍	半壊
1・史・B26	藤井（利）	廣吉　泰子	半壊
1・史・B54	藤井（利）	紋田　美樹	半壊　修復?
1・教・A33	白嵜	岩本　美保	半壊　修復?
1・教・A41	白嵜	宇原　美樹	半壊　修復（2ヶ月?）
1・教・B34	木村	澤　　陽子	全壊
1・教・C52	松浦	廣瀬　未帆	半壊
1・教・D 8	図子	前田　真里	判定（要注意）
1・教・D32	図子	六車　幸恵	半壊　修復?
1・教・D59	図子・三室	吉村　雅子	半壊
1・教・D60	図子・三室	米田　紋子	半壊
1・家・A 5	平田	天野　優子	半壊
1・家・B 9	市川	原田　敦子	半壊
1・家・B11	市川	原田　雅子	半壊　修復?
1・栄・ 21	宮田	重成由希子	全壊　修復?
1・管・A18	瀬口	加藤　友美	半壊　修復?

被災状況一覧表『下宿』

下宿全壊（全焼）・半壊（半焼）No.2			
学年学科ｸﾗｽ	担任・ｾﾐ指導	被災学生名	備　　考
2・国・A 5	小久保	飯倉ひろ美	半壊
2・国・A13	小久保	板坂　陽子	半壊
2・国・A20	小久保	大沢　　愛	半壊　修復?
2・国・A22	小久保	大野　智美	半壊
2・国・A39	小久保	佐々木理恵	半壊
2・国・A50	小久保	高谷あすか	全壊　修復?
2・国・B 2	信太	次田　佳代	全壊
2・国・B19	信太	新田　尚美	半壊　修復半年
2・国・B20	信太	西澤　清子	大家半壊の為継続不可能
2・国・B22	信太	野田　朋子	半壊　修復?
2・国・B36	信太	藤原　敦子	全壊
2・国・B43	信太	眞鍋　雪美	半壊　修復?
2・英・A20	川田	永沢　友紀	半壊
2・英・A43	川田	木下　友紀	半壊
2・英・A50	川田・林	小阪　陽子	半壊
2・史・A15	今井	今村　明子	半壊
2・史・A50	今井	今西　　幸	全壊
2・史・B54	知名	山田　早苗	半壊
2・教・A44	外園	岡本　陽子	半壊　修復?
2・教・A56	外園	金谷　真紀	半壊
2・教・B27	榎田	重岡　民子	半壊　修復?
2・教・B52	榎田	竹谷　真美	半壊
2・教・C 2	中島	辻　美千子	半壊　修復?
2・教・C45	中島	平井　幸枝	半壊　取壊し決定
2・教・C61	中島	古川　友香	半壊
2・教・D 9	宮村	増尾　智子	全壊

被災状況一覧表『下宿』

下宿全壊（全焼）・半壊（半焼）No.3			
学年学科ｸﾗｽ	担任・ｾﾐ指導	被災学生名	備　　考
2・教・D61	宮村	領家　静恵	半壊　解体
2・家・A 3	徳久	蘭　香衣子	全壊
2・家・A 6	徳久	井伊　澄恵	業者より立ち退き要請
2・家・B26	笠井	萩中　　玲	半壊　修復不可
2・家・B49	笠井	門司　浩子	半壊　修復?
2・家・B56	笠井	吉田　さと	半壊　修復不可
2・栄・ 27	尾井	田辺千恵子	半壊　取壊し決定
2・管・ 49	尾井	椋　恵美子	半壊?
2・管・B 8	角谷	竹田　尚代	半壊　修復?
2・管・B 9	角谷	立川恵美子	半壊
2・管・B10	角谷	田所　奈美	半壊

被災状況一覧表『下宿』

下宿全壊（全焼）・半壊（半焼）No.4			
学年学科ｸﾗｽ	担任・ｾﾞﾐ指導	被災学生名	備　　考
3・国・A19	岡田・北山	伊藤　久美	全壊
3・国・A20	岡田・藤平	稲田　千絵	半壊
3・国・A31	岡田	岡　由季子	半壊　修復?
3・国・A48	岡田・石原	義野久美子	取壊し決定
3・国・A57	岡田・小久保	小柳　千枝	危険?
3・国・B 3	榎坂・北山	龍川真由子	半壊　修復?
3・国・B19	榎坂	難波　敦子	半壊
3・英・A27	松原	大谷はづき	半壊　修復?
3・英・A36	松原	梶本美知代	全壊
3・英・B23	土田・那須	平井　芳枝	全壊
3・英・B30	土田	藤田佳代子	半壊
3・英・B49	土田・伊藤	森　亜津美	半壊
3・英・B55	土田・松原	山口　美広	全壊
3・史・A31	石田	倉橋　典子	立入り禁止（検査必要）
3・史・A52	石田・藤井	篠田ようこ	下宿先に家主が住む為出る
3・史・B19	間壁	平山　直美	全壊
3・史・B20	間壁	福岡　澄枝	取壊し決定
3・史・B30	間壁・秋山	桝田　裕世	半壊　修復?
3・史・B31	間壁・石田	松浦　真弥	全壊
3・教・A20	久松・外園	一井いずみ	全壊
3・教・A43	久松・糟谷	大垣　朋子	半壊の為家主に断られる
3・教・B10	川崎・久保	家守　里佳	半壊
3・教・B24	川崎・佐藤	斎藤　尚子	半壊　修復?
3・教・B35	佐藤・富本	佐藤美都里	被害あり（修復可能）
3・教・B65	川崎・佐藤	高木　理恵	半壊　取壊し決定
3・教・C26	都築・斉山	中井　桃子	半壊　取壊し決定

被災状況一覧表『下宿』

下宿全壊（全焼）・半壊（半焼）No.5			
学年学科ｸﾗｽ	担任・ｾﾐ指導	被災学生名	備　　考
3・教・C72	都築・中山	福田　実帆	半壊　修復?
3・教・D17	西井	本家　千春	半壊
3・教・D30	西井・糟谷	丸山佐智子	半壊? 修復見込みなし
3・教・D40	西井・高橋	宮本　由奈	半壊　修復?
3・教・D43	西井・赤井	村上　良子	半壊　取壊し決定
3・教・D52	西井・白寄	山口　静香	半壊　取壊し決定
3・教・D53	西井・松浦	山崎　有紀	半壊　取壊し決定
3・教・D57	西井・糟谷	山本　亜矢	全壊
3・教・D70	赤井	吉広　礼子	全壊
3・家・A 3	中西・笠井	麻生　恵子	半壊
3・家・A17	中西・音在	太田　章子	全壊
3・家・A30	中西・笠井	岸　真理子	半壊
3・家・A55	中西・高橋	岡本千加子	半壊
3・家・B 7	山岡・川上	敦賀　清香	半壊
3・家・B33	山岡・辻	朴木　　直	半壊?
3・家・B47	山岡・橋本	森本　晶子	全壊
3・家・B57	山岡	野上　敦子	半壊　修復?
3・管・A 9	金谷	池谷　美恵	半壊
3・管・A28	金谷・平川	奥村　弘美	半壊
3・管・A38	金谷・井上	久保　佳代	半壊　修復?
3・管・B52	橋本・林	山本　瑞子	半壊

被災状況一覧表『下宿』

下宿全壊（全焼）・半壊（半焼）No.6			
学年学科ｸﾗｽ	担任・ｾﾐ指導	被災学生名	備　　考
4・国・A21	石原・信太	奥川　敦子	半壊
4・国・B41	北山・柏谷	溝渕　真弓	半壊?
4・英・A50	岡本・清水	小谷　純子	半壊
4・英・B 2	八田幄・岡本	武田　祥子	半壊
4・英・B14	八田幄・谷崎	富田　桂子	半壊
4・英・B29	八田幄・谷崎	橋本　佳子	半壊（立入禁止）
4・英・B40	伊藤	福田　美恵	少々傾いている
4・英・B66	伊藤・那須	長野由紀子	半壊（修復不可能）
4・史・A11	河手・山本	上田　博子	半壊
4・史・A13	小林・間壁	永沢　叔子	半壊
4・史・A16	小林・間壁	大岡由記子	半壊
4・史・A17	小林・山本	大原さとみ	半壊（取壊し決定）
4・史・A37	小林・知名	酒井　優美	半壊（取壊し決定）
4・教・A35	本庄・富本	鵜飼　恭子	半壊（修復不可能）
4・教・A52	本庄・稲浦	岡部　俊子	全壊
4・教・A60	本庄・川崎	織金　千明	半壊
4・教・B54	中山・森口	新海美智代	全壊
4・教・B57	中山・白嵜	鈴木恵美子	水道ポンプ修復不可能の為住居不可能
4・教・C 9	久保・上月	武田　明子	全壊にちかい半壊
4・教・C10	久保・白嵜	竹田　敏子	半壊（立入禁止）
4・教・C12	久保・宮村	竹並　智津	半壊
4・教・D 6	上月・本庄	本多　美紀	半壊
4・教・D14	上月・榎田	松原由美子	修復不可能
4・教・D20	上月・須田	水田　涼子	半壊
4・教・D23	上月・西井	三谷　エミ	半壊
4・教・D38	上月・吉本	森本　真紀	半壊

被災状況一覧表『下宿』

下宿全壊（全焼）・半壊（半焼）No.7			
学年学科ｸﾗｽ	担任・ｾﾐ指導	被災学生名	備　　考
4・教・D52	上月・斉山	吉川　夏代	前のビルがかたむき使用禁止
4・家・A 8	辻　・市川	池田　敦子	下水道破裂の為使用不可能
4・家・A40	辻　・徳久	合田　愛美	半壊
4・家・A54	辻　・平田	石井　与子	全壊
4・家・B52	松本（博）	吉村　典子	半壊
4・家・B55	松本（博）	待鳥　隆子	全壊
4・栄・ 36	千葉	坂東　佳織	半壊
4・栄・ 36	林（利）	村上　典子	半壊
4・管・B 5	田中（紀）	多田真由美	全壊
院・2・日本史学	山本	名生　貴子	全壊
院・1・日本文学	柏谷	杉本　泰子	半壊

被災状況一覧表

死亡・重軽傷			
学年学科ｸﾗｽ	担任・ｾﾐ指導	被災学生名	死亡・重軽傷（本人との関係）
1・国・B67	藤平	渡邉友美子	死亡（本人）　下宿生　頭部強打
3・教・B28	川崎	坂田　美香	死亡（本人）　〃　下宿崩壊下敷き
1・国・A14	柏谷	井上　恵美	死亡（叔母）
2・教・D 2	宮村	古村　綾子	死亡（父）
3・管・B 3	橋本	樽栄　聡子	死亡（祖母）
4・史・A 9	小林	岩本美砂子	死亡（父）
4・家・A 4	辻	芦田美貴子	死亡（祖母）
1・教・C54	松浦	福田　美香	頭部裂傷（父）
1・教・C59	松浦	藤本　真恵	軽傷（父）
1・家・A35	平田	西肥　知子	負傷（父）　頭部負傷
1・家・B45	市川	山本有希子	軽傷（父）
2・国・B 9	信太	土井美加子	軽傷、足に怪我（母）
2・国・B38	信太	政岡　規代	２月までかかるケガ（本人・下宿先）
2・英・A64	川田	小田　靖子	負傷（兄）
2・家・B36	角谷	古川佐知子	頭を２針縫う（母）
3・国・A71	岡田	高橋富美子	重軽傷（母・祖母）
3・史・B32	間壁	松下えりな	軽傷（母）
3・教・C27	都築	中尾　伸子	頭を切る７～８針縫う（母）
3・栄・A27	井上	下城　　愛	右足骨折（兄）
3・管・B14	橋本	長野　　泉	重軽傷（母）

重軽傷			
学年学科ｸﾗｽ	担任・ｾﾞﾐ指導	被災学生名	死亡・重軽傷（本人との関係）
4・国・A 8	石原	伊藤真由美	軽傷（祖母・母）
4・英・A 3	岡本	赤穂　恭子	軽傷（祖母）
4・英・B56	伊藤	八木かおり	重軽傷（妹）
4・英・B21	八日市屋	並木由美子	軽傷（母）
4・史・A20	小林	蔭山　紀子	重軽傷（祖母）
4・史・B 4	中村	中平　真由	重軽傷（叔母）
4・史・B 9	中村・石田	西本　奈美	重軽傷（祖父・祖母）
4・家・B50	松本	吉岡　智美	負傷（父）
4・栄・B50	林（利）	菊沢　　歩	重軽傷（叔母）
院・1・日本史	秋山	山名　博子	重軽傷（父）

短大関係

阪神・淡路大震災による被災教職員名簿（1995/3/30現在）

所　　属	職　名	氏　　名	被害状況	備　　考
短大　　家政科	教　授	壇　上　重　光	半　壊	
〃　　服装科	〃	伊　藤　令　子	半　壊	
〃　　家政科	〃	浅　野　晶　子	半　壊	H7.3.31 退職
〃　初等教育科	〃	新　谷　映　子	全　壊	
〃　　〃	講　師	辻　田　美　和	全　壊	
〃　家政科(糧)	助　手	糸　井　亜　弥	全　壊	
〃　　服装科	講　師	筏　　千恵子	全　壊	H7.3.31 退職
〃　　庶務課	課　員	斎　藤　真理子	全　壊	単身
〃　　〃	〃	田　中　雅　子	半　壊	単身
〃　　保健室	技術職員	坂　東　節　子	半　壊	
〃　　施設課	労務職員	大　西　通　水	半　壊	
		計	11 人	

学生・被災状況調査

Ⅰ．人身損傷等

(1) 学　生　　死亡・負傷等　　0名

(2) 保証人　　死亡　　1件　　2名

No.	所　　属	氏　　名	続　　柄	内　　容	
1	家一2F　44	吉　田　美　保	父・大治（50才）	死　　亡	自宅全壊
2	〃	〃	母・洋子（45才）	〃	〃

Ⅱ．家屋等被害

（1年次生）

自宅全壊（全焼）・半壊（半焼）No.			
学年学科ｸﾗｽ	担任・ｾﾐ指導	被災学生名	備　　考
1・服1A	伊藤　安子	阿瀬　由子	半壊
1・　〃	〃	阿部　香織	半壊
1・　〃	〃	石井　直子	半壊
1・　〃	〃	内堀　正代	半壊
1・服1B	吉谷千恵子	小林香緒利	半壊
1・服1C	伊藤　令子	藤本　　望	全壊
1・　〃	〃	二股　奈美	半壊
1・　〃	〃	村越　裕子	全壊
1・服1D	糟谷　　奨	矢戸由美子	全壊
1・　〃	〃	吉村　順子	全壊
1・　〃	〃	中野　綾子	全壊
1・　〃	〃	橋本美千代	半壊
1・　〃	〃	前間こずえ	半壊
1・栄1A	中田　　瀞	浅川美千子	全壊
1・栄1B	森下　敏子	上村志津子	全壊
1・栄1C	久保　加織	武山　優子	全壊
1・　〃	〃	田中　千文	半壊
1・栄1D	逵　　牧子	濱　　千佳	全壊
1・　〃	〃	松原　美穂	全壊
1・栄1E	清水　典子	峯平　静香	半壊
1・　〃	〃	宮代　香織	半壊
1・　〃	〃	吉井　稔恵	全壊
1・　〃	〃	溝尾圭緯子	半壊
1・－1A	梶原　君江	秋山　美佳	半壊
1・　〃	〃	今村　紀子	全壊

自宅全壊（全焼）・半壊（半焼）No.			
学年学科ｸﾗｽ	担任・ｾﾞﾐ指導	被災学生名	備　　考
1・〃	梶原　君江	大岡佐登美	半壊
1・－1B	大江　隆子	片平　陽子	全壊
1・〃	〃	河野　智恵	全壊
1・〃	〃	小長谷伸子	全壊
1・－1C	林　孝三	近藤　友里	全壊
1・－1D	廣田　周子	橋本　史枝	半壊
1・〃	〃	田中　香世	全壊
1・〃	〃	田中　真紀	半壊
1・〃	〃	谷口美由紀	半壊
1・〃	〃	都築　正代	半壊
1・〃	〃	豊永　好美	半壊
1・〃	〃	内藤　美和	半壊
1・－1E	武藤美也子	難波江愛子	全壊
1・〃	〃	藤木久美子	全壊
1・〃	〃	藤木ゆかり	半壊
1・－1F	山田　勉	松谷　有子	全壊
1・〃	〃	松本　美紀	全壊
1・〃	〃	松本　佳子	半壊
1・〃	〃	水田　朱	全壊
1・－1G	上野　和廣	森本　麻友	半壊
1・〃	〃	矢島　麻子	半壊
1・〃	〃	保井　瑞代	全壊
1・〃	〃	吉冨　友絵	半壊
1・〃	〃	渡辺友季子	全壊
1・－1H	北岡　宏章	硤合　由佳	半壊
1・〃	〃	高嶋　菊恵	半壊
1・初1A	淺木森和夫	佐藤　純子	全壊
1・初1B	半田　博	寺尾　典子	半壊
1・〃	〃	中村　有希	半壊
1・〃	〃	東良多希子	半壊
1・〃	〃	細川　綾子	全壊

（２年次生）

自宅全壊（全焼）・半壊（半焼）No.			
学年学科ｸﾗｽ	担任・ｾﾞﾐ指導	被災学生名	備　　考
2・服2A	都倉美千代	東　由美子	全壊
2・　〃	〃	池澤　仁美	半壊
2・　〃	〃	植田　真紀	半壊
2・　〃	〃	尾崎　正江	半壊
2・　〃	〃	尾谷亜矢子	半壊
2・　〃	〃	北本　恭子	全壊
2・服2B	谷山　澤子	谷　ゆかり	全壊
2・　〃	〃	平沼　博子	全壊
2・服2C	筏　千恵子	堀　美知世	全壊
2・　〃	〃	吉岡　紀子	全壊
2・　〃	〃	和田　亮子	半壊
2・服2D	高岡　京子	澤村　知子	半壊
2・　〃	〃	安田　裕美	全壊
2・栄2A	正井千代子	天田　真美	半壊
2・　〃	〃	有光　映子	全壊
2・栄2B	中尾美千代	香川　真紀	全壊
2・　〃	〃	金原久美子	全壊
2・栄2C	中山不二雄	才木　夏枝	全壊
2・　〃	〃	佐藤　　恵	全壊
2・　〃	〃	柴田　美穂	全壊
2・　〃	〃	高橋　麻里	半壊
2・　〃	〃	高橋由紀子	半壊
2・栄2D	山本　隆子	友定　奈南	全壊
2・栄2E	西川　貴子	林　亜紀子	全壊
2・　〃	〃	福本　知子	半壊
2・　〃	〃	前泉　朋子	全壊
2・栄2F	森内　安子	丸尾　純代	全壊
2・　〃	〃	山石恵理子	半壊
2・　〃	〃	山崎　ゆか	全壊
2・－2A	森本　直明	穐近　悦子	半壊
2・　〃	〃	大薮　実江	全壊
2・－2B	別所須実子	上平　幸子	全壊
2・　〃	〃	河島　和子	半壊
2・－2C	神田　精一	曽我有美子	全壊
2・　〃	〃	立花　千鶴	全壊
2・　〃	〃	辰　　早苗	半壊

自宅全壊（全焼）・半壊（半焼）No.			
学年学科ｸﾗｽ	担任・ｾﾞﾐ指導	被災学生名	備　　考
2・－2D	松浦紀美恵	田原千恵子	全壊
2・　〃	〃	鶴谷　由夏	全壊
2・　〃	〃	出口美矢子	全壊
2・　〃	〃	中村　佳恵	半壊
2・－2E	壇上　重光	古川　千夏	全壊
2・－2F	米山富士子	宮脇　節子	半壊
2・　〃	〃	森岡　直子	全壊
2・　〃	〃	吉田　奈美	半壊
2・　〃	〃	吉田　美保	全壊
2・　〃	〃	吉村　紀子	全壊
2・－2G	奥野　　直	香川由紀子	全壊
2・－2H	林　　智子	中尾たまき	半壊
2・初2A	入江　昌明	小原由企子	全壊

Ⅲ．家屋等被害・集計

	全　壊（焼）	半　　壊	合　　計	備　　考
1年次生	26	30	56	文書による回答
2年次生	31	18	49	担任・電話による調査
合　　計	57	48	105	

有志によるカンパの報告

今回の大震災で被災されて、家屋が全壊・半壊の被害を受けられた教職員の方々に対するカンパを、２月初旬に呼びかけましたところ、

賛同・協力者：　82名
カンパの総額：　235万　5千円

となりました。

カンパにご賛同・ご協力下さった皆様の善意を、別紙記載の教職員の方々に、５月11日にはお贈りすることが出来る運びとなりました。（147頁参照）。

実は３月末にはカンパは終了して、すぐに被災された方々にお渡しする準備をしましたが、当初に申し出のありました方々以外にも罹災証明書をご持参される方がかなりの人数になりました関係上、配分の調整に手間どってしまって、報告がおくれましたことをおわびします

発起人一同、ご協力くださった教職員の皆様に感謝して、ご報告いたします。

なお、会計面でお世話してくださった庶務第二課の東　正彦課長に、この場を借りてお礼申します。

以　上

１９９５年５月９日

発起人：田中敏隆、事務局長ならびに各学科主任

平成７年５月15日

教職員　各位

有志による被災学生に対する見舞金の報告

学生部長　倉敷千稔

この度の阪神大震災による被災（全壊・半壊）学生に対する見舞金につきまして過分なるご協力をいただきまして有難うございました。厚くお礼申し上げます。

なお、見舞金につきましては下記の通り処理させていただきましたのでご報告申し上げます。

〔見舞金収入〕

平成６年度卒業生	３，０００，０００
教　　職　　員	３，０２０，０００
学　　友　　会	５，０７２，４６７
永田涼子四回生（父）	５０，０００
原　利江（Ｈ４卒業）	２０，０００
瀬戸短期大学学友会	４５，０００
合　　計	１１，２０７，４６７

分割払い残金 295,000円含む

〔見舞金支出〕

被害状況		人数	見舞金	合計
学生	全壊	６１	１００，０００	６，１００，０００
	半壊	５９	５０，０００	２，５９０，０００
振込手数料				７５，９１１
合　　計				９，１２５，９１１

〔教職員見舞金〕

被災者　２９名	見舞金合計	２，０４０，０００

〔見舞金決算〕

収入	支出見舞金	残高
１１，２０７，４６７	１１，１６５，９１１	４１，５５６

神教委博館第９５２８号
平成７年７月３日

神戸女子大学学長
行 吉 哉 女 様

神戸市立博物館館長
宮　崎　辰　雄

ボランティア派遣のお礼

謹啓　梅雨模様の続くこの頃でございますが、貴大学にはますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、この度の阪神・淡路大震災にて当館も思いも寄らぬ被害を受け、再開に向けて呆然自失の毎日を送っておりましたところ、ボランティアのご派遣や種々のご高配を賜りまして誠にありがとうございました。厚くお礼申し上げます。

建物や展示の修繕、修復にもまして、３万有余の資料の震災後の整理や点検に、どれほどの時間や労力を要するものかと気が遠くなる思いでございましたが、長期間にわたる多くのボランティアのお力によりましてやっと先も見えてまいりました。

私ども職員一同は今後も皆様のご好意にお応えすべく、館の復旧と再開に向けて最善を尽くす所存でございます。何とぞ今後とも倍旧のご指導とご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

先ずは略儀ながら書中をもちましてお礼申し上げます。

啓白

神教委博館第９５１１７号

平成７年９月６日

神戸女子大学長

行 吉 哉 女 様

神戸市立博物館館長

宮　崎　辰

第２次ボランティア派遣のお礼

謹啓　今夏の猛暑は昨年に引き続き記録的なものでございましたが、やっと朝夕は涼しさも感じられる候となりました。貴大学にはますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、阪神・淡路大震災で被災いたしました当館は復旧ははるかな先かと思い、職員一同沈みがちな折、４月当初からボランティアを派遣下さり、多くの資料の整理や点検にお力添えいただきまして勇気づけられるところも大きく、予定よりも早く作業を完了致しました。

また、今回は夏休みという貴重な時期にもかかわらず、第２次のボランティアを派遣下さいましてお礼の申し上げようもないほどの有り難さを感じております。今回はことに、クーラーの効かない中での汚れ物の片付けの作業が多く大変なご迷惑をおかけしましたが、全員汚れるのも厭わず喜んで作業を進めて下さり、学芸員も大層感心いたしております。

私ども職員一同は皆様のご好意にお応えすべく、明年１月の再開に向けてこれまで以上に全力を尽くす所存でございます。何とぞ今後とも倍旧のご指導とご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

先ずは略儀ながら書中をもちましてお礼申し上げます。

啓白

あ　と　が　き

高　橋　省　己
（教授・常任理事・前副学長）

この度の震災の記録は１月17日の地震の発生から、４月５日の短期大学の入学式、４月６日の女子大学および大学院の入学式までのものを主として記録しました。

この間に家屋が崩壊して道路は至る所で往来が困難になりました。あちこちに火災の黒煙は舞い上がり、空にはヘリコプターが西に東に飛ぶ音が終日慌ただしく聞こえていました。このような障害がありましたが、入学式が例年通りの日程で挙行されたことは、大学が一応正常な状態に復帰したことを物語ると言えます。

今回の震災に際しては地震発生後間もなく青野が原の自衛隊が出動して来て本学に駐留、翌々日の１月19日には村山総理大臣、引き続き関係閣僚の視察激励がありました。そして１月31日には天皇・皇后両陛下が自衛隊のヘリコプターで見舞いのために御来神、被災者を激励して下さいました。また皇太子殿下御夫妻のお見舞いがありましたことは、これらのことだけでも未曾有の災害であったことを物語っています。

震災地域で家屋が全・半壊した本学関係の被災者の方々に体験や感想を書いて頂くことにしました。しかし原稿を頂戴できなかった方もありました。心の痛手から立ち直るには周囲のあたたかい見守りと理解が肝要であることを痛感しております。私事ですが、東灘区という震源地の真中に居住していたにもかかわらず、幸にも家屋の損壊はそれ程でもありませんでしたが、道路は倒壊した建物で塞がれてしまいました。電気・ガス・水道はすべてストップし、電話は不通になって情報は入らず、何日も全く孤立無援の生活を強いられました。

こんな訳ですから、親元を離れて住んでいる沢山の学生を抱えた大学であってみれば、どんな体制を組んだらよいのかを、平素から十分に検討し立案して

おかねばならない案件だとつくづく思い知らされました。それにしても学園の近くに住んでおられる利点もあって、事務局長を中心とした事務局のメンバー（中には家屋の全・半壊の被災者もありますのに）や先生方が、学生指導や学内連絡に苦労して下さった事を知り、特筆して感謝したいと思います。

地震に対しての初期対策の遅れについての反省は、国のレベルでも地域のレベルでも真剣になされています。殊に初期の対応の遅れがなかったら、5500名という多くの人命は失われなかったのではないかという指摘は人々の心の中に大きなしこりとなって残っています。この問題についての議論は大きな社会的課題として真剣に論議されるべきでしょう。

ところで、震災の記録を単なる思い出に止めるのではなく、将来に対する対策検討の為の課題提起と考えることで、大きな意義を見出して行かねばならないと思います。

今回の記録の作成を契機として、本学の危機管理体制をつくる特別委員会をスタートさせて頂くことを切望して筆を擱きます。

（付記）：　今回の記録作成のために、貴重な原稿をお寄せくださった教職員の皆様と学生たちにあらためて謝意を表します。
また、編集委員として協力して下さった方々、すなわち井上太郎先生、小原郁夫先生、信太知子先生、久松英保先生、平田耕造先生（アイウエオ順）、雑賀一成事務局長のお名前を記して厚く感謝いたします。

阪神・淡路大震災記録集

平成7年9月

発行者　行吉哉女
編集者　高橋省己
発行所　行吉学園 6046
〒650 神戸市中央区港島中町4丁目7番2号
電話　078−303−4700(代)

印刷
製本　あさひ高速印刷株式会社
〒550　大阪市西区江戸堀2−1−13
電話　06−448−7521(代)